



東北発  
329号

# 東日本大震災に想う





## 329号 東日本大震災に想う

### 目次

表紙 「塩釜港 2011年3月21日」	芦澤 礼子	143
巻頭言 試される日本人の主体性と政治力	山田 靖子	138
鎮魂と記憶、そして再生へ	三船 照子	132
そのとき、そして被災地へ	芦澤 礼子	128
原発も核燃もいらない！	宮本久美子	122
菅総理！ 東電社長！ 御用学者の皆さん！		118
福島の子どもたちを見殺しにしないで下さい！	小川みさ子	110
ホントに環境にやさしい電気とは？	環境とエネルギーを考える研究会	93
原発震災 何を教訓にするのか	山崎 久隆	82
言いつづけて、訴えつづけて、これからも	——ある「卓話」から	70
ハノーバーから	末永 節子	58
「原発」の真実を知ろう	諸岡 亮子	
脱原発デモに参加して	登石 知子	
甲斐ある未来へ	綿津 靖子	
新潟から 中越より——柏崎と東日本大震災	梅里 蓮	
沖縄から 日米両政府は「火事場泥棒」？——大震災を利用した軍備強化を懸念する	押見 操子	
あつらのあつら	浦島 悦子	

# ためされる 日本人の主体性と政治力

大震災と原発事故。東日本を襲った二大パニック。

人びとは、政府と東電の仕掛けた計画停電に右往左往。放射能汚染に震え上がった。しかし、事故後、毎日大量に流されていた被災地の現況と、原発情報が減るにつれ、人びとはマスクをはずし、事故は収束したかのような、日常の顔に戻りつつある。

ちよつと待つてほしい。福島では、たくさんの子どもたちが被曝している。

「子どもたちを守りたい」と上京した母親たちが、文部科学省前で、「放射線量年間20ミリシーベルト」に、涙ながら抗議する姿を、私たちはテレビで見た。関東でも、ホットスポット（放射線量が高い地域）が、あちこちで確認されている。

原発事故直後、正確な放射能放出情報を得るのは無理でも、SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測システム）を使い、避難に役立てることは、できたはずだ。

政府は国民のパニックを恐れ、すぐには情報公開しなかった。

今年は、梅雨が早いようだが、瓦礫の撤去は、ほとんど手つかずのまま。伝染病などが蔓延する事態にならないように、と祈るばかり。

国民の命と生活、国土を守るのは、政府の責務。総力をあげて取り組んでほしい。

トップは、大胆に決断し、責任は自ら取る覚悟が求められる。

全基廃炉、再生可能エネルギーへの移行こそ、明日への道。

国民は、情報の受け身ではなく、自ら思考して、生活者としての執るべき道を熟視し、間違いにはすぐ声を上げることが、次世代への責務としたい。

（山田靖子）

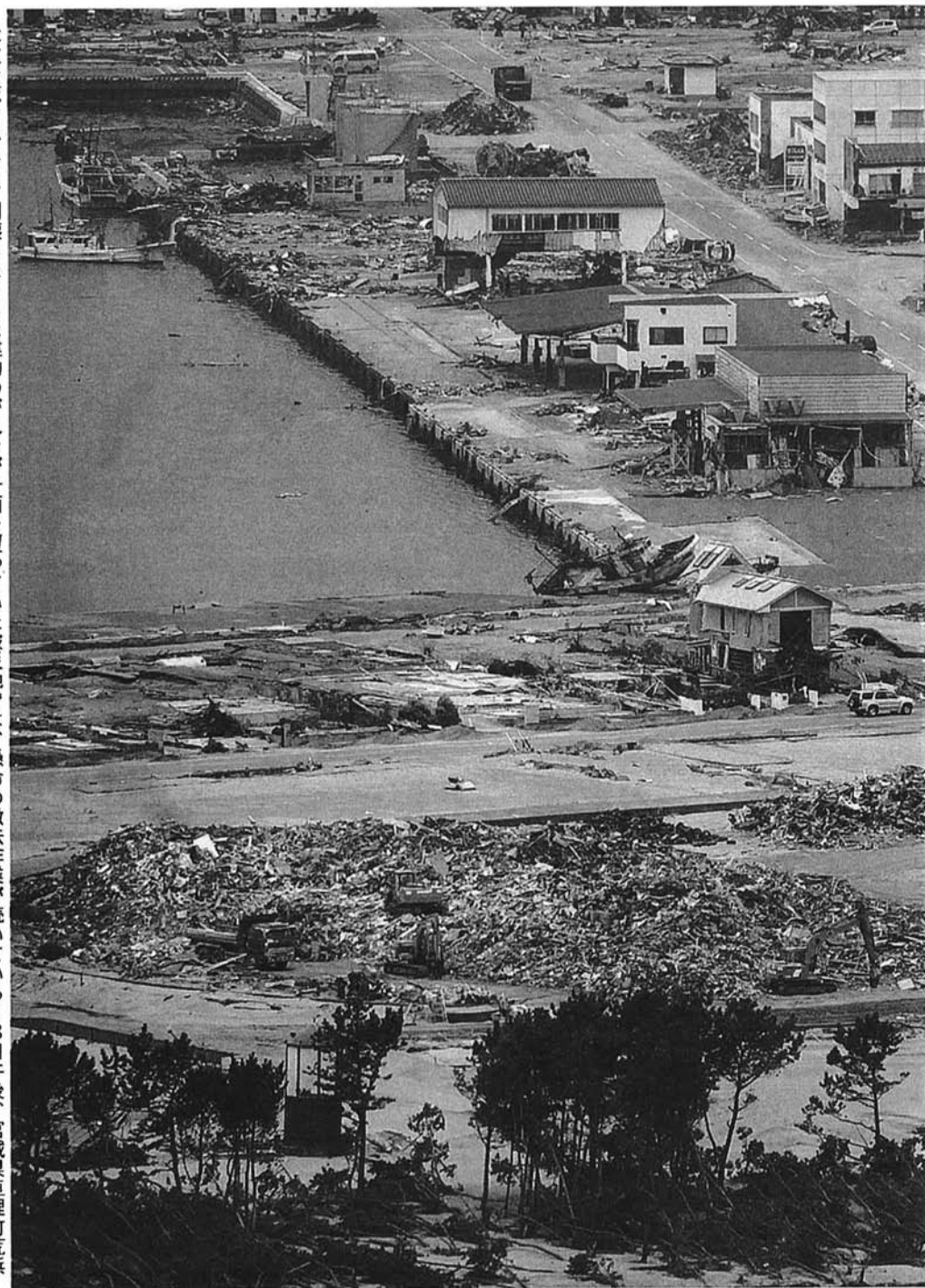


(「河北新報」平成23年4月11日より転載)



# 東日本大震災 1ヵ月

津波で流されたり、倒壊したりした建物のがれきが一面を覆っていた被災地では、懸命の撤去作業が続いている。8日午後、宮城県巨理町荒浜



仙台の  
丘陵地

# 道路波打ち傾く家

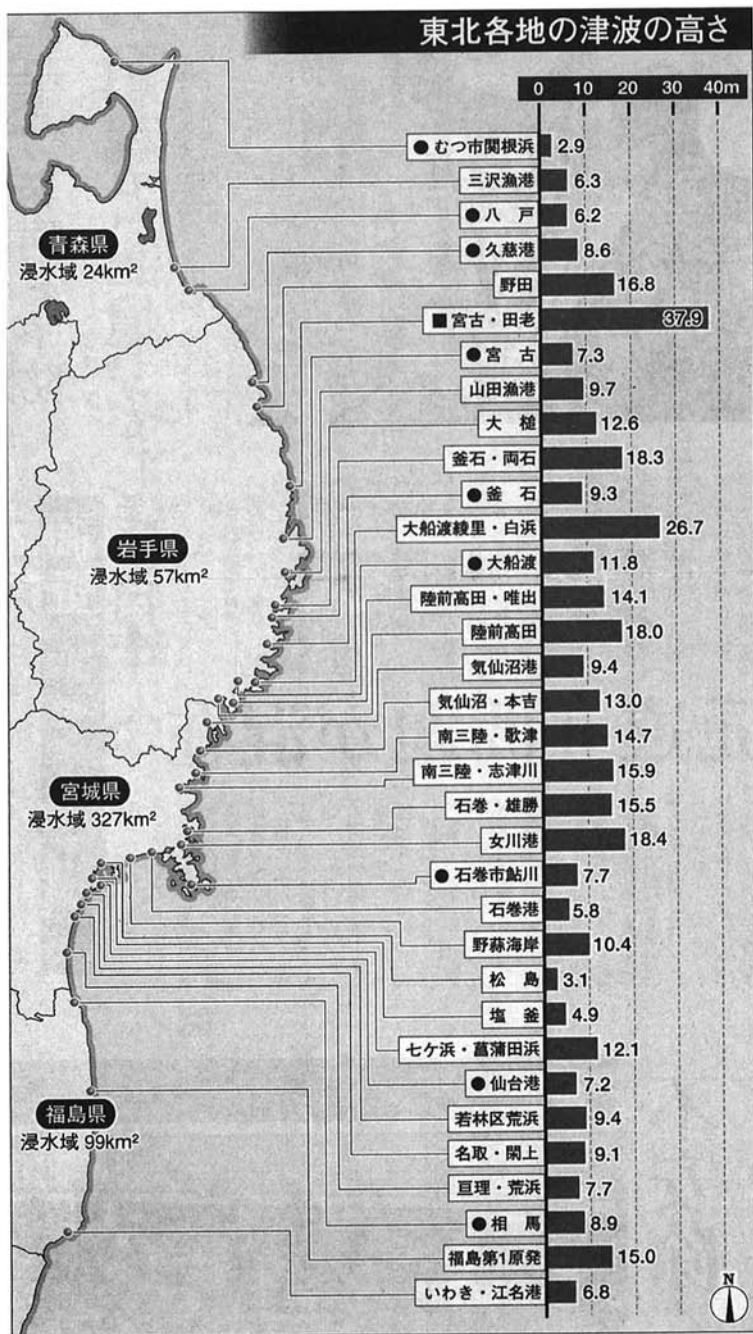
## 市、危険度判定急ぐ



㊦ 地震に伴う崖崩れで斜面に滑り落ちた住宅＝4日午後、仙台市青葉区西花苑1丁目

㊧ 地滑りで住宅や直線の道路がゆがんだ＝4日午後、同区折立5丁目

# 断層、20～30メートル滑る



津波、石巻内陸5キロまで

東北4県507平方キロ浸水「貞観」超える可能性

(「河北新報」  
平成23年4月11日より  
転載)

# 鎮魂と記憶、そして再生へ

三船照子

3月11日、午後2時46分に宮城県沖を震源とするマグニチュード9、最大震度7の大地震が発生しました。直後の大津波、そして地震・津波と同時に東京電力福島第一原子力発電所の事故が起き、「平成の国難」が始まったその日から80日が過ぎました。

津波に悪意などあるはずはないものの、破壊の極みの前でほうぜんとし、「ここまでやるのか」と何度絶句したことでしょう。がんばろうコールや復興コールを希望につなげ、涙を胸深くにためたまま再建の歩みを始める人もいれば、連日避難所から遺体安置所に足を運ぶ人がれきを取りのけ肉親を探す人もいます。

福島では、生きとし生けるものの尊厳を踏みにじるような指示や制限が常態化しています。未曾有と想定外、そして不信感と理不尽……。

この日の地元紙『河北新報』は、社説で、「想定外の揺れに備えたい／長周期の地震動」として、近年の地震のデータから注意喚起をし、東北工業大学神山真教授（地震工学）の「仙台や大崎地方のように、軟らかい地層が広く堆積している平野では、特に注意が必要だ」との意見も載せています。この社説に「津波」という言葉はありません。「大地震がくれば津波には

嚴重注意」という意識は太平洋沿岸部では当然ありますから。この日の午後、千年に一度とも言われる大津波が襲来するなど、いったい誰が予測しえたでしょうか。

毎日配達される新聞が、東日本大震災を保存する資料になって積み重なっていきます。付箋をつけた記事を読み直すたびに、その後のことが気にかかります。岩手県の陸前高田市には、目いっぱいはいける、元気な「氣仙町けんか七夕太鼓」があります。福島県相馬市には、人馬一体になって駆け回る「相馬野馬追」があります。

ここでは宮城県のみについて、変わり果てた太平洋沿岸の町と、そこにあった暮らしに思いをはせ、これから始まる長い再生の道のりを見つめていきたいと思っています。

## 落下物の音が怖い

2時46分、私はパソコンに向かっていました。鉄筋コンクリート住宅の3階です。グラツとくる大きな揺れにびっくりして急いで電源を切り、玄関に走り、右手でドアを開けたときには既にガタガタと大きな揺れが始まっていました。右手はドアノブをつかみ、左手は壁に押し付け、両足で踏ん張る。食器棚から飛び出した食器や流しの上の金物が落下し壊れる音、何かがドーンとぶつかり合う鈍い音、見えないところの音が不安をあおる。しつこい揺れは、3分、4分は続いたでしょうか。震度6強から7の間の揺れでした。

いつとき揺れがおさまり、外に出ると、ばたばたと近所の人が集まり、口々に恐怖を語る。



すぐさま子どもを学校に迎えに行く人、コンビニに走る人、座り込む人……。雪がはらはらと降り始めました。

部屋に戻ると、南北方向の向きにあったものの散乱がひどい。ガラスものの破片が怖くて、電気が通じるまでの3日間は、スリッパを履いたまま片づけ、動き回りました。

地震直後に、電気・ガス・水道は止まっています。5時ごろ、町内会の女性役員の判断で、炊き出しの準備が始まりました。既に指定避難所になっている小学校に行った人もいます。各自持ち寄った乾麺や野菜、町内会備蓄の水や調味料、薪などを使って野菜うどんが出来上がる。100食ぐらいいは、つくったでしょう。その夜は町内会の集会所が避難所になり、各自毛布や食料などを運びこみました。食事の片づけのあと、15人ほどの男女が、焚き火を囲みました。強い余震が続き、ざわざわと落ち着きません。

「14時49分に、気象庁が、青森から千葉にかけての太平洋沿岸に大津波警報を発令していたこと」を知るよし也没有ません。そのころエネルギーを蓄えた不気味な壁が、はるか沖合から太平洋岸の海岸線を目がけて走り出していました。

町なかから戻ってきた人の話やラジオで、仙台の海側の荒浜や隣の名取市、県北の気仙沼市や南三陸町の様子を聞くことになるのですが、三陸海岸から仙台平野一帯の沿岸を、瓦礫が埋めつくすほどの大惨事が起きていたことに、私の想像力は、ほとんど及んでいませんでした。「星を見る会になったね」とつぶやく男性につられて真っ暗な空を見上げ、甘いレモンティをすすりながら、氷点下の寒さのなか、毛布にくるまって、夜明けを待ちました。

5時過ぎ、『河北新報』を配達する女性が、「すごいことが起きました」と、一部置いていつてくれた新聞を、みんなで囲みました。

大津波で家屋が流された名取市、岩沼市の沿岸、冠水した仙台空港のターミナル。さらに仙台市内の倒れた石塀、外壁が崩落した大型家具店。アグリ・ビジネスを軌道に乗せていた名取の農家の女性たちの畑は？ と不安がよぎります。

同じ紙面で、「政府が原子力緊急事態を宣言」。東京電力福島第一原発2号機で原子炉の水位が低下したことにより、「国の原子力災害対策本部は原子力災害対策特別措置法に基づき、第一原発の半径3キロ圏内に住む6,000人に対し、避難指示を出した」と報じていました。昭和30年代、経済活動の膨張が始まったころにパンドラの箱を開けてしまったことを、この後、痛いほど思い知らされることになります。

## 「海辺の人のことを思えばね」

停電が続いていたので、集会所の宿泊所は3日間継続。炊き出しは、6食実施しました。ぼんやりの私は、テキパキと動く女性役員の連携プレーに見惚れ、じゃまにならないようにウロウロしていました。

12日と13日の夜は、懐中電灯とローソクで夜を過ごしました。余震が怖くて、うとうとしたのは明け方の3時間ほどでしょうか。単2の乾電池を切らしていたので、ラジオを聴くことも

できません。地震後初めてテレビを見たのは、14日の朝です。電話も通じました。

ガソリンと灯油の不足は3月いっぱい続き、物資輸送、避難所の暖房、路線バスの運行、ボランティア活動、企業活動などに支障をきたしました。「緊急車優先協力を／給油待ちトラブル多発」(3/27河北)。震災前の状態に戻ったのは、4月に入ってからです。

沿岸から15キロほど内陸の私のところの水道が復旧したのは、地震から10日後の3月20日。

トイレは浴槽の水で間にあったものの、生活用水は給水車の列に並ぶか、口コミで伝わる事業所などに、もらいに行くことになります。歩いて7～8分のところにあるサッシ・ガラス屋さんには、早朝、夜間、ずいぶんお世話になりました。雪の降る日、高齢の女性が重そうに水を抱えて歩く姿は痛ましく、「水運びボランティアさんがいればな」と思ったことでした。

食品や生活消耗品は、買い置きのもや、生協からの提供品や、ご近所同士で都合しあうものでつないだものの、一週間が過ぎるころから、「Aスーパーは店の前で売ってるよ。品物が少ないし個数制限もあるけど、何かは買えるみたい」など、あちこちの店情報が聞こえてきて、「こんな状態は数日で解消するから買い急ぐことはない」と、たかをくくりながらも、妙に落ち着きません。

3月20日の日曜日、商品がそろっているという駅近くの大型スーパーに向かいました。バスを降りたところからすで行列は始まっていて、警備員の指図に従い4列に並びます。「この分だと、2時間では無理ね」と言う女性とおしゃべりしながら少しずつ前進。ビルの陰は、けっこう寒い。2時間半待つて、ようやく入店。カセットコンロのボンベや野菜や果物を購入。

ほんの少し勝利者気分がわきあがるのがおかしい。長蛇の列は続いていて、ふと目が合った人に、申し訳ないような、後ろめたいような気持ちになる。このイベントに参加するのは、一回きりでやめました。

都市ガスは、全国53事業所から復旧応援隊がかけつけてくれたおかげで、地震から23日後の4月2日に復旧。仙台市全体の復旧は、4月16日でした。

地下鉄は私の日常の足です。地震で損傷を受けたために、私の最寄り駅を含む4駅が閉鎖になり、4月29日に全線開通しました。多少の不便はあったものの、そしてシャトルバスの行列に並びながらも、「海の人のことを思うと、こんなのはなんでもないわね」という言葉を、何度も聞きました。

4月7日夜中11時32分に発生した震度6強の余震は、3月11日の再来かと思うほどの強い揺れでした。この地震直後の停電と断水は、翌日の夕方には復旧しましたが、当たり前前に備わっていると思っているライフライン、普通にあると思っている暮らしそのものが借り物のような、そのうち消滅するのではないかと、いささかの悲壮感がありました。

気象庁の統計では、4月10日午後3時までに震度4以上の余震が94回もあったそうで、余震なのか「地震酔い」なのか、区別のつかないゆらゆら感、4月いっぱい続きました。

新聞は、『地震、長引く恐れ』（4/21朝日）という見出しで、地震学者12人に、今後の地震発生の予測を聞いています。取材した記者は、「日本はどこでも大きな地震が起きる可能性が

あることを、いつも考えておく必要がある」と、まとめています。予言者は、ちまたにたくさんいるようですが、「地点・時刻の予測は専門家にも不可能であること」の念を押されたようで、失礼ながら、「やっぱりね」と、あっさり納得しました。

## 東松島市・石巻市・女川町

「車にガソリンが入ったので石巻の知人を訪ねる」という人から声がけをいただきました。直接の知人を見舞うわけでもない私が、酷くいためつけられた地に足を踏み入れていいものか、という畏れ……。

2005年に鳴瀬町と矢本町が合併してできた東松島市の浸水率は36%。日本三景のひとつ松島の隣です。奥松島野蒜<sup>のび</sup>海岸には松林の続く海水浴場があり、後方は住宅地が広がる絶景の地でした。そこに押し寄せた10メートルもの津波は、近くを走るJR野蒜駅を破壊し、住宅や民宿を壊し去りました。かつてのこの場所を思い起こさせるものは、民宿のちぎれた看板だけでした。

矢本町には、海岸から1・5キロメートルのところに、航空自衛隊の松島基地があります。一機120億円もするF2戦闘機など航空機28機が、津波に流されたり水に浸かったりして、最大2、000億円以上の被害額になりました（3／15河北）。宮城県には、松島基地のほかに





東松島市 (4 / 6)



東松島市 (4 / 6)

沿岸部に多賀城駐屯地、仙台霞の目駐屯地がありますが、いずれも被災しています。傷んだものにカメラを向ける非礼、その一瞬、盗み撮りをするようで、心が痛みます。

県内一の水揚量を誇る石巻市は、造船業、紙・パルプも主要産業です。

石巻港魚市場の前は、すっかり広場になっていて、わずかに鉄骨だけを残してすべて撤去されています。私が加入している生協の練り製品の生産者の工場もすっかりなくなっていました。60人ほどの従業員をひとまず解雇し、再建を目指して奮闘の日々を過ごしておられます。

「紙不足苦しむ出版業界」という見出しで、「出版物やチラシに使われる紙の2割弱を生産している日本製紙石巻工場と岩沼工場、三菱製紙の八戸工場が被災」（4/6朝日）と。

広大な敷地には大きなロール紙や製品を運ぶ貨物列車からのコンテナが散乱し、火災で焦げた建物は、突然活動停止を告げられた巨大ロボットのようになり、ぼうぜんとして立ちつくしています。

女川町は、石巻、気仙沼に次ぐ、宮城県で水揚高3番目の漁港。「東北電力女川原子力発電所」がある町です。女川港には18・4メートルの津波が押し寄せ、3階建の町役場は屋上まで水没しました。町を見下ろす女川町立病院の1階は天井近くまで水位が上がり、駐車場にはカメラが裏返しになったように車がひっくり返っていました。病院の1階から運び出したものの中に、泥まみれの絵本がありました。町の建物の7割近くが全壊しました。

ビルを基礎の杭ごと引き抜き転倒させるほどの津波の破壊力に圧倒されます。



石巻市内 (4 / 6)



石巻港魚市場付近 (4 / 6)

専門家の調査では、「押し波や引き波といった横方向の圧力だけではなく、縦方向の浮力が作用して倒壊につながった可能性がある」ということです(5/22河北)。

日が陰りだしたので、避難所になっている高台の女川運動公園に向かいました。

女川で一番大きい避難所で、800人ほどが暮らしていました。物資を運ぶ人や車、ボランティアの人たちもいるようで、とても活気がありました。

電気は自家発電らしく、体育館の中はうす暗い。段ボールで家族分ずつ区切つてあります。入口近くにいた女性に、「少し届けものを持ってきましたが、どこに行けばいいですか?」と尋ねると、1階の事務所を教えてくださいました。

丁重に対応していただきうれしかったけれど、思えばとても不用心で、誰でも自由に出入りすることが出来ます。ハンドクリームや巾着ポーチやタオルなど、中途半端な数で迷惑かとも思っただけれど、喜んで受け取ってもらえました。

女川原発は、町中心部から車で25分ほどのところにあります。海面から15メートルの立地が幸いしたのか最大13メートルの津波をかぶることはなかったものの、地震によって3基が自動停止しました。

宮城県知事と女川町長と石巻市長が、4月26日に安全確認のため立ち入り調査をしています。知事は、「地震や津波の被害が最小限であることを確認し、安心した。稼働時期は全くわからない。国が今後定めるであろう基準に照らし、クリアしているかをしっかり見ていきたい」としています(4/27河北)。5月9日の定例会見でも、再稼働は認めていません。

## 海風はさわやかです

約1か月後の5月12日、再度、石巻市と女川町を訪ねました。

日本製紙石巻工場の中に散乱していた大きなロール紙は、海側の敷地にドームのように積まれ、そのかたまりが、いくつも並んでいます。遠目にはそれが何かわからず、友人と目をこらし、「あつ、紙ー」。瓦礫ばかりを見てきたせいか、ばさばさと海風にあおられている白いロール紙の端がきれいに見えて、しばらく眺めてしまいました。

仙台市の南にある日本製紙岩沼工場は、既に操業を再開しており、三菱製紙八戸工場は5月24日に一部復旧。日本製紙石巻工場は、9月末に一部の生産を開始します。

途中、石巻災害ボランティアセンターの前を通る。50〜60人ほどいたでしょうか。数人単位で個人宅の泥のかき出しや家具類の運び出しなどで活躍中でした。

「人手足りぬ／ボランティア帰る／ピーク時の半分以下」（5／10河北）。「石巻市で活動したボランティアは4月30日の1,544人をピークに減少。連休明けの5月8日には600人に減り、多くが首都圏などに戻ったとみられる。」とある。他の地域も状況は同じで、長期的な協力を求めているが、テレビで見ると、泥出しは、かなりの重労働で、終わりのない作業に懲りた人がいたのかもしれない。

石巻市は、「新エネルギー、環境、観光などを柱とした新産業創出や、減災まちづくりを通じて都市の創造」を基本方針に、復興計画案を11月に策定することになっています。





女川町立病院わき (4 / 6)



女川町 (4 / 6)

女川町立病院の駐車場から見下ろす女川の町は、1か月前より車道が少し広くなった分、がれきが壊れた建物のそばに寄せられていて、荒涼とした風景は前と変わありません。近くにいた人に、「瓦礫の撤去は1か月前から進んでいないようですが」と聞くと、「ここには、たぶん家は建たないだろうから(高台移転)、撤去は、もつとあとになるのかな」と同僚の人とうなづきあっていました。JR女川駅は津波で流出、復興のめどは立っていません。

女川町は、「安心・安全な港町づくり」「港町産業の再生と発展」「住みよい港町づくり」を復興の柱に、「8年間で復興を果たす」という方針案を決め(5/10河北)、復興計画の公聴会をスタートさせています。青い空と海からの心地よい風と、海からの恵みは、港町女川の人たちの宝であることがよくわかります。

5月26日の午後、気仙沼に所用があるという友人の車に同乗して、「フカヒレ」で有名な、気仙沼市に向かいました。

気仙沼市役所までは3時間の道のりで、さすがに遠い。海からはかなり離れている山の集落も破壊されている。どんなふうに入ってきたのか不思議なくらい奥まった里山です。集落の人にすると「ありえないこと」が起こっていました

『戦場のピアニスト』(2002/ロマン・ポランスキー監督)という映画があります。映画のチラシには、破壊され廃墟と化したワルシャワの街がCGで描かれています。帰途、すっかり日が落ちていました。道路の両側に延々と続く気仙沼の惨状は、このチラシの絵をはるかに超



気仙沼港 (5 / 26)



気仙沼市地域交流センターロビー (5 / 26)

えています。友人の表情も固く、おたがいにほとんど口をきくことができません。宮城県の瓦礫の量は23年分(3/28河北)。宮城県は3年をめどに、沿岸すべての撤去をすませる計画です。瓦礫の続く景色は、子どもの目にも大人の目にも酷すぎます。早期に、撤去が完了することをお願いが必要です。「がれき」という言葉を使うことに、ためらいがあります。津波が来るつい1時間前には、暮らしの容れものであり、日々の道具だったのですから。

「マグロ船2カ月半ぶり海へ」(5/24朝日・宮城版)。津波で県道に打ち上げられていた長さ60メートル、379トンのマグロ船が、国内最大級の起重機船のクレーンで吊り上げられ、海に戻された。港を活気づかせるうれしいニュースです。

港の内湾は、瓦礫が取り除かれ、誰もが「3月11日の午後に起きたことは悪夢だった」と思うぐらい水面が穏やかに揺らいでいました。気仙沼市地域交流センターのロビーには、「さがしています」と書いた紙が、ボードいっぱい貼られていました。

JR東日本が発表した線路の流出・埋没は、総延長60キロ。気仙沼線、石巻線、仙石線、常磐線で所どころ寸断され、復旧のめどは、立っていません。

「在来線復活の日は／バス代行に限界／にぎわいも消えたまま」(5/29朝日)。

通勤・通学にかかる時間が、バスと電車を乗り継ぐため5割増しほどになる不便は、たいへんです。国・JR・自治体の模索は続くものの、見通しは不透明とのことです。

## 「津波でんでんこ」

「三陸って、今までも大きい津波がきていたでしょう」と、遠くの人から聞かれることがあります。たまに、「過去の経験から学んでいなかったの?」「うかつだったんじゃないの?」というニュアンスを感じる時があります。もともと関西人の私も、仙台在住30年、つい気持ちはムキになって、「三陸沿岸の人たちは、日本中で津波の怖さを一番知っているし、備えもしているし、幼稚園児から高齢者まで熱心に避難訓練もしていたんです」と口ごもります。

物理的な備えとしては防潮堤があげられます。

岩手県宮古市田老には、高さ10メートル、総延長2、433メートルの、世界に類をみない防潮堤がありました。37・9メートルの津波に遭っては、ひとたまりもありませんでした。5月31日の朝日新聞に「津波高さ40・5メートルまで／宮古市で研究チーム分析」とありました。宮古市重茂姉吉地区には、およそ10階建てビルの高さに相当する津波がきていたそうです。釜石には、ギネスブックに載るような頑強な湾口防潮堤がありましたが、18メートルもの津波には歯が立たず、破壊されてしまいました。

1896年6月15日の明治三陸大津波で38・2メートルの大津波を経験した、大船渡市綾里白浜は、世代が変わっても、住居は高台に建てていた。今回26メートルもの高さまで到達した津波は、浜辺を囲んだ高さ3メートル、幅約1メートルの分厚いコンクリートの防潮堤を破壊し、



200 呎も吹き飛ばすほどの威力だったが、約60世帯が住む地区に人的被害はゼロで、家屋の浸水もなかった(3/27河北新報)。

明治三陸地震津波(明治29年)を想定して防潮堤を造ってきた岩手県は、10メートル超、昭和チリ地震津波(昭和35年)を想定していた宮城県は、5メートル級、福島は、最も高い波が観測された大正2年の台風の記事から6メートル級と、太平洋沿岸各県が想定する防潮堤の高さは、ばらばらでした(5/14日朝日)。

東北大学の今村文彦教授(津波工学)は、「過去最大の津波を基準にするなどして、各県とも、想定する津波の高さや防潮堤の強度を客観的に見直すべきだ。避難対策などソフト面も、合わせて考えないといけない」と指摘しています(5/14朝日)。

大津波を想定した避難訓練は、日ごろから沿岸各所で行われていました。ただ、過去に大きな津波に見舞われたことのある北部の三陸沿岸と、「これまで大きな津波がきたことがないし、ここには来ない」と思っていた石巻沿岸から南の地域では、その取り組みや意識に違いがあったことは否めません。また防災訓練マニュアルどおりに行動したことが災いし、多くの命が失われたことも事実で、いま「マニュアルの見直し」が各所で行われています。

「先生ら機転 犠牲者ゼロ」(5/8朝日)という見出しの記事を読んで、自分を責めている先生方は、どのようにご自身の心を回復されていくのでしょうか。

東松島市浜市小学校では、2階の理科室での5時間目の授業が終わり、休憩にした直後だっ

た。激しい横揺れのあと、キャスター付きのテレビや実験用の台車が床を滑る。直後に、停電。教師は駐車場の自分の車に走り、車内のテレビをつけた。三陸沿岸に大津波警報が出ている。子どもたちへの指示や行動は早かった。

階段をあと5段上がれば2階に届くところで、津波は止まった。約150人の子どもと避難してきた女性や高齢者300人は3階に移る。家が押し流され、何十台もの車がぶつかり合いながら校舎に激突する。この教師の車も流された。

浜市小学校は、2010年2月27日のチリ地震後、決まりを見直す議論を重ねていた。大津波警報の場合、校庭での集合をやめ、迎えに来た保護者とともに校舎に待機し、警報解除まで、学校にとどまらせる。その方針を新年度から徹底させようとしていた矢先だった。浜市小学校の子どもたち146人は、4月21日、他校に間借りして新学期をスタートした(5/8朝日)。

岩手県釜石市鵜住居地区は、津波で壊滅状態になったが、鵜住居小学校(約360人)と釜石東中学校(約210人)の児童・生徒は全員無事。両校の迅速な避難劇は、「奇跡」とも言われている。

鵜住居中学校は、4年前から群馬大学などと協力し、津波防災教育を授業に導入した。2年前からは年に一度、鵜住居小学校と合同訓練も実施。「小学生を先導する」「まず高台に逃げる」との教えを徹底してきた。そして津波がきたら、取るものも取らずでんでばらばらに逃げる「てんでんこ」の言い伝えを守った。この日欠席などしていた両校の3人は、津波の犠牲になった(5/19河北)。

東松島市のとなり、石巻市の北上川河口近くにあった大川小学校は、全校児童108人のうち74人、教員13人のうち10人が、死亡または行方不明になりました。

校庭に集合し、高台に向かっているところを猛り狂う津波に襲われました。運よく助かった当時5年生の少年が、そのときの様子を、とつとつとテレビで話していましたが、落ち着いて話す様子がかえって痛ましく、子どもの心のうちを思うと、不安が募ります。6人の子どもが見つかっていません。親たちは、今も子どもを探しつづけています。

仙台市の南、名取市<sup>なりき</sup>閑上の特別養護老人ホーム《うらやす》の入所者は、ほとんどが要介護者のお年寄りで、163人のうち43人と、職員4人が死亡。また「東北の湘南」を標榜していた福島県境の山元町の養護老人ホーム《梅香園》では、入所者34人と職員20人が死亡し、12人が行方不明になっています。車いすの入所者は2人がかりで避難バスに乗せるなど、恐怖と混乱のなか、ギリギリまで入所者を守られた職員の皆さん、ほんとうによく頑張られました。

## Ⅱ合掌Ⅱ

被災した社会福祉施設は東北3県875カ所で、9割が、高齢者施設（厚生労働省5月13日まとめ）です。

警報への慣れや俗説、あるいは「家にいたほうが安全」という経験知、防潮堤の過信……、当然だが個人の「判断」が明暗を分ける。「危ない！ 逃げる！」と逃げたあとで、足が不自

由な近所のお年寄りを助けるために戻り、何人かを助けるうちに、流された人がいます。高台や避難所に一度は避難し、「来ないみたいだね」、「寒いから上着をとってこよう」と戻ったときに津波にさらわれた人もいます。「助かった人の運が、ちよつとよかっただけ」と、命拾いした人が話していました。「津波でんでんこ」の言い伝えは、これからもずっと語られてゆくことでしょう。

## 仙台市の場合

4月の統一地方選挙は、岩手、宮城、福島は、震災の影響で実施が延期されました。延期期間は最大6か月で、9月22日までとなっています。延長になるかもしれないので、宮城県議会議員選挙、仙台市議会議員選挙の実施は、ともに未定です。

4月の選挙では、原発立地県の北海道、福井、島根、佐賀で、原発容認派の現職知事が当選しました。原子力発電についての朝日新聞社の電話による全国世論調査（5／21・5／22実施）の結果は、「原発がある13道県は、原発がない34都府県に比べて事故や放射能の不安が大きい」（5／31朝日）とのこと。各立地市町村や、その周辺自治体では、「原発ノー」という有権者が多かったかもしれないが、道県レベルの総意にはならなかった。結果的に、福島の住民の苦悩に自分を重ね合わない有権者のほうが多かったわけですね。

このとき、にわか候補者の公約に付け加えられたことに、「安全対策の見直し」とか「災

害に強い町づくりをします」というのがありました。

震度6強の地震による被害は、仙台市内全域におよびました。なかでも丘陵地に建てられた折立団地や西花苑団地、傾斜地の緑ヶ丘団地などは、崖崩れや地滑りなどで、住宅が斜面に滑り落ちるなど、深刻な被害がありました。4月7日夜の震度6強の余震によってさらに陥没や地割れも起きました。補償について市との話し合いが続けられていますが、宅地の改修・復旧は補助の対象外で、「市は国に対して新しい制度の創設を要望」（5/23朝日）しているところです。

仙台港も大きく被災しました。「仙台港「抜港」（本来寄る予定だった港への寄港をとりやめること）相次ぐ／外国船が原発忌避／宮城県、安全アピール」（5/20河北）。

仙台空港は周辺が泥の海と化し、瓦礫や車で埋まった滑走路とターミナルビルの一部が復旧し、4月13日に、国内線の一部で旅客機の運行が再開しました。

津波による浸水で、宮城県は沿岸部の農地の11パーセントが被害を受けました。

浸水は仙台市宮城野区が35パーセント、若林区が56%と広範囲にわたっています。

仙台港から宮城野区・若林区を縦走する仙台東部道路は、6メートルの盛り土構造で、海岸線から3〜5キロのところを走っています。200人から300人が亡くなった若林区荒浜あたりでは、唯一高い位置にあります。



仙台港付近 (5 / 12)



仙台市若林区荒浜付近 (5 / 12)

内陸4キロまで押し寄せた津波から、この道路に逃げ込み、231人が助かりました。家や車を巻き込んで押し寄せる泥水が、東部道路にぶつかり、道路がガムのように水をせき止めました。もともと住民は東部道路を一時避難所にするように市に求めています。昨年には1万5千人が署名した要望書を出していましたが、市は「本当に必要なことなのか勉強中だった」(4/3朝日)。署名の重みは地域住民の実感そのもので、市の判断が先延ばしになったことが悔やまれます。

仙台市若林区荒浜地区の調査をした今村教授は、「津波の高さが10メートルに達していて、平野部としては世界最大級」と報告しています。今村教授は、過去の調査から、869年の貞観津波が今回の仙台平野と同じように、6キロ内陸にまで押し寄せていたことを報告されています。東北学院大学の松本秀明教授(地形学)は、「地質調査で約2000年前の弥生時代の津波でも、今回と同じ程度浸水していた可能性があること」を発表されている。

今村教授は、「想定外の強い津波が来た。防災対策に携わってきた自分としては、忸怩たる思いだ」(3/18朝日)とも話しています。

4月22日、仙台市は両区の沿岸部に、重機150台、ダンプカーなど240台、作業員1千人を入れて、宅地に流入したがれきや流木の撤去を開始しました。3〜4カ月かかる見込みで、そのあと農地のがれき撤去に入り、分別などを行い、すべての作業が終わるまで3年程度かかるということです。

仙台市は、5月20日に復興構想骨子を固めました。ビジョンは、市民との絆や協働、減災の考え方を重視した「新次元の防災環境都市」がコンセプトで、計画期間は本年度から2015年度までの5年間。前期を「復旧・再生期」、後期を「発展・創出期」に設定しました。

市は、家屋が全壊するなど甚大な被害に遭った海岸線に近い地区の約2,600世帯は、集団移転を基本に据えるなど、今回の震災であぶり出された市の課題や弱点の改善に取り組むことになります。まずは財源確保。ビジョンが実現したとき、そこに投じたお金は、未来につながる安全として、それは復興の一つのモデルになるように思います。

## 協働と絆

今回の震災で、これほどの苦難のなかでも秩序を守り、譲り合う日本人の精神性の高さが、海外メディアに称賛されました。「東北の人は我慢強いから……」という言葉も、何度も耳にしました。悲嘆のなかにある人へのいたわりとは思いつつも、「えっ？ だからなんですか」と、いずさ（不快感、心地悪さ、収まりが悪い感じなど）も感じていました。東北は、歴史的に我慢を強いられてきたし、自然風土の厳しさから身につけた我慢強さはあったにしても、我慢強さを「東北人の美質」のように言われると、それはちよつと違うのではないか。

災害に見舞われたときに必要なものは、どの地方の人も同じです。「ぬくもりと安らぎ」ではないでしょうか。今回のように、津波で家をなくし、強いショックと恐怖のなか、着の身着



のまま避難所に逃げ込んだ人に必要なのは、身の安全と休息と温かい食べ物です。

「みんなもたいへんだから、我慢しないと。あれこれ言ったら迷惑をかけるから」と、あたりを気遣い、寒い体育館で我慢し、冷たいおにぎり我慢し、トイレ我慢し、しだいに体調を悪化させ、病院に搬送されたものの手遅れで亡くなった人もいました。

気仙沼で、友人の応対をした人は、富山県から派遣されている職員で、「コピーとってあげましょか?」と声をかけてくれたのは、滋賀県から派遣されている職員でした。

「全国自治体、復旧応援／関西広域連合光る存在感／阪神の経験生かす」。岩手、宮城、福島、茨城の4県を除く全43都道府県が、2万人を超す人的支援に乗り出している(4/27河北)。

自衛隊、地域の消防団、警察、消防は言うにおよばず、民間企業、NPO、任意団体、個人……、見当がつかないくらい多数の人たちからの支援活動が続いています。「災害復旧車」の横断幕を貼りつけた車を見ると、とても頼もしく感じますし、ACのコマーシャルならずとも、「ありがとう」の気持ちになりますね。

我慢強い人にも、そうでない人にも、等しく保障すべきは「安全に生存できて、安心して暮らせる環境を保障すること」です。人権を尊重する日本の文化として、災害が起きたとき、「どんな困難な状況にあっても、24時間以内に、必要とされる支援が提供できるシステム」があれば、どんなにいいでしょう。

通信手段や移動手段の確保、食料の供給、清潔な寝具と衣類、洗面・トイレなどの衛生環境が、備蓄品や周辺地域や全国からの支援で即座に整うシステムを持つと同時に、医療、保健、教育現場、乳幼児のいる家族、施設内高齢者、在宅高齢者、障がい者、移動サービスなど、それぞれの分野のプロフェッショナルが被災地の細部にまで入り込めるシステムがあれば、それは、安心・安全社会の成熟度を表す実力そのものではないかと思っています。

石巻日赤病院で災害医療コーディネーターとして連日奮闘される石井正医師の「震災後50日間の活動」がNHKテレビで紹介されていました。数日前、車で石巻日赤病院の近くを走りましたが、広い駐車場は車で埋め尽くされていました。頼りにされる地域医療の拠点として、病院スタッフが懸命に働いておられる姿を想像して、拍手をしながら通り過ぎました（友人はハンドルを握ったまま、言葉でエール）。

行政と民間（NPOや企業）協働の災害支援ネットワークが有効に機能するようなシステムづくりや、災害時に個別の分野で働けるコーディネーターの養成なども、社会のシステムとして位置付けることができれば、どんなに心強いことでしょう。あえて「絆」という言葉を使わなくても、いま被災地各地のさまざまな場面で、人と人の協働の力が発揮されているように思います。復興の長い道のりが始まっています。

5月31日現在の死亡者は、15,281人（9,124人）、行方不明者は8,492人、（5,189人）、避難所で暮らす人は102,271人。（警視庁まとめ／カッコ内は宮城県）

東北3県の被害額は14兆円で、沿岸部資産の22%を失っています。(日本政策投資銀行東北支店4月26日まとめ)、宮城県の被災漁船は登録漁船数の9割、12,000隻(5月13日河北新報社まとめ)、東北3県の沿岸で地域企業全体の3割の7,254社が被災(5/16朝日)、東北大学先端研究施設が受けた打撃は800億円(5/10河北)……、いずれも記録的な数字です。

「復興とは、失くしたものを震災前の状態に戻すことではない」というのは、おおかたの認識です。

再建、再生、創生……、ビジョン、財源、スケジュール……。

五百旗頭真氏を議長とする国の復興構想会議は、6月末までに第一次提言をまとめる方針です。宮城県は小宮山宏氏を議長に、4月21日に震災復興会議をスタートさせていて、8月中旬に復興計画最終案を出します。甚大な被害を受けた沿岸17市町の復興計画も、年内には出そろいます。整合性をつけ、前進するための議論が始まっています。

復興と回復の時間が、逝った人たちへの鎮魂とともにあることを願います。

(5月31日記) (仙台在住)

【河北新報】は「河北」、【朝日新聞】は「朝日」と表記しています。  
(同じ記事は「河北新報」のみを取り上げました。)

# そのとき、そして被災地へ

芦澤 礼子

3月11日午後2時46分。そのとき私は、ちょうど、地下鉄有楽町線有楽町駅で降りたところだった。ぐらぐらと揺れを感じ、あっ、と思った瞬間、周囲の人びとと共に、私もその場にうずくまった。地下鉄のトンネルにヒビが入るのではないか、駅の天井が落ちてきて埋まってしまうのではないかと、気が気でなかった。

揺れがおさまってきて、そろそろと身を起こして、人波に押されるように地上に上がった。有楽町駅前広場は、立ちすくむ人、うずくまったままの人、携帯を必死でかけようとしている人などで混乱していた。私が参加するはずだった「ニュージーランド地震救援募金活動」は、即、中止。地下鉄も停まっているので、今の職場である衆議院議員会館に、歩いて帰ることにした。有楽町からなら、どうということはない距離である。途中の日比谷公園には、周囲のオフィスビルから避難してきたらしき人びとが集まって、落ち着かない雰囲気だった。

議員会館の服部事務所では、本棚から本が飛び出したくらいで、大した被害はなかった。ところが、ちょうどその日の1時から服部良一事務所で「六ヶ所村核燃料サイクル施設」の問題で原子力安全・保安院と交渉した、関西の「コープ自然派」の3名の女性が、「新幹線が止まってしまって……」と困り果てた顔で引き返してきた。夜になっても新幹線は動かず、そ

の晩一晩、服部事務所に宿泊されることになった。その夜は、毛布と非常食が国会から支給されることになり、服部議員が深夜に議員宿舎に引き上げたあと、私たち秘書も、事務所で眠れない一夜を明かした。

次の日に社民党の「東日本大震災復興対策本部」が立ち上がり、福島第一原発事故の発生を受けて、「原子力発電所等事故対策本部」も引き続いて立ち上がった。

服部議員は「原子力発電所等事故対策本部」の事務局長に就任し、その日から服部事務所は原発事故の情報収集に日夜奔走することとなった。毎日誰かが事務所に泊まり込み、さながら合宿所のような状態であった。

服部議員は、「早く被災地に行つて、この目で見なければ」と焦っていた。「山形空港に飛んで、そこからレンタカーを借りて移動」という案は、空港近くのすべてのレンタカー屋が「ガソリンが不足していて車を貸せません」と答えて頓挫。そんなときに飛び込んできたのが「杉並区でバスを出して福島県南相馬市へ行く」という話だった。杉並区と南相馬市が災害時相互援助協定を結んでいるため、避難者搬送用のバスが南相馬市に向かうというのだ。南相馬市は福島第一原発から20〜30キロ圏内に位置し、「陸の孤島」と化している、と指摘されていた。

出発日時は3月18日早朝。それと並行して、仙台まで高速バスが3月19日から開通するという話が、党関係者からもたらされた。早速バス会社に連絡し、3月20日発・21日戻りの夜行バスを往復予約。服部議員は18日に南相馬市へ行つて19日に戻り、20日夜に仙台へ、という強行軍と

なった。そして、仙台へは私が同行するということに決まった。

### ◆宮城県（仙台市若林区・塩竈市・多賀城市）被災地の惨状を見る

3月20日夜10時半過ぎに上野駅から服部議員と夜行高速バスに乗り、朝6時半に仙台に到着した。到着したのはJR仙台駅付近で、高台のため津波の影響はなく、建物も、倒壊しているものは見当たらない。しかしよく見ると道路は微妙に波打ち、ところどころ、地割れも見られる。壁が崩落したり、ヒビが入った建物も見受けられる。JR仙台駅の駅舎は天井が落下したため立ち入り禁止になっていた。幸い、地下鉄はさしたる被害がなく、まず地下鉄に乗って、社民党宮城県連合を訪問した。田山副幹事長は、開口一番「ガソリンがなくて身動きできない」。毛布などの物資は仙台市内では足りるようになったものの、「高齢者世帯の片づけボランティアが急務だが、建物の安全診断がなされていないので作業ができない」などの困難があるという。市内で津波の被害が一番大きかった若林区出身の本多祐一朗県議とここで合流し、共に宮城県庁を訪問。若生正博副知事と面談し、被災状況の説明を受けた。副知事が示した宮城県全域地図には、海岸にびっしり赤い×印がついていた。×印は津波の被害のあった地域を示す。

「海岸線は、ほとんど壊滅的な被害を受けている。松島だけが少ない」「牡鹿半島は、根元の女川付近で津波が超えて、一時孤島状態になった」など、被害の実相を副知事は率直に語った。この時点で県内避難者は15万人。学校の体育館などに避難している人が多い。「体育館から体

育館への移動では困る。ちゃんと生活出来る場所を望む」「避難先の財政支援もぜひお願いしたい」「県北部は山と海岸線との間が狭く、高台に、仮設住宅をつくる土地がない。県外に出すしかない」「県外への避難については、地域のコミュニティを崩さない形で考えたい」など、県民の生活を守りきれない苦渋がにじむ。産業の被害も甚大だ。宮城県的重要産業である漁業、それに付随する水産加工工業は壊滅、農地は海水をかぶって使えない。県民の仕事を、今後どうすれば良いのか、という巨大な課題が宮城県政にのしかかっていた。

また、復興作業にあたって急務なのが、災害廃棄物(瓦礫)の撤去。「市町村が費用の半分を負担して処理することになっているが、市町村が壊滅しており、また避難者対策でいっぱい、やれない。国や県が10割の負担でやってほしい」「自衛隊も幹線道路の確保作業はやっているが、廃棄物処理は法律上やれない」「車や船についても所有者本人の許可がいるが、本人がどこにいるかわからない。とりあえずどこかに移動させないと、片づけが進まない」。このような声は被災地各地からあがり、政府は3月29日に「瓦礫撤去は全額国費負担で行う」との決定を行なっている。

市庁舎の中のホールは「大震災対策本部」となっており、防災服を着た職員や迷彩服を着た自衛隊員らでごったがえしていた。さながら野戦病院のような雰囲気だった。

また、市庁舎一階には支援物資の段ボール箱が積んであった。仕分けする手が足りないのかもしれない。ボランティア受け入れについて、副知事はその時点では「ボランティアはこれから必要だが、現状ではボランティアの食事や住居、ガソリンを、被災地が準備するのは難しい。

自己完結型でお願いしたい」と現状を報告した。ゴールデンウィークを中心に、宮城県には、多くのボランティアが訪れたが、「自己完結型」は基本となっている。

市庁舎を出て、地元の本多県議の車で若林区へ向かった。若林区は海辺の標高が低い農村地域で、仙台東部有料道路が区の真ん中を縦断している。道路を挟んで海側は、ほとんどすべての建物が津波で流されているか、崩壊している。集落ごと流されて、跡形もない場所もある。一方の道路の内側は大部分無事だ。道路が堤防になったことが、ひと目でわかる。

内側にある「六郷中学校」の体育館は避難者でいっぱいだった。毛布を一面に敷き詰めているが、仕切りはない。3月の東北はまだ寒いのに、灯油不足のせいかストーブも少なく、毛布にくるまったままの人も多かった。



若林区



服部議員は、避難している住民と共にストーブを囲み、話に耳を傾けた。

「防風林の松が大量に流されている。一本10トンもする巨木もある。国有林でもあり、国で片づけして欲しい」「農地の復旧が出来ない。冠水し、海水が引かない。農機具が使えない。

今後どうしていいかわからない」。——生活をどう立て直していったらいいのか、皆、途方にくれていた。

「海側に行ってみましょう」。本多区議の車で行けるところまで行く。

仙台東武有料道路の向こう側に抜けると、泥まじりの海水で冠水した農地が目の前に広がっていた。かろうじて残った家の中にも泥が流れ込み、さきほど聞いた「松の巨木が突っ込んでいる家」もあった。給湯器に残ったあとから推測すると、津波の高さは3メートルくらいか。10メートルを超えたという県北部より低いようだが、もともと平らな土地であるため逃げ場がない。仙台東武有料道路によじのぼって助かった人もいるが、海側の学校が、避難場所に指定されていたため、学校のグラウンドに逃げて津波にのまれた人もいるようだ。流されて壊れた車が、そこに打ち捨てられている。「×印のついている家や車は、調査が終わったものだ」と聞いた。遺体も多く発見されたはずだ。まだ調査が終わっていないところには、どれだけの人がいるのだろうか。

仙台市中央部まで戻って本多県議と別れ、タクシーをチャーターして、塩竈市・多賀城市の被災状況を視察した。塩竈市は、マグロの水揚げ量では日本一を誇る漁港だが、漁船が流されて道路に打ち上げられ、港はコンクリートがひび割れして、漁業がいつ再開できるかわからない

厳しい状況であった。隣が多賀城市は工業地帯で、精油精製基地や化学系工場などが多い。市の肝いりで誘致した自動車工場は、新型自動車を出荷する直前に被災したとのことで、めちやくちやにつぶれた車が、いくつかの山になっていた。仙台とその周辺の農業、漁業、工業のそれぞれの拠点を廻り、元々は産業が豊かな土地であったことも、また理解できた。そして、それぞれの壊滅状態は、信じられないくらい凄惨であった。

夜行バスが出る前に、全労協の事務所を訪問し、東北ブロック亀谷事務局長ほか組合員から話を聞いた。「仙台平野は津波を想定していなかった。津波は三陸沖だと思っていた」と悔やみ、「女川原発に反対し、海を守る運動を長年してきた生わかめの生産者が被災して、行方不明」「在宅介護の人は、避難所で床には寝られない。簡易ベットが欲しい」と



多賀城市

気づかう。

「内陸部の避難所からは家に戻った人が多く、毛布や食料は余っている。これをいかに海岸部に届けるかが問題だ。ガソリンが欲しい」と、ここでも、ガソリン不足がネックであるとの報告があった。

県北部については「11メートルの堤防も崩れた。今後同じように再建できるのか。学校や家を建てても、また流されるのではないかという無力感がある」という。しかし、家が辛うじて残り、車も残った組合員は、「私たちは被災者だけど、これからは助けるほうにまわらなければ」と気持ちを奮い立たせていた。

## ◆原発と震災、二重被害の福島県南相馬市

同じ被災地とはいえ、原発事故を抱えている福島は、被災の構造がより複雑である。服部議員が訪問した福島県南相馬市は「陸の孤島」化し、インターネット上で窮状を訴えた桜井勝延市長は、一躍「時の人」となった。私は南相馬市には同行しなかったので、ここには服部議員の視察内容をまとめて報告する。

服部議員は桜井市長を表敬訪問して現状を聞いたあと、避難所で南相馬市民百名の避難に立ち会い／介護老人保健施設ヨッシーランド被災状況視察／津波被災現場・避難所（万葉ふれあいセンター）視察／南相馬市立総合病院視察（院長・副院長より聴取）など、一日半という短

時間の中で多くの被災者に会い、話を聞いた。

そこでわかったことは「20〜30キロ圏の屋内退避指示は中途半端であり、特に危険度について間違った情報が出回り、パニック様相がある」ということだった。例えば「福島県警が圏内への立入を規制したり、運送業者が30キロ圏に入ろうとせず物資が届かなくなり、自衛隊員が『ここは危ない』と逃げたりして恐怖感を煽った」「福島県警が2万個のおにぎりを配布する際、『30キロ圏内は危ない』と入らず、屋内退避者に『取りに来るように』と告知し混乱を招いた」など、様々な事例が出てきた。また「20〜30キロ圏に置き去りにされる人（高齢者・入院患者）」の事例として「大町の介護老人保健施設に入所者180名が残り、職員は避難して4人しかないという窮状があり、餓死するしかないという訴えがあった」「南相馬市内の特養施設にいる250人が行き先がない状態」「入院患者130名の病院では、院長が説得しスタッフが40人残っているものの、薬剤や透析器材等が不足し、病院が独自に患者を避難させ、仙台医療センターに10人、北方老健に18人搬送し、残り100人余りが残留して、避難先を探している状態」など、原発事故が、特に弱い立場の人びとにより多くの犠牲を強いている現実が明らかとなった。

政府はその後、4月22日に福島第一原子力発電所から半径20キロ以遠の周辺地域において、気象条件や地理的条件により、積算線量が高い地域について、「事故発生から一年の期間内に積算線量が20ミリシーベルトに達するおそれのある区域」を「計画的避難区域」、「これまでの『屋内退避区域』で『計画的避難区域』に該当する区域以外の区域」を「緊急時避難準備区域」

に設定し、「計画的避難区域」は、向こう一か月を目処に計画的退避を実行するよう勧告した。それを受けて南相馬市でもいくつかの区域が「計画的避難区域」に指定され、5月末までに退避を余儀なくされた。しかし、全域が「計画的避難区域」に指定された飯館村では、退避した住民は5月30日時点で7割。川俣町では、計画避難区域となった山木屋地区の住民のうち避難したのは、ほぼ半数にとどまっている。一刻も早く避難するべきだとわかっていても、仕事のこと、移る先が確保できないこと、さまざまな要因で移れない人が多いのだ。服部議員は5月1日にも南相馬市と飯館村を訪問しているが、持参した線量計の数値がどんどん上がっていつて20マイクロシーベルトを超えたときには、不安がつのって背筋が寒くなったという。これは放射線管理区域に設定しなければならぬ値だ。文科省は4月19日、児童・生徒が学校で屋外活動を制限する基準を年間20ミリシーベルトと発表した。親が怒るのは当たり前である。

## 1999年にやり残したことを、今

「あごろ」では1995年の阪神・淡路大震災のときに特集号を2冊出した。2冊目のときには私は編集部にいて、地震発生から一年近く経っても、仮設住宅の問題、都市の再生の問題など、まだ問題は山積みだということを痛感した。今回は更に被害の規模は大きく、全く機能が壊滅してしまった自治体もある。宮城県の被災地に行つて、被災した自治体の深刻さを肌で感じ、復興への厳しい道のりを、改めて思い知った。

しかも原発事故のおかげで、事態はさらに複雑化する一方である。原発事故の収束がなければ、復興もできない。放射能汚染の範囲を考えれば、関東・東北全域は広義の被災地と言えるだろう。関東以西でも放射能が農作物から検出されたという情報もある。「事故は今年中には収束しない」との見通しを東電は明らかにしている。放射能が漏れ続けている場所で、私たちは、これから何年も（何十年も？）共に暮らしていかなければならない。

『あごろ』では1999年の東海村JCO臨界事故のときに『臨界事故と私たち』という特集号も出している。その号では、今は亡き高木仁三郎さんが事故の解説をしている。結びの「事故の責任と教訓」という章で、高木さんは、こう書いている。

「今回の事故の重大さに鑑みて、これまでの日本の原子力を産業たらしめていた基盤のすべてにわたって、安全のみならず、経済、社会、防災などすべての観点から全面的に見直し、さらに原子力に大きく依存した日本のエネルギー政策の全面的見直しが緊急の課題となった。」

そう、あのとき、1999年の時点で、この国は原子力に頼ったエネルギー政策からの脱却をやっておかねばならなかったのだ。高木さんの指摘は的確すぎて、恐ろしいくらいだ。今からでも遅くはないのか。もう遅いのかもしれない。それでも、今やらねば状況は、もっと悪くなるだろう。

社民党は服部議員が中心となり、「脱原発アクションプログラム」を作成した。

「2020年までに原発ゼロ」「2050年までにすべてのエネルギーを自然エネルギーに」という内容を掲げ、その可能性をデータで証明している。

実は2012年3月で、日本で稼働している原発は「ゼロ」になる可能性がある。福島原発で止まった原発と、定期点検中の原発を稼働させないでおけば、他の原発は、順次定期点検に入るため、来年3月には、すべての原発が止まってしまうのだ。この状態で、真夏の電力消費ピーク時(年間わずか10時間ほど)を乗り切れば、一つの証明ができることになる。

あの日以降、服部事務所には、毎日、脱原発グループが出入りし、原発事故関連の集会は、どこでも満員御礼である。

「福島原発10基をすべて廃炉にー」という署名を集めた「福島原発の『廃炉』を求める有志の会」は、8万筆に及ぶ署名を政府に届けた。

世論は今、原発への懐疑に動いている。電気が足りなくなったらどうするの? という不安は根強いが、そのような人も「原発でつくった電気」が欲しいのではない。1999年にやり残したことを、私たちは、今、やらなければならないし、今ならやり切れるかもしれないのだ。

### 【追記】

6月2日、自民党・公明党・たちあがれ日本によって衆議院に提出された菅内閣不信任案は、反対多数で否決された。しかし、菅総理が「震災復興と原発事故が一段落した時点で退陣」を表明し、いずれにせよ政権は不安定なまま、震災復興・原発事故収束に当たらねばならない。この日の夜「こんなことしている時間がもったいない。ゴタゴタしていたら先が見えなくなる」という被災者の言葉がテレビで報じられていた。国会議員は、この言葉を、どう聞くのだろうか。国会で働いていても、そう思う。

(2011年6月3日記)

(服部良一衆議院議員秘書)

# 原発も核燃もいらない！

宮本久美子

私たちは、「原発も核燃もいらない」と訴え続けてきました。「危険だ」と言ってきたことが、今、福島原発で起きています。事態は、どんどん悪くなる一方です。

3月11日、青森県も大きく揺れました。八戸や三沢で津波によって亡くなられた方もいます。六ヶ所再処理工場では、使用済み核燃料プールの水600リットルがプールの外にあふれるトラブルが起きています。この水が無くなれば、福島第一原発で起きていることが、六ヶ所再処理工場で起きたのです。

だが、六ヶ所再処理工場、東通原発の危機は、四月に来たのです。

## 危なかった4月7日の余震

青森県下北半島にある六ヶ所の核燃料サイクル全体（再処理工場、高レベル貯蔵施設、ウラン濃縮工場、低レベル処分場）と東通原発の外部電源が、4月7日、一時喪失しました。再処理



工場には原発から運び込まれた使用済み核燃料貯蔵プールがあります。その外部電源も、遮断されたのです。今回は非常用発電機で冷却し、その間に外部電源が復旧し、ことなきをえました。

東通原発は定期点検中で運転していなかったのですが、核燃料は貯蔵プールにありました。外部電源が停電した後、非常用発電機で貯蔵プールの冷やしていました。ところが発電機に燃料を送るポンプ付近から、軽油が200リットルも漏れだし、止まってしまったのです。非常用発電機は3台あるのですが、2台は点検中で使えず、外部電力の復旧が遅れたら大事に至ったかもしれません。

軽油漏れは、お粗末としか言いようのないミスでした。発電機の燃料循環ポンプのゴム製のパッキンを裏表反対に付けていたのです。このような人為ミスが重大事故につながるのです。

## 震度4で、なぜ止まったのか

六ヶ所村や東通村は、震度4にもかかわらず、電源が切れました。原因は300キロメートルも離れた宮城県にある宮城変電所が被災したため、東北の広い範囲で停電になってしまったことでした。青森県内全域が停電してしまったのです。

原発や核燃の地震、津波対策だけでは「震度4での電源喪失」という「想定外」は防げません。

5月5日、地元の新聞各紙に「東通 大間原発同時停止の可能性」との記事が載りました。「建設中の東京電力東通原発と電源開発大間原発は、外部と電気をやりとりする変電所が同一で、この変電所が地震などで全面停止した場合、原子炉が同時に自動停止する仕組みになっていることが、4日、わかった」という内容です。

東北電力東通原発も、六ヶ所再処理工場も、上北変電所から送電を受けています。4月7日の地震の時のように変電所が停止した場合、下北半島にある原発、核燃の、すべての外部電力が喪失することになるのです。そして、この時のように非常用発電機が確実に動く保障はないのです。福島原発事故後に緊急に配備された電源車の出力では、原発を運転したり、プールを冷やすことは、できません。

## 下北の人は逃げられるのか

まさかり半島ともいわれる下北半島の刃の先端の大間原発、つけ根にある六ヶ所核燃、中間にある東通原発。この地域に、10万人が住んでいます。

道路は、半島の東通り側と陸奥湾側の2本しかありません。東通原発事故だけなら、漁船で逃げることも、窓を閉めきった車で陸奥湾側の国道を南へ走り抜けることも可能かもしれません。しかし、地震と津波が同時に襲ったら、船は流され、港も使えなくなります。海沿いを走る2本の国道も、亀裂や瓦礫で寸断されたら、もう、どこにも逃げるできません。

核施設の集中立地の危険性、原発震災という複合的な大災害の恐ろしさは、福島原発事故で実証されました。〈下北半島の核半島化〉を止めなければなりません。

## 国、電力、御用学者たちの「想定外」のウソ

専門家と称する御用学者たちは、「想定外のマグニチュード9の地震と大津波によって原発が被害を受けた」と言い、次々と爆発する原発を見ても、「想定外の事態」と言い続けています。これまで、彼らは「日本の原発は、これまで起きた地震や津波にも対応しており、反対派が言うような事故は起こらない」と言ってきたのです。

さらに、彼らは「5重の防御と2重、3重の非常用電気系統があり、スリーマイルやチェルノブイリのような事故は、日本の原発では起こるはずがない」と言い続けてきました。それは、ウソ、デタラメだったことが明らかになりました。

私たちにとって、原発の安全性を考えるとときには、今回の地震も想定範囲です。あつてはならない災害ですが、地球の歴史でみれば地殻変動によって、このような巨大地震や大津波は、過去に何度も発生しました。だからこそ、「原発を建設すべきでない」と、各地の原発裁判や国、県、電力会社との交渉等で訴えてきたのです。

御用学者は、その事を知らなかったのではなく、意図的に低い数値を持ち出し、原発を建設できるように誘導してきたのです。

電力会社や国、裁判所も、私たちの訴えを否定し、御用学者を使って「原発安全神話」をでっち上げ、原発を推進してきたのです。

3月12日3時半頃、福島第一原発1号機で水素爆発が起きました。テレビ出演していた御用学者は、爆発が映し出されているにもかかわらず、「爆発ではなく、蒸気を逃がす作業のようだ」などと発言していました。

東京電力も、政府も、すぐに発表せず、枝野官房長官が発表したのは2時間15分後の5時45分でした。保安院が5時15分に発表しようとするのを押しとどめたのは、政府主導のパフォーマンスだと言われています。東電も、保安院も、政府も、地元住民の安全確保より自分たちの保身に走っています。

## SPEED-1の試算は、なぜ隠されたか

原子力安全委によるSPEED-1(スピーディ・緊急時迅速放射能影響予測)の発表は、3月23日が最初です。その後も情報は隠され続けられました。これは、空气中に放射能がどのように拡散していくかを予測する大事な調査であり、住民の放射能被害を防ぐためにも、それこそ「迅速に放射能影響予測」を発表しなければなりません。

SPEED-1は、事故直後から予測を行なっていました。「1号機原子炉建屋で水素爆発が

発生した3月12日の午後4時時点の試算結果では、放射性物質が飯舘村のある北西方向に広がっている」と予測していたのです。

枝野官房長官が水素爆発事故を発表したのは5時45分でした。枝野官房長官は、この時にSPEEDI予測を、ただちに福島県民に伝えて、安全に避難させなければならなかったのです。5月になっても、放射能レベルの高い地域は、最初のSPEEDI予測とほとんど同じです。同心円上に、10キロメートル、20キロメートルと避難地域を設定するだけではなく、それ以上離れていてもSPEEDI予測にそって飯舘村などの汚染予測地域に避難指示や被曝の危険性を訴える責任が政府にあったのです。それをしなかったため、多くの住民が知らずに被曝しているのです。

3月15日、菅首相は「30キロメートル圏内屋内退避」を発表しましたが、なんの手当もしないで「家にいろ」という、無責任で非情な指示でした。この指示により、南相馬市などでは、ガソリンや食料、生活物資も入ってこなくなり「飢え死にってしまう」という状況に市民は追い込まれました。

政府が具体的な方策をとらないため、実際の住民避難を準備したり生活必需物資の確保のため行動したのは、被災した市町村でした。

4月25日に細野首相補佐官は「SPEEDI予測を公開しなかったのは、市民に不安を与えパニックが起こるのを恐れたため」と述べています。

SPEED Iは、(緊急時迅速放射能影響予測)の名のとおり、緊急時に迅速に放射能の影響を予測し、住民が放射能に汚染しないようにするためのシステムです。それが、原発事故から50日以上たった5月3日になって、5千枚もの試算結果を、ホームページで公開し始めたのです。住民の放射能被害については「どうでもよかった」ということです。

このことは、枝野官房長官が「暫定基準値を超えた放射性物質が検出された野菜を食べても直ちに健康に影響がでません」とくりかえしていたことと同質です。

「放射能を浴びても直ちに影響が出ないのだから、SPEED I予測は隠しておこう」と政府は考えたのです。

## 危険な校庭20ミリシーベルト基準

文部科学省は、幼稚園や小中高の学校の校庭の安全基準を20ミリシーベルトと決めました。大人の安全基準が1ミリシーベルトにもかかわらず、「放射線の影響を受けやすい子どもたちに20倍もの放射線を浴びせても問題がない」としたのです。

文科省の理屈は「安全基準を上げると、多くの学校で校庭が使えなくなるか、学校を疎開しなくてはならない。その方が児童生徒にとって健康によくない」というものです。そこには、「放射能から児童生徒を守る」という姿勢が少しも見られません。そればかりか、郡山市が放射線を減らそうと、校庭表面の土を削る作業をしたのに対し、否定的な態度を取っています。

校庭の場合は、外部被曝とともに内部被曝を考えなければなりません。子どもたちが運動した時に、土に含まれた放射性物質を吸い込み、内部被曝をする危険性が高いのです。

子どもを守るのは大人たちです。政府が安全対策を取ろうとしないのなら、自ら児童生徒を守らなければなりません。政府や東電に殺されてはなりません。

## 信頼されない情報による風評被害

3月19日、福島県内の原乳や茨城県のホウレンソウから暫定基準を超える放射性物質が検出されました。

「安全で問題がない」という枝野官房長官の映像がテレビで何度も流されました。暫定基準値を超えた放射性物質が検出されたのに、「食べても安全で問題がない」というのなら、基準値に信頼がなくなり、不安を増大させるだけです。

さらに、基準値を引き上げようとした政府や御用学者たちの言動が不信と不安を拡大しました。政府や東京電力が発表を遅らせたり、「パニックが起こる」（細野首相補佐官）と情報を隠し続けたりしたため、誰も彼らを信じなくなりました。

4月13日、原子力安全委員会と原子力安全・保安院は、福島原発事故は、チェルノブイリ事故と同じ「レベル7に事故評価を上げた」と発表しました。

原子力安全委員会は、3月23日には「レベル7」と評価していながら「発表は保安院の役割」

と知らん顔を決め込んでいます。

菅首相、原子力安全委、安全保安院、東京電力それぞれがてんでんばらばらで、一体となつて福島原発事故を早期に安全に解決しようとしているとは思えません。

政府は放射能汚染について詳しく発表しません。「発表は本当か？」と皆が疑っています。そのような不信任が、風評被害や、買いためをさせていると思います。

## 避難所にはまだ12万人の人たちが

被災地では、肉親を亡くし、家を破壊された人たちが、12万人以上も避難所暮らしを強いられています。緊急避難ということで、体育館など、プライバシーがなくストレスが強い避難所が大部分です。

仮払い金の支給、民間アパートの借り上げ、仮設住宅の建設、児童、生徒への教育の保障を急いでもらいたいと思います。

まだまだ不自由な毎日を送る避難された方がたに、「がんばろう」の連発は、酷です。一刻も早く人間的な生活ができるように、国は具体的な対策を早急に実施してもらいたいと思います。



## 全国に散り散りになる原発被災者

弘前の隣町の知人の家に、福島県いわき市に住む娘さんが福島原発事故直後に3人の子どもを連れて避難してきました。

4月から小学校に入学予定の子どもは、こちらの小学校に当分の間、受け入れてもらうことになりました。町では、いわき市にすぐに連絡をとり、小学校受け入れを決めたそうです。仕事のある夫は、いわき市で单身生活とのこと。娘さんには、生後まもない乳児と幼児がいます。実家での生活とはいえ、家族が長期間離れて暮らすのは大変です。

娘さんと孫3人を突然迎え入れることになり、知人の生活は一変したそうです。「とりあえず一年間ここにしよう。その後のことは。その時考えよう」と話し合っているそうです。

福島原発事故による放射能放出のため、多くの人々が故郷からむりやり離され、避難所や全国各地で、疎開生活をさせられているのです。

福島原発事故の収束は、いつになるのか。

放射能で汚染された土地に再び人が住めるようになるのか。

農業や酪農や漁業、すべての仕事が元のようにできるようになるのか。

先の見えないストレスいっぱいの日々を送っているのです。

## 人があふれてこそその弘前桜祭り

自粛ばかりで各地の桜祭りが中止や、規模が縮小され、観光客の激減が続いています。

地震発生は、3月5日に新幹線「はやぶさ」が青森に来て6日目でした。鉄道はストップ、旅館やホテルはキャンセルで大変な状況。地震の影響で地元の老舗デパートが倒産。直接、地震の被害のなかった弘前・津軽地方も、暗い感じですよ。

弘前桜祭りは、津軽最大の祭りで、ゴールデンウィーク期間中、毎年200万人以上が楽しむ全国一の花見です。

4月23日の初日から一週間ほどは、桜も咲かず、天気も悪く、悲しくなるほど人も少なく、観光バスは、ほとんどありませんでした。

4月29日に新青森―東京間が新幹線で再びつながり、観光客も多く来るようになりました。

5月3日は、天気もよく、桜も満開。これまで我慢してきた人がどっと弘前城にあふれました。40万人以上の人出で、人気の天守閣近くの下乗橋や日本一古い染井吉野の木、出店の通りは歩けないほど。誰もが、満開の桜の花と久し振りの賑わいに嬉しそうでした。

4月23日―5月8日までの「弘前桜祭り」の期間中の来場客数は、前年から46万人減りましたが、それでも200万人になりました。

弘前では「お城で花見」が一年の始まりです。桜が散ると、りんごの花が咲き、田植えが始まります。

## 立地町村に巨額の原発マネー

立地町村は、原発や核燃を受け入れることにより、電源三法交付金や、様々な補助金、匿名の数億円の寄付金、首長選挙や議員選挙への応援などの「原発の恩恵」を受けてきました。

原発や使用済み核燃料貯蔵プールの事故が報道されているさなかでも、むつ市や大間町、東通村、六ヶ所村などでは、工事の一時中断を「地元経済への打撃」としか受け止めていません。「早期の工事再開を求める」ありさまです。

今回の事故が起きたことにより、原発立地町村は、廃村の危機にあり、福島県全域がこれまでに得た利益の数倍、数十倍、数億倍かもしれない損害を受けます。最も大きな損害は、お金ではなく、人や環境への害です。お金に替えられない、掛け替えのないものです。

人びとがいつものように春を迎え、花を見る喜び。家族がいつものように生活できる安心。農村では毎年同じように田を耕し、牛を飼い、漁村では同じように海を相手に魚を獲る。工場が動き、商店街が賑わう。

当たり前の日常を、一瞬にして原発事故＝人災が奪うのです。

お金のために、原発を建てるのをやめましょう。核燃も、使用済み核燃料貯蔵施設も危険です。日本中にある核施設をすぐに止め、廃止させなければなりません。

菅総理！ 東電社長！ 御用学者の皆さん！

福島の子どもたちを見殺しにしないで下さい！

小川みさ子

近頃、ふと消え入りたい思いにかられます。それは、「もう何をしてでも手遅れ、手の施しようがない……」という絶望感から抜け出ることができないからです。

1983年2月24日NHKで放送された「ルポルタージュにつぼん 原発定期検査」という番組を通して、放射能の危険性も教えられず、放射能まみれになって働く被ばく労働者の存在を初めて知り、原発の抱える「命の差別」に震え、以来、原発のもたらす差別との闘いが始まりました。その後、チェルノブイリ原発事故で立ち上がった子育て中の母親たちと一緒に、「原発なしで暮らしたい」と訴え続け、私自身の人生も大きく変わりました。

今回の原発震災では、その周辺で生きる子どもたち、責任者たちの行きたがらない被ばく覚悟の労働……命の差別が、塊になって押し寄せてくる現実には打ちのめされ、力が抜け落ちる思いです。しかしながら、このとてつもなく膨らんでいく差別と闘うために、何としても頑張ら

なければ―と、一念発起。御用学者たちの命を軽視した情報が渦巻く中、原発が危険であることを叫び続けてきた市井の学者たちの情報を、いち早く、一人でも多くの知人友人に発信することにしました。

収束の目処も立たないまま原発震災から2か月半。事故当初、国民は刻々と変わる被害状況を、枝野幸男官房長官の記者会見を通して知るしかなく、東電と国を信じることはできない、何が起こっているのか、そして今後いつたくなるのか、緊張感に震えながら食い入るようにテレビ画面を見つめる日々が続きました。ただ、御用学者が次々に登場し、テレビ画面から専門家でない者でもわかるような放射能汚染を過小評価した見解を、国民に向けパクパクと喋り続けているのに対し、怒りを通り越し、情けないと思いました。私たちの抵抗など、魂を売ってしまった御用学者たちには痛くも痒くもないのかも知れませんが、彼らの、こんな時にも「命よりお金」を選択するあざとさの一方で、数十年、国策に反対なので研究費など節約しながら、真実を伝え続けてくれた市井の学者、彼らの主張こそを今こそ拡散しなくてはと、3・11翌日からメルマガでお伝えすることに集中しています。その作業のため、個人的なことですが、臥薪嘗胆よろしく蒲団に眠れない2か月半を送っています。

市井の学者から直接届く情報、さらにm1、twitter、mixi、facebookなどでも情報を得て、わかりやすくまとめ、毎日毎日、発信しています。リテラシーの育っていないテレビ視聴者の多くが、マスコミ、企業の手先である、御用学者の餌食にされて、自分

自身で判断できなくなっています。ここを何とかしなくては、と焦ります。140文字に凝縮されたtwitter情報で、事故の収束時間が、スリーマイルは2時間18分、チェルノブイリは9日間だったと知らせています。福島第一原発は、2か月半経過した現在も、収束の目処も立たない状態です。

スリーマイル島やチェルノブイリなど、過去の原因事故と違うのは、「世界中がネットで繋がっていて情報が早い」ことです。悲しいかな、国も電力会社も当てにできない日本国民は、日本の気象庁が公表しない放射能飛散の予測を、ドイツやノルウェーなど欧州の気象庁の予測をネットで得て、拡散し、知らせました。

日本には、原子力事故時に放射線物質の飛散予測を行うSPEEDI(スピーディ)という文科省の緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステムがあるにも関わらず、肝心な時に役に立たず、苦情殺到で公表に踏み切ったのですが、時、既に遅し。日本全土のみならず、近隣世界も巻き込み、今を生きる人たちだけでなく子々孫々の未来までも奪おうとしている。こんな世界最悪の事故で公表が遅れたのは、もはや「大量殺りく」と言わざるを得ません。

日本政府は、事故が収束する兆しも見えないうちから事故を評価し、事故後一か月で「レベル7」という史上最悪の評価に引き上げざるを得ない事態になり、その後、事故評価の話題が消えました。放射能被害によるパニックを恐れ、「放射性物質大量飛散の可能性は低い」「直ち

に健康被害は出ないが念のため出荷はひかえる」を繰り返してきた国と御用学者、東電との関係が無気味でなりません。

既に取り返しのつかない事態となり、言葉をなくすことばかりです。少しでも環境を汚さず安心安全な有機野菜を栽培するために、30年間、土作りに力をかけ農業を愛して来た男性が、福島県産野菜の「摂取制限」指示が出た翌日、自ら命を絶ったのは、全国の農業者に、ショックを与えました。有機農業提携運動に30年取り組む私は、若手農業者に次つぎに電話をしました。何もできないもどかしさの中、その後、「若者たちの主催する〈原発いらないパレード〉に、父を亡くした有機農業後継ぎのお子さんが参加した」という情報には、やや気持ちを切り戻せましたが、これから大変な現実が待っているのだと思えば、胸が痛みます。

もうこの期に及んで、何が起きても驚かないほど事態は深刻です。事故後2か月も人が入れず、ロボット情報しか得られなかったこと一つ考えてみても、「手の施しようのない、人間が手にしてはならない原子力だ」と突き付けられています。2か月余、「津波が原因」とされてきたのに、東電は、福島第一原発1号機に津波が来る前、冷却水を原子炉内に注入する「非常用復水器」を手動で止めていた可能性を示すデータを公表。こんな重要なことを枝野官房長官すら、報道で初めて知ったというのです。何をいつ公表し、隠ぺいするのか、混乱を垣間見るような気がします。2002年に、17基の原子炉すべてが停止するという異常事態が起きた、

東電のトラブル隠し体質は、世界最悪、過去最悪のレベルに達した原発事故後も、改まることもないのです。(17基の原子炉が停止しても、計画停電騒ぎなどありませんでした！)

そして極めつけは、原発事故後二か月以上経過してからの、「実はメルトダウンしていました」という公表です。もう呆れて、開いた口がふさがりません。情報隠ぺいは、誰の指示、どこが決定したのか、幾重ものミスを犯し、繰り返し殺人を起こしているようなものです。

厚労省は、3月15日に、省令で、福島事故の応急対策に限定して、緊急時の被ばく線量を100ミリシーベルトから250ミリシーベルトに引き上げていたけれど、通常時の基準は、そのままだった。たとえば、1号機の1シーベルト毎時の環境でいえば、50ミリシーベルトだと3分で超えてしまうという計算になり、それでは、原発作業に従事できる全国で7万人、東電3・8万人の社員だけでも足りず、保守や定期点検で働けなくなると、単純に人数的配分をすれば、「国民全員が作業にあたらなくてはならない」という計算になるので、厚労省は、4月27日、労働安全衛生法の電波放射線障害防止規則により、「通常時は年間50ミリシーベルト」と定めている原発作業員の被ばく線量の上限を、「当面の間、撤廃する方針を固めた」という報道を聞いた時は驚きました。通常一般人の上限が1ミリシーベルトですから、「普段でも被ばく労働者は、一般人の50年分を1年で浴びていい」ことになっていて、250ミリシーベルトだと250年分。この上限でさえ、生命軽視としか言わざるをえないのに、「上限なし」だなんて、



考えられません。福島原発から避難した男性が、遅すぎた東電社長の訪問に対し「早く、東京に原発を持って帰って下さい」と訴えていた声が耳に残っています。「根拠のない大丈夫」は、やめて頂きたい。今ほど、「国の基準」という言葉がそらざらしく聞こえる時はありません。政府も、内閣府も、保安院も、文科省も、すべて東京にあるので、このような発想になるのでしょうか。被ばくを余儀なくされて、原発関連で働く人たちの安全軽視、命の軽視。命の差別は、許せません。

もう一つ解決が急がれる喫緊の問題があります。

それは、管直人首相は文科省と共に、福島県の子どもの校庭活動の基準を「毎時3・8マイクロシーベルト、年20ミリシーベルト上限」を譲らないことです。「原子力安全委員会も、この基準を認めていない」とのことが判明し、何を根拠にこの基準が決められたのか、謎です。

命に関わるのがこのように不透明であっていいはずがありません。子どものように、細胞分裂が盛んな人ほど放射線の影響に敏感なのです。まして胎児は、更に深刻な影響を受けるのです。国は福島県全体の各所測定値に基づき、至急、幼児、妊婦の転居、学童の集団疎開を開始すべきです。

それなのに菅首相は、まるで他人事のように、被害にあった地元の方たちの見直しの訴えを拒否し、「国としての考え方があるーきちつと県民や国民に伝える努力をしなければならぬ」と、逆に理解を求め、今なお膠着状態が続いているのです。この国としての考えとは、「パニ

ツクを恐れ、福島の子どもたちを見殺しにする」ということなのか。世界中が見ています！

残念なことに、今回の原発震災は人災であつたうえに、更に人災の上塗りがなされています。それは、せつせとご自分の分野を生かし、情報を送り続けてくれる市井の学者たちと対象的な「命の視点を欠いた御用学者たち」。そして「放射能被害にあっている福島を、国が真摯に守らないこと」です。福島の方がたは、放射能汚染をそれほど深刻に受け止めていず、福島圏内のホットスポットでマスクもさせないで子どもを遊ばせている親もいると聞いて驚きます。

なぜそのようなことを招いているかといえば、福島県知事が、放射線健康リスクアドバイザーとして「県民税」で雇った被爆二世の山下俊一長崎大学医学部教授が、20ミリシーベルトどころか、「100ミリシーベルトを超さなければ、全く健康に影響を及ぼしません。子どもたちをどんな外で遊ばせてください」と、講演先で話しているというのです。県民の「放射能への恐怖」を誤魔化すためでしょうか！ 福島県知事と学者が共犯です。

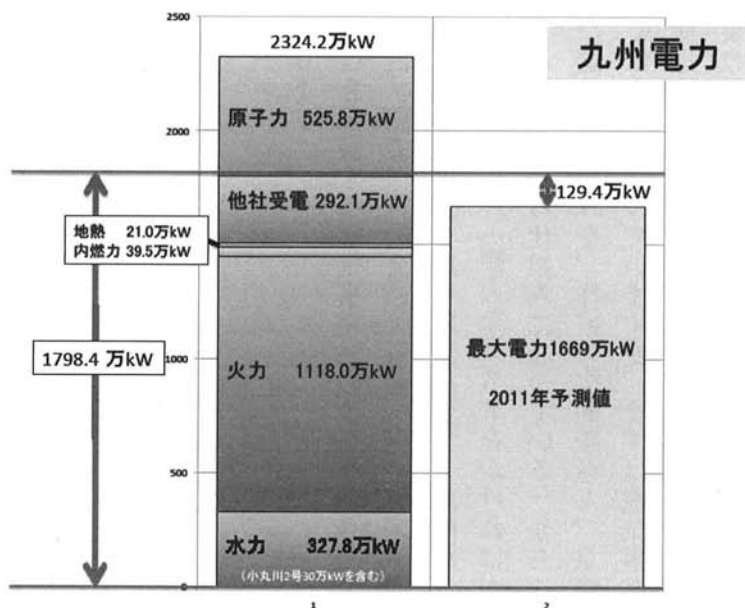
3・11前には原発安全神話を語っていた小佐古敏荘東京大学教授は、「とても受け入れられない」と涙を流しながら抗議して、内閣官房参与を辞任したのです。

原発安全論者であつた学者が抗議の辞任をしなくてはならない事態。このことが何を意味するのかさえ、感じ取れないほど、判断力を失っている菅総理。

「チェルノブイリ原発事故で、8000キロ離れた日本にも、放射能が飛んできたこと。その時の旧ソ連、ヨーロッパの対応。そして25年経ってなお、避難先に帰ることもできない住民のことなど、何も教訓とせず、唯一の被爆国で被爆二世の医師が、放射能被害を過小評価し吹聴し、安心ムードづくりに躍起です。

この大人たちの思惑によって、命を蝕まれていく福島の子どもたち！未来を生き延びてくかがえのない命が見殺しにされています。」  
「菅総理、子どもたちを助けて下さい！」

私は、原発立地県である鹿児島市に住んでいます。合併して、原発のある薩摩川内市と隣接市になり、2基の原発から30キロ圏内に住んでいる市民もいます。原発がある限り、第二の福島は避けられません。



元慶応大学教官の藤田祐幸さん作成のグラフでも、「決して原子力が基幹電源でない」ということは一目瞭然です。それどころか、九電では電気が余っていて、融通電力として関西方面の電気を賄うために売電しています。それなのに、福島第一原発1号機、2号機を合わせたよりも大きな、159万キロワットの世界最大級の原発の増設計画が進んでいます。3・11以後、周辺自治体では次々に凍結を決議しているにもかかわらず、薩摩川内市長も、県知事も、凍結しようとしません。この6月議会が焦点となると思いますので、皆様もぜひ、声を届けて下さい。

急いで変えなくてはならない、三つのことがあります。

① 電力会社は、なぜ原発を造りたがるのか？ 儲けを保証する電気事業法の改正をめざそう！  
2000年から一部自由化されたとは言え、独占状態で、電力会社の資産（固定資産＋発電所・変電所・送電線の建設費＋核燃料費＋繰り延べ資産＋運転費用＋特設投資）×報酬率＝利潤が、電気事業法で定められ利潤が守られています。つまり、「膨大なコストをかければかかるほど電気料金に上乘せし、原発をつくれればつくるほど儲かる仕組みになっている」から、企業がつくりたがるのは当然なのです。このような儲けの仕組みを、作家の広瀬隆さん、京都大学原子炉実験所の小出裕章さんが、分かりやすく伝えて下さっています。まずは電気事業法を改正しなければ、利潤追求の企業が原発から撤退するわけがないのです。

それにしても、このような、未曾有の原発震災に国民が不安に陥っているにもかかわらず、原発増設を見直さない旨、伊藤祐一郎鹿児島県知事があえて発言するのは、何か思惑があるの

でしょう。

② 事業系の電気料金体系が電力消費を促進している。見直しを求める運動を起こそう！

3月25日、与謝野経済財政担当相は「一般家庭の電力料金体系を見直して値上げすべきだ」との考えを表明しましたが、与党からの反発で、提案はその日のうちに撤回しました。家庭用電力は電力使用量全体の3分の1といわれてきましたが、「長い間、民生需要として、コンビニやデパートなども加えられていて、それらを除いたら、一般家庭用電力は13%で、全体の8分の1になる。だから一般家庭がライフスタイルを変え節約すれば、夏場の電力ピークが解決できるといえるのは間違いだ」と、未来バンク理事長の田中優さんが声を大に伝えています。更に家庭用の電力料金は、毎月の使用量を3段階制にして、「使えば使うほど単価が高くなる」ように設定してあるのです。一方、8分の7を占める事業系の電気料金は、「基本料金は高いけれど、使えば使うほど単価が安くなる」という設定になっているので、電力消費を促進した方が経費は安くつきます。そうなれば、利潤追求の企業が電気を節約するはずはないのです。このような料金設定の見直しを求める運動も急がれます。

③ 電力を独占体制から自由化するべきです！

学ぶべきは、鎌仲ひとみ監督のドキュメント映画『ミツバチの羽音と地球の回転』の中でも紹介されている、スウェーデンなど北欧の電力自由化です。「再生可能エネルギー」だけを作っ

て売っている電力会社があり、国民は自由にさまざまな電力会社と契約できる」というシステムです。日本では、社会全体の規制緩和という大きな流れの中で、2000年に、電力が一部自由化になりました。

政府は、今回の深刻な事故を起こした東電を公的資金で救済するだけでは、国民の理解が得られないので、送電部門を他の大手電力会社などに統合する処理案「発送電分離」を検討しているとのこと。 「先進国で電気会社を選べない、発電と送電と売電が別でないのは、ほぼ日本だけ」とのことです。送電・発電分離だけではなく、発電売電も自由化し、電氣が選べるようになればいいのです。

電力会社の命を踏み台にした利益追求の姿勢を、御用学者、政治家、マスコミが、利権がらみで支持してきました。そして、原発は、「万が一、事故が起きても被害を拡大させないよう、ペレット、燃料被覆管、原子炉圧力容器、原子炉格納容器、原子炉建屋からなる「五重の壁」で原子炉から放射性物質が外部に漏れないようにしっかりと閉じ込めます」と、自信ありげに胸を張り、しかもテレビコマーシャルでも、「CO2を出さないクリーンな原発」と洗脳してきた安全神話への責任は、どうするつもりなのか、怒りを込めて、彼らに問いたい。しかしながら、今は、このような議論は棚上げしてでも、福島の子どもたちを救わなくてはならない時です。

菅総理！ 今こそ命の視点に立つて下さい！

※脱稿した後、菅総理がフランスサミットで日本を留守にしていた5月27日、文部科学省は、福島県内における児童生徒等が学校等において受ける線量低減に向けた当面の対応について、年間1ミリシーベルトから20ミリシーベルトを目安としながらも「今後できる限り、児童生徒等の受ける線量を減らしていくという基本に立つて、今年度、学校において児童生徒等が受ける線量について、当面、1ミリシーベルトを目指す」としました。また、「校庭・園庭の空間線量率が毎時1マイクロシーベルト以上の学校の除染について、財政支援を行う」と発表しました。

福島のパ母、そしてその支援者たちの文科省への要請、その切羽詰った叫びとも言える直接行動により勝ち取った大きな一歩です。ホッと一安心ーしかしながら、このような働きかけがなくては命に寄り添った選択がなされないこと自体が理不尽なことです。また、「今年度は」「当面」という曖昧さも残ります。せつかくの成果が細やかにきちんと実行されるよう、チェックしていかなくてはなりません。そんな意味でも、まだまだ課題山積です。

私たちが今、断りたくてもベストミックスと称してセットで売られる原発を断れない以上に、子どもたちは生活環境を選べないのです。だからこそ、大人の思惑で、子どもたちに不幸を招き入れるべきではないのです。

10年後、福島をはじめとする子どもたちが、健やかに育っていてくれることを願い、そのために大人としての責任を今こそ果たしましょう。

(鹿児島市市議会議員)

(ホントに環境にやさしい電気とは?)  
(発行 財大竹財団 より転載)

## へらない 再生可能資源

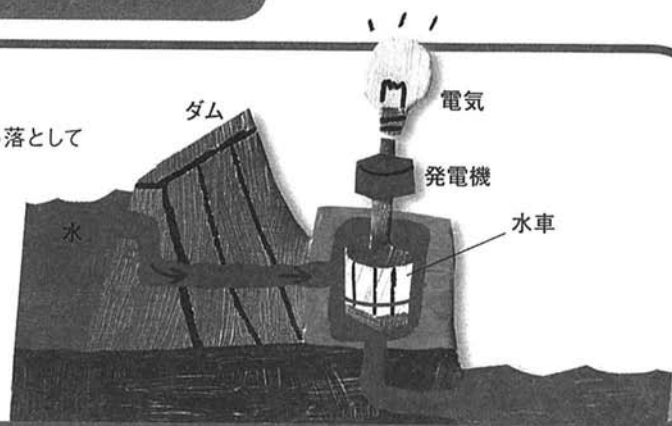
太陽光、風、水など半永久的に利用可能、  
かつ膨大な資源量を有する資源を利用して  
電気をつくる

この他  
燃料電池などもあるよ



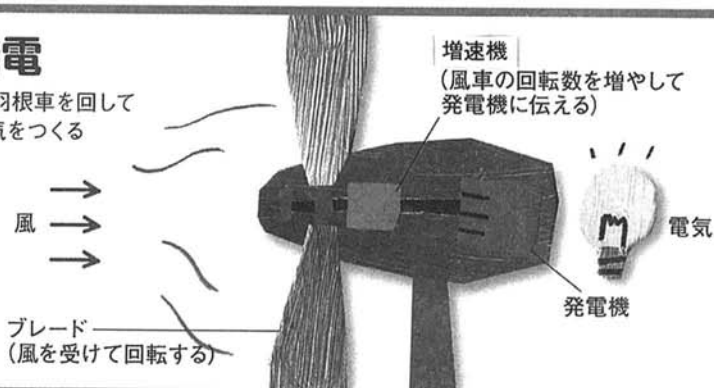
### 水力発電

● 水を高いところから落として  
水車を回し、  
発電機で電気をつくる



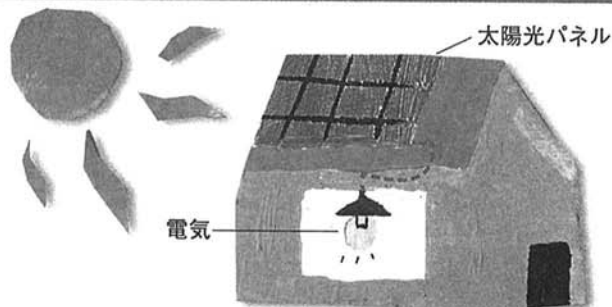
### 風力発電

● 風力で羽根車を回して  
発電機で電気をつくる



### 太陽光発電

● シリコンなどの  
半導体を使った  
太陽電池を使い、  
光から直接電気をつくる





# 電気はどうやってつくられるの？

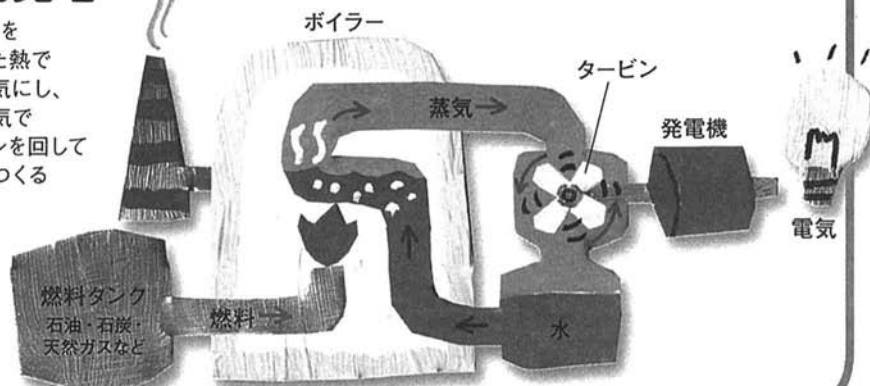
燃料の違いで主に2種類に分けられます。  
枯渇性資源を使う発電方法と  
再生可能資源を使う方法です。

## なくなる 枯渇性資源

石油や石炭、天然ガスなどの燃料をもやした熱で  
水を蒸気にし、その蒸気でタービンを回して  
発電機で電気をつくる

### 火力発電

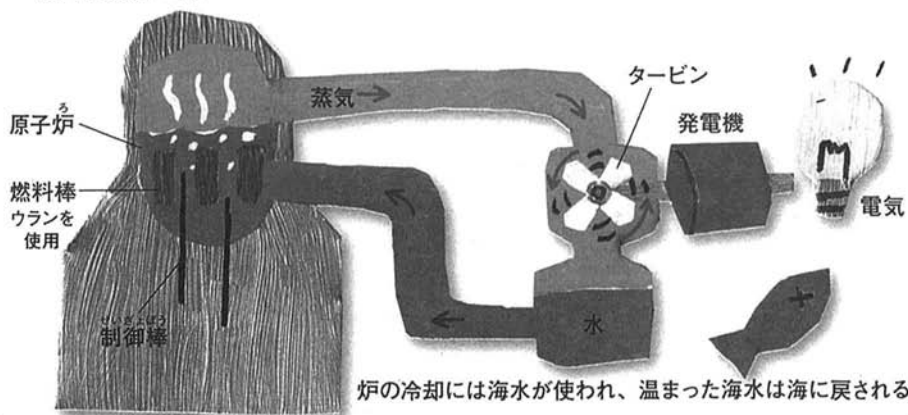
● 燃料を  
燃やした熱で  
水を蒸気にし、  
その蒸気で  
タービンを回して  
電気をつくる



### 原子力発電

(以下、原発に略)

● ウランを連続的に核分裂させて出る熱で水を蒸気にし、  
その蒸気でタービンを回して電気をつくる



クリーンな電力と推進されてきたけれど……

# 原発はCO<sub>2</sub>を出し 放射性廃棄物を残す!!!

原子力発電はウラン燃料採掘のときから、プラント建設、廃炉解体処理までの作業工程でもCO<sub>2</sub>を出している。そして核のゴミ・死の灰を残す。

原子力発電の  
CO<sub>2</sub>を出す作業工程

ウラン採掘  
のとき

製錬のとき

濃縮・加工  
のとき



原子炉  
建設・運転  
のとき

ウラン燃料  
輸送のとき

原発を  
警備する  
とき

使用済み  
核燃料の  
管理のとき

廃炉  
解体処理  
のとき

大量の  
核分裂生成物  
＝死の灰が残る

行き場はない



# それぞれの発電システムの問題点

## 火力発電

地球の資源には限りがあり、特に石油等は枯渇の恐れがある

## 原子力発電

核分裂による発電だから放射能が出つづけ、放射性廃棄物が残る

さらに…



## 水力発電

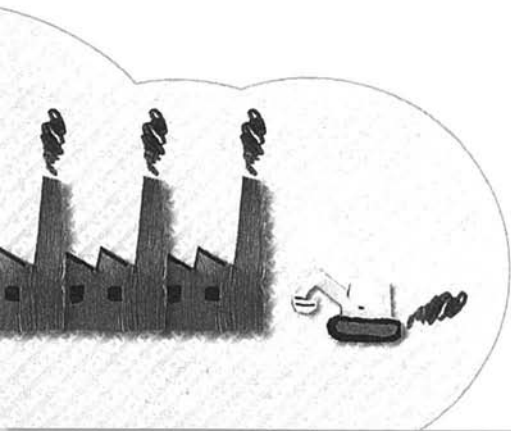
大型ダムは自然破壊になり、森や林がなくなる

## 風力発電

特に大型や立地場所によっては騒音や低周波問題が起きる

## 太陽光発電

大量発電のためには広い場所が必要になる



どんな工程のときも必ずCO<sub>2</sub>を出しているんだ!



# 事故

福島原発事故で、  
環境に放出された放射能に汚染され、  
避難指示や被害が出た区域を  
全国の原発にあてはめると…

## 避難指示

(後に、法的に立ち入りが禁止される警戒区域)が  
でたのと同じ半径20km区域

屋内退避指示が出たのと同じ  
半径30km区域

環境を汚染した  
100km区域



## COLUMN

## もしも今、原発事故が起きたらこう逃げる！

### 逃げる方向

事故サイトの  
風向きに注目！  
風下、直角方向に  
移動する



### 逃げる服装

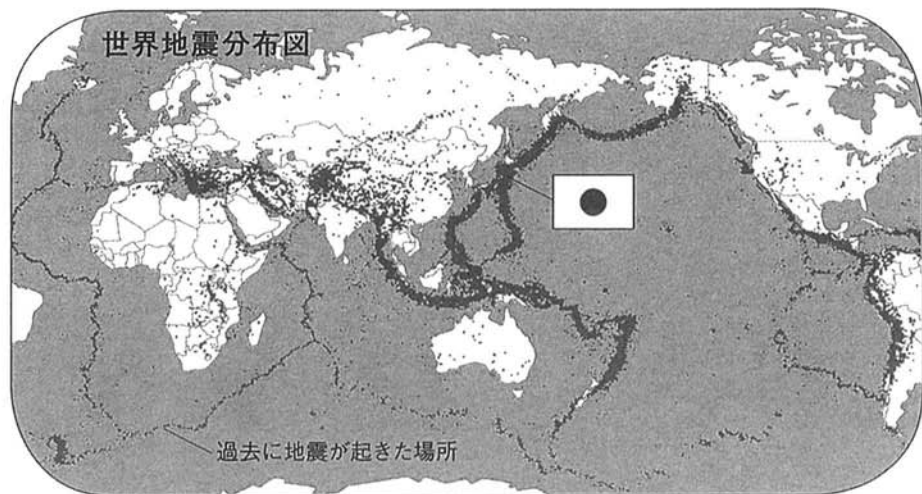
汚染されたホコリを  
吸い込まないよう、  
マスクを着用

雨に当たらないよう、  
ビニール製の雨合羽を着用



# 原発の問題点、大きくは3つ

## 地震 日本は世界でもトップクラスの地震国



( $M \geq 4.0$ 、深さ100km以下) 1975～1994年データ 国際地震センター ISC 資料  
出典：理科年表 2006

### ↓ 近年では地震によってこんな事故が発生しています

#### 新潟県中越沖地震 2007年7月 M6.8

東京電力柏崎刈羽  
原子力発電所  
7基全部停止事故  
変圧器で火災発生

#### 静岡沖(駿河湾)地震 2009年8月 M6.5

中部電力浜岡原発  
5号炉自動停止  
制御棒の駆動装置が一部故障  
周辺15～20センチ隆起や沈下。放射線量一時数倍に。タービン建屋壁面のひび割れも

#### 東北地方太平洋沖地震 2011年3月 M9.0

東京電力福島第一原発  
1～3号炉自動停止  
しかし…  
電源喪失で冷却不能になり燃料溶融。1・3号炉水素爆発で放射性物質飛散、2号炉格納容器破損で放射能を地上放出

### 大事故は想定外なの？

大きな原発事故がおきると、まず最初に言われるのは「想定外」という言葉。しかしそれは、想定するべきことをあり得ないこととし、また莫大なコストがかかることを理由に想定しないで原発を推進してきた電力会社、国(原子力保安院・安全委員会)、学者や専門家たちの言い訳にすぎない

大地震を  
想定しなかった原発  
津波の想定も低かった！  
来ないと思ってたの？



# 放射性廃棄物

処分方法も処分地も決定していない。

引き受ける所もなく、

放射性廃棄物はそれぞれの原発サイトに  
貯まる一方で、

満杯になってきている

低レベル放射性廃棄物は、  
放射線管理区域などで放射性  
物質に汚染されたり付着したも  
のや、炉心付近の資材など。

高レベル放射性廃棄物は、  
一般的には使用済み燃料であ  
り、強い放射線を放つ核分裂  
生成物と長期間放射線を放出  
するものが主である。

高レベル放射性廃液  
380m<sup>3</sup>  
ガラス固化体  
約1700本

プルトニウムも154t  
プルトニウムの  
半減期は24000年

低レベル放射性廃棄物  
200ℓのドラム缶に  
約85万6千本



2009年度末までに溜まった放射性廃棄物量

地震国日本には  
地下埋設の適地は  
ありません！



千年？万年？もの間  
誰が、どうやって  
管理するの？

## 事故、続き...

「安全」といわれ続けてきた原発で、シビアアクシデント（過酷事故）が発生。放出されたり漏れた放射能は、気象状況によって広い範囲を汚染する

3月12日に1号炉が、14日には3号炉が水素爆発してぼろぼろになった原子炉建屋。2号炉も格納容器破壊



© Digitalglobe



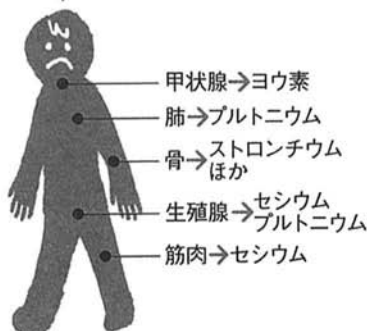
そして、福島原発事故はまだ終わってない。放射能を出しつづけているよ

被曝には、外部被曝と内部被曝の2種類がある

外部被曝は、直接からだの外から放射線を浴びる。

内部被曝は、放射性降下物が鼻（経気道的）や肌（経皮）、口（経口的）から取り込まれて体内に蓄積されて被曝する。そして例えば子どもが放射性ヨウ素を取り込んだ場合は5年後ぐらいから甲状腺がんの発症率が上がる。また、10年～30年後に白血病等のガンが発症することが報告されている。

体に蓄積する放射能



出典：岩波ブックレット「原発事故—日本では？」より

## 欧米では、事故以降原発の数がグッと減っている！

欧米の原発の開発状況



出典：小出裕章氏（京都大学原子炉実験所助教）提供

1979年 アメリカ

スリーマイル島事故—レベル5

スリーマイル島原発2号炉がメルトダウン、地元住民は放射能が流れた地域で癌や白血病が多く発生。

1986年 旧ソビエト連邦（現ウクライナ）

チェルノブイリ事故—レベル7

チェルノブイリ原発4号炉が爆発し、大量の放射性物質が環境へ放出された。子どもたちにも甲状腺がんや、白血病が生じた。



# それでも原発を推進するのはなぜ？

## 日本の原子力発電は 儲かる仕組みになっている

日本の電力は地域独占で、9電力（+ 沖縄）が市場を独占している。電力会社とその周辺は儲かる仕組みができている。日本の電気料金は世界の中でも高い。原発の建設費用（100 万 kW 級）4000 億円 + 揚水発電施設建設の巨額な費用をそのまま電気料金に反映できる制度だから。

## いつでも 核兵器開発が出来るよう 用意していた人々がいる

第 2 次世界大戦後の米ソ冷戦体制の中で日米安保に組み込まれた、核を持ちたい人々・グループが日本の政官財で強い力を持っていた。彼らは「日本はいつでも核兵器がもてる体制・準備をしておく、今は持たないけれど…」と。

だから 1953 年 12 月の米国のアイゼンハワーの提案（原子力平和利用のための国際管理機関設置）の後、すぐに日本初の原子力予算が決まった。

原子力技術の維持

原子爆弾の準備？

核兵器を作りたい？



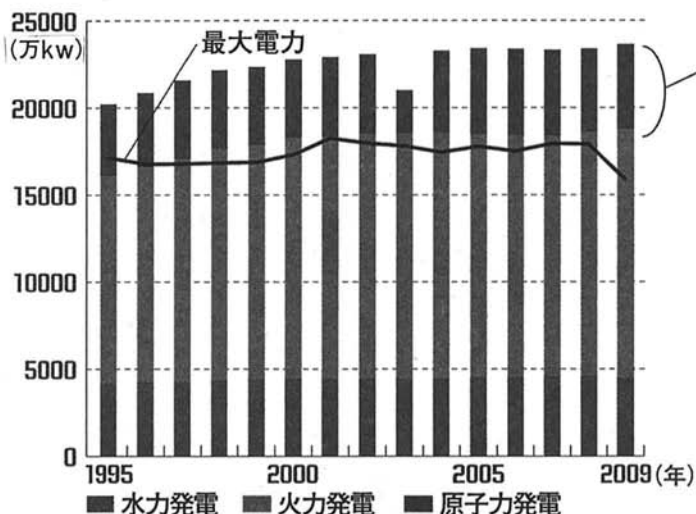
国家政策として  
原発に莫大な補助金  
（税金）を注ぐ

電力会社や関連企業に  
とっても儲かる



# 原発分がなくても 日本の電力は足りている

## 電気事業用の発電設備と電力10社の最大電力



出典：「電気事業便覧」より作図

足りないどころか  
原発分の電力は  
余っている！



なのに原発は  
夜も発電している

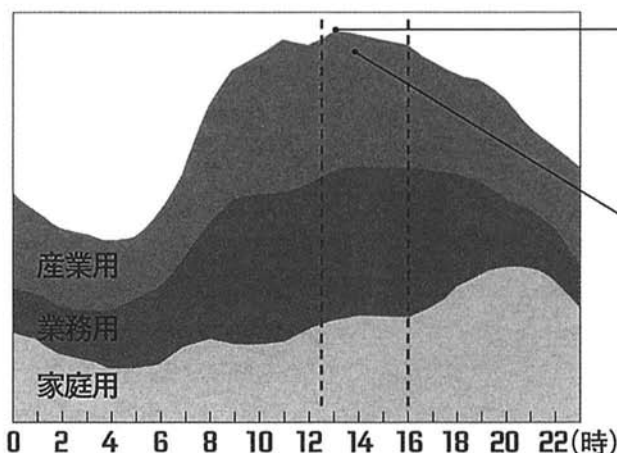


原発は出力調整が  
できないので  
動かさっぱなしになる



ムダな電気が  
つくられている

## 一日の電気の使われ方イメージ



出典：三菱総合研究所作成

夏場の最大電力需要は  
7・8月の数日・数時間

昼間の  
ピークカット対策をすれば、  
今ある発電設備で  
充分間に合う

# 電気をつくろう

未来世代のためにも、  
再生可能エネルギーを組み合わせた発電に  
取り組もう！

## 火力発電

しばらくは  
天然ガスも併用

## 太陽光発電

公共施設の屋根や壁面も利用  
ピークカット対策に役立つ

## 風力発電

適地をさがそう  
これからは洋上発電も

もっと知りたい方へ

市民エネルギー研究所

<http://prie.org>

たんぽぽ舎 <http://tanpoposya.net>

ホントに環境にやさしい電気とは？

2011年5月発行

編集 ● 環境とエネルギーを考える研究会

編集協力 ● 市民エネルギー研究所

「太陽光・風力発電トラスト」運営委員

デザイン ● 小倉万喜子

イラスト ● あずみ虫

印刷 ● (有)あらびき協同印刷

発行 ● (財)大竹財団

<http://www.ohdake-foundation.org>

〒104-0031

東京都中央区京橋1-1-5

セントラルビル11F

# 再生可能エネルギーを組み合わせた

電気のムダ使いをやめて環境にやさしい電気を使おう。

スマートグリッド（次世代送電網）\*で必要なところへ必要な電気が届く仕組みへ  
地域の特性を生かした発電で分散自立型・地産地消型社会へ

## 電気は使うときにつくるもの

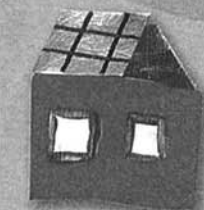
- 電気は貯められません  
貯めるためには  
莫大なコストがかかります
- 遠くの発電所から都市に  
送られる間に  
電気は約5〜10%も消費されてしまう

## 電気の使い過ぎをみなおそう

- 無理なくできることから始める
- ちょっとがんばって  
電気を使うのをひかえる
- エアコンやテレビ、  
電気のつけっぱなしはやめよう
- 都市にも緑をふやそう、ベランダにも緑を！

### 水力発電

流れ込み式がベター

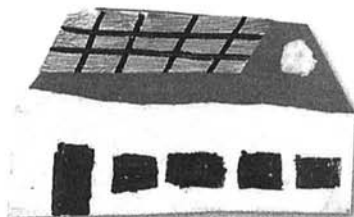


コージェネレーション

燃料電池

※スマートグリッド（次世代送電網）とは、専用の機器やソフトウェアを使い、電力の流れを供給側・需要側の両方から制御し、省エネとコスト削減及び信頼性と透明性の向上を目指した新しい電力網

太陽や風は  
請求書を  
送ってきません



# 原発震災

## ——何を教訓にするのか

山崎久隆

### 原発がもたらす恐怖

3月11日に発生した東日本大震災により「原発震災」（神戸大学石橋克彦名誉教授の提唱による「原発震災―破滅を避けるために」『科学』（岩波書店1997年10月号）に掲載）が発生。ほぼ24時間で、1号機は燃料溶融から炉心崩壊、全炉心溶融・メルトダウンへ。2、3号機も同様の破壊を引き起こしてしまった。

このようなありさまでも、まだ原発を推進したい政府。しかし本当の恐怖は、これから広がることになる。

### 今年の夏、電気は足りている

「原発が無ければ停電する。」そんな脅しが飛びだしたのは、原発震災から2週間後のことだった。原子力安全・保安院の西山英彦審議官は、23日のインタビューで、「過去25年で最悪の

原発危機にもかかわらず、原発推進の動きは後退していない」と語った。原子力の代わりは「停電」だという。（『ウォールストリートジャーナル』3月24日）

日本の発電設備は原子力発電所が約3割。したがって一般には、「日本では、原子力が3割の電気を発電していると思われるのかもしれない。しかし実態は、そうではない。

電力9社の発電設備だけを見れば、火力が62%、水力が8%、そして原子力が29%、新エネは1%であるため、世の中では、「全原発を止めてしまうと、3割の電源が無くなる。」つまり「3割節電しないと停電する」と思い込まれているようだ。しかし実際の設備稼働率を見ると、原子力が67%もあるのに対して、火力は30%、水力は8%に過ぎない（2009年度実績・この項の数値は、すべて資源エネルギー庁の電力調査統計2010年度版による）。水力は水が無ければ発電できないので、「夏の渇水時期に100%」は無理だろうが、火力は何ら問題なく80%以上稼働できるはずだ。

夏のピーク電力需要は、ほぼ1億8000万キロワットほどだが、「火力だけで1億2000万キロワットをまかない、それに水力と電力9社以外の共同火力などの発電会社や、自家発電の買い上げなどを加えれば、停電が起きる心配はない」ということに、計算上はなる。

信じられない？ つい最近まで計画停電騒ぎがあったではないか？ なるほど。確かに世の中「電気が足りない」の大合唱。いったいどちらが本当なのか。

では、それぞれの設備容量を具体的に見てみよう。東京、関西など9電力と日本原子力発電の合計では、原子力は54基、4896万キロワット。火力は、9電力で、1億2421万キロ

ワット。水力は9電力で3528万キロワット。合わせて2億845万キロワットになる。これに電源開発などの卸電気事業者を加えると、全部で2億2826万キロワットもの設備があることになる(2011年2月末現在)。ここから原発分だけを引いてみると、1億7930万キロワットである。これを昨年8月の最大3日平均の全国電力消費量と比較してみると、全国の最大3日平均電力消費量は1億7945万キロワットであり、ぎりぎり足りないように見える。しかし、この計算には含まれていないものがある。それは自家発電設備(自家発)からの買い上げだ。これら発電設備は全国で約6035万キロワットあり、原発の設備をも遙かに凌ぐ。これで十分設備は足りていることが明らかだ。実は、電力需要が高い時期にも、自家発からの買い上げは行われている。しかし、その量は自家発電設備容量の半分にもならない。それは、電気事業者の持つ設備で十分まかなえるため、わざわざ高く付く買い上げをしなくても、電力が不足する心配は、ないからだ。

「供給予備力が必要」という意見もある。確かに電力消費は発電設備ぎりぎりまで上がってしまうと、供給先の電圧や電力量が不安定になるため、一定の予備力が必要だ。これを10%ほどとつても、まだ余裕があるのが今年の夏の実態だ。実際には、東電などのピーク時の供給予備力は5%程度なのだ。

しかも、ここまでの計算では、節電の効果は、いっさい考慮していない。昨年に節電をした経験のある人は、ほとんどいないだろう。暑い中で冷房をふんだんに使ったはずだ。しかし、この夏は、日本中で節電の取り組みが広がることになっている。その効果を目標の15%までに

達しなくとも、10%達成したら、もう、電力設備は十分な余力があることになる。

「節電が経済成長の足を引っ張る」という反対意見もあるようだが、経済成長神話についての議論を置くとしても、節電は新たなニーズを生み出している。省エネ家電はエコポイント制度が終了して、大きく落ち込む可能性があったが、ここに至って売れ始めている。「冷蔵庫は10年前のモデルの約半分、エアコンは12年前のモデルに比べて約30%節電できる」(読売新聞4月8日)など、夏の家電商戦は、いまや活況を呈しているらしい。それだけではない。家電製品以外にも省エネやライフスタイルを見直す動きも加わって、商品経済では、むしろ成長を促している。

電力を大量消費する産業にとっては、電力不足は深刻かもしれないが、むしろ電力そのものの不足よりも、料金の高騰のほうが遙かに影響が大きい。不足するだけならば既に過去に東電の原発不祥事や、2007年7月の中越沖地震による柏崎刈羽原発の全面停止などで電力不足が叫ばれたこともあるので、ピークシフトなどで凌ぐ方法は確立している。さっそく、土日操業で、平日休日や、就業時間の早朝シフトなど、様々な取り組みが始まっている。電力消費量の削減効果を遙かに上回る電力料金的大幅な高騰さえ無ければ、企業にとっては、何ら問題は生じないのだ。

## 東電の需給

一方、「日本全体ではまかなえるとしても、東電管内は不足するのではないか」という意見

もあるだろう。それでは東電の設備を見てみよう。

東電の設備容量は、今年2月段階で6448・8万千瓦ワット、そのうち火力は3819万千瓦ワット、水力は898・7万千瓦ワット、原子力は1730・8万千瓦ワットなので、このうち原子力を除くと4718万千瓦ワットほどになる。これでは足りないように見える。しかし、これに他社の発電量を足さねばならない。もちろんこの際原子力は除くとしても、過去の実績から見ても1000万千瓦ワット以上は供給できるはずだ。

例年よりも東北電力に多くを依存できないにしても、十分まかなえるだけの供給量を持っている。そのほかに、産業界は緊急事態であることに鑑みて、自家発の設置やガスタービン発電所の建設を急ピッチで進める体制をとっている。

これにより、東電だけでも今年夏までに推定150万千瓦ワットもの発電所を建設し、数年後には数百万キロワットにも達するとみられている。省エネ努力も重なって、「東電の電力需給は既に問題のない水準に回復した」との見方が広まっている。

例年通りならば、夏のピークを東電のみでまかなうには、6400万千瓦ワットほどの設備が必要だが、昨年のような暑い夏でも、ピークシフトなどで6000万千瓦ワットの供給体制があれば、まかなえる。さらに、省エネの呼びかけで10%電力ピークが下があれば、5500万千瓦ワットでも十分なのだ。

なお、このような場合に往々にして起きることだが、ピーク時間帯は午後1時から4時ぐらゐまで。健康に問題のある高齢者や乳幼児に対しては、高温環境に長時間晒すことは、生命維



持に危険であり、絶対に我慢を強いてはならないことを、強調しておく。

## 「計画停電」の理由

では、なぜ3月11日の地震直後に計画停電が実施されたのだろうか。

理由は「発電所が震災に遭ったから」だ。そう、地震の後遺症で停電したのである。

これだけならば当たり前のことだが、さらに、東電の原発が、軒並み地震により被災し、全く稼働できない状態が長期間続くことになり、そのために、急には電力をまかないきれない事態に直面したからだ。

東電の発電設備は、全6498・8万キロワットのうち、1730・8万キロワットが原子力である。

3月の電力消費量は、一年のうちでも低い時期に当たるが、それでも地震直前の3月上旬は3700万キロワットを超えていた。その時期に、原子力が供給していた電力は、柏崎刈羽の4基で491・2万キロワット、福島第一で3基202・8万キロワット、福島第二で4基440万キロワット、さらに日本原子力発電東海第二原発110万キロワットも、稼働中だった。合計1244万キロワットが原発から供給されていたのが、一瞬にして、柏崎刈羽原発以外の全てが止まってしまった。

失われた発電電力量は、差し引き752・8万キロワットにのぼる。

さらに火力も多くが止まった。主なもので、広野火力2、4号機、常陸那珂火力1号機、鹿島火力2、3、5、6号機、大井火力2、3号機、五井火力4号機など、合わせて1000万キロワット以上の設備が被災し、停止を余儀なくされた。供給可能な設備は、最低の時には3100万キロワットに激減した。これが計画停電の大きな理由だが、火力は復旧が進んだので、計画停電も3月中には必要なくなっている。もし東電や東北電力が、半分以上の電力を原発に依存していて、他の発電所が無かったら、一年中、計画停電を余儀なくされたであろう。「原発が無ければ停電」ではなく、「原発があるから停電」してしまうのだ。

## すぐに立ち直った火力

4月下旬、既に被災から復旧した日立市の日立製作所では、急ピッチでガスタービン発電機の生産準備が進んでいた。三菱重工高砂工場でも、東電千葉火力用33万キロワット級ガスタービンの生産を進めている。東芝も、30万キロワット級のガスタービン発電所を複数台、GE社から受注。これらは、東北、東京電力エリアに設置される750万キロワット発電所の一部になるという。数年かけて、ガスタービン発電所が、1000万キロワット以上も増設される見通しだ（電気新聞など）。

増強だけではない。とても間に合わないだろうとみられていた、福島県の広野火力発電所も、8月までには復帰できる見通しだという。その他の火力もほぼ全て、震災前の水準にまで回

復する見通しで、東北電力も含めて、夏のピーク時までには、発電設備を復旧してしまうことになろう。

## 原子力是不安定

対照的に、原発は、復旧どころではない。福島第一原発の4基は、おそらく放射性物質の封じ込めさえ、夏になっても出来ていないだろう。気温が上がるにつれ、防護服に身を包んだ作業は困難を極め、作業員の交代が進まなければ、被曝線量の増大と作業環境の悪化により、作業を行える人さえいなくなってしまう危険性がある。電気をもたらずどころか、どれだけの人員と資源を浪費するかわからない。

福島第二も、女川も、到底復旧の見通しはない。柏崎刈羽原発が被災した際に、地震の影響を調べるだけで年単位の時間がかかり、対策を考えて工事認可を得、実行するのにも、どれほどの時間がかかるかわからない。もつとも、このまま、地元が運転再開を認めるはずもない。

原発は、たとえ放射性物質の大量放出がなかったとしても、地震により止まれば、年単位で再稼働は見込めない。したがって、原発ほど「当てにならない電源」はないのだ。

電力需給に際して、東電管内で今後一番懸念されるのは、柏崎刈羽原発の周辺で震度5強を超える地震が発生することだろう。柏崎刈羽原発を稼働させたまま、すなわち4基、合計491万キロワットを発電していて地震に襲われれば、瞬時にその電力を失う。もし、ぎりぎりの

供給体制だったら、おそらく東電の管内で広域停電を起こすだろう。柏崎刈羽の電力をカバーする供給量が確保できなければ、その後も計画停電を再度行わざるを得なくなる。

原発は、一度止まってしまうと安全点検などで、少なくとも1週間程度は再稼働できない。これほど不安定な電源に、いつまで依存するつもりなのか。もうはつきりわかったであろう。

今年の夏は、各地で軒並み最高気温を更新するなど、暑い夏だった。これに対して電力需要はといえば、7～9月の電力消費量は、日本全国を積算すれば記録を更新したが、ピークだけを見ると、以前より下がっている電力会社もある。東電の場合は、とうとう6000万キロワットを超えることはなく、最大が5999万キロワットだった。

このとき、原発は、どうであったか。

設備利用率を見るとこの3か月は、7月72・1%、8月70・8%、9月65・7%である。設備の3割は動いていないのだ。もちろん、全国54基の原発のどこかで、地震停止や長期補修をしているが、それだけでなく定期検査も行われている。

原発は、もはや真夏のピークですら、フル運転などしなくても電気が足りなくなることはない。現状はその程度だったのである。

## 発送電分離・再編で市民の手に取り戻す

現状がこのままでは、電力利権を温存し、次の災害を準備するようなものであろう。

では、今後どのようにすれば良いだろうか。

まず、誰もが考えつくのは「送電分離」、つまり送電会社を独立させることだが、それだけでは利権構造の解体としては十分ではない。まず、日本列島を南北につなぐ「超高圧直流送電線」を敷設し、誰もがそれに接続できるようにする。そうすれば、50サイクルと60サイクルの違いによる東西連系問題は解決する。直流送電線に接続する際に交流を直流に変換し、受電するときも直流から交流に変換するので、周波数の違いは吸収される。

この送電会社は、全国一社のほうが良い。また、供給義務を課するため、民間企業ではなく、政府も出資する公社にしたほうが良いだろう。もちろん誰もが出資できるようにする。安定供給をどうするかは仕組みは大切だが、各電力会社でこれまで安定供給を支えてきた技術者が、大勢いる。

問題は仕組みであって、能力ではない。

現在の1億8000万キロワットの発電設備には、供給予備力も含まれる。全国送電網が完成すれば、各電力会社で供給予備力を持つ必要などなくなる。日本全体で10%を5%に下げても十分だろう。何もしなくても自動的に900万キロワットもの発電設備がいらなくなるのだ。初期投資としての幹線送電線建設には、数兆円規模の費用がかかると思うが、既に作ってしまった新幹線網を有効活用すれば良い。その軌道に併設すれば、建設コストも安くできるだろう。山を切り開き自然を破壊して作るなど、もうやめた方が良い。

直流送電線は直径0・5メートルほどの超伝導ケーブルを使うので、送電ロスはほとんどな

くなり、かつ既存の高圧送電線を大量に吸収統合できるので、電磁波や景観の問題解決にもなる。建設にかかる費用は、1基4000億円以上の原発建設コストを考えれば安いものだ。この直流送電は、ヨーロッパや中国でも本格的に導入されているので、技術的には問題はない。むしろ高効率のものを日本が開発すれば、世界中に売れるだろう。

太陽光発電や、風力発電が、直ちに原発に取って代われるわけではないし、それらが、必ずしも環境に良いというわけでもない。また、新たな利権構造を生み出すことも考えられるので、大規模発電所でないほうが、経済効率があがるような仕組みにしなければ、改革にはならない。分散型の自然エネルギーを持つ人びとが、好きなきに好きなユーザーに自由に電気を売れる。たとえ北海道でも九州でも。それが最も健全な姿であろう。

それが出来るまでは、天然ガス火力発電所を新設、増設すれば良い。

天然ガスの大きな利点は、その高い熱効率にある。原発は、熱のたった3割しか電気にできないが、天然ガスは、6割以上を電気にできる。また、廃熱も回収して、地域にエネルギー源として供給できる。大量の電力を消費する際に生ずる熱汚染を、原発は海に捨てることで拡散させているが、天然ガスならば再利用できる。

同じ熱量を発生させて、ほとんどを捨ててしまう原発と、どちらが環境に良いか、論ずるまでも無い。

(たんぽぽ舎)

言いつづけて、訴えつづけて、これからも

——ある「卓話」から——

末永節子

私は今、怖くて、怖くて、腹が立つてたまらない気持ちです。特に専門家でもないのですが、これまで、ただ、〈脱原発〉を目指してやってきました。そのことが、言ったとおりになつてしまったじゃないか。——このことが私の怒りの基なのです。なぜ私が怖がっているかを、これからお話しさせていただきます。

私は、普段、あまりテレビを見ないのですが、ニュースを見始めると、「いつ原発のことを言い出すか」と目が離せず、テレビ依存症になつてしまいました。「何とか生活を改めなければ」と思うのですが、テレビに流れる原発の情報が正しいものとは思えず、私にはウソだと思ふことも混じつていて、目が離せないのです。それにしても、原発の情報が、これだけテレビに流れるのは、これまで無かったことです。

私たちは、〈原発マフィア〉と呼んでいます。原発で儲かつて、儲かつて、原発に寄りかかってきた人たちですが、「原発つて、こんなにも恐ろしいものだ」と言い出し始め、「本当に恐ろしい事態になった」ことを感じます。

私は、40年くらい前から、合成洗剤の危険性について、いろいろ運動を続けてきました。合成洗剤による手荒れなど、「今は改良されている」という人もおりますが、「なぜ合成洗剤が恐ろしいのか」と言えば、「遺伝子に対して衝撃を与える」ということで、反対をしているのです。

いわゆる界面活性剤というのは、本来混ざることのないもの。「界面」という、水と空気の間で、その隙間の力関係をこわし、混ざるはずのないものが、水に混じって、ありとあらゆるものに入りこんで遺伝子に影響を与えるという恐ろしい事実を、看過するわけにはいかない、と思うのです。それと同じように、またそれ以上に「原発は、あつてはならない」ものです。発がん性物質や放射性物質には「閾値」というものの、つまり、「部屋という空間を仕切るための襖を立てる閾のこと」ですが、それが「ない」と言われます。ですから、政府は、「水で薄めるから大丈夫」と言いますが、「〈大丈夫〉という閾がない物質だ」と考えておかなければならぬと思います。

実際に、一粒であるか、百万粒であるか、確率が低ければ危険性がなくなるわけではなくて、一粒のタマは、必ず誰かに当たります。

発がん性物質や放射性物質は、その危険性において、同じく恐ろしい性質のものだと思えます。「人体に影響がない」というのは、「今死なない」だけで、「じわじわと人体に及んで、将来のいつか、ボールに当たって癌になって死ぬかもしれない」ということです。この怖れには何も触れないで、「今倒れるか、倒れないか」ということだけを問題にしている卑怯さを、まず、



問題にしたい、と思います。

東日本大地震が起きました。「想定外だ」とか、「こんなはずではなかった」と言われますが、今は、「地球全体、プレートとの動きが活発になってきている時期」です。津波は20メートルに及んだとか。私たちはテレビで、スマトラ津波の時も、その実状を見ていたはずです。

日本でも古くは「貞観の大津波」などもあり、三陸海岸をおそった津波は、今に始まったわけでもありません。「想定されていませんでした」とか言いますが、何を言うのか――。

「津波も地震も起こらないことを前提に」政府や原発マフィアたちは、「海岸に並んだタンクが津波なんかで無くなるはずがない」とか、「逃げる道の確保なんて必要ない」と決めつけて、安全神話をふりかざして原発推進を続けました。人間にとって、「起こりうる最悪のこと」を想定しておかなければ、何かが起こった時に対処できないのは当然です。「危なくないこと」を前提にしてしまったら、そこですべての対策が止まってしまう。「そのほうが金もかからなくて済むし、どこにでも原発は建てられる。建てれば数兆円のお金が動くし……」ということで、原発マフィアたちは、その上に乗っかってきたわけです。

本来、政府は「国民の命を守る義務を負っている組織」であるはずです。最も高い安全性を重視して政策を立てねばならない政府が、その義務を果たさない。私たち国民が、それを許してしまったこと、事実をあばいて阻止しなかったことが、悔やまれてなりません。

政府が、後手後手にまわってしまうのは当然です。

私たちがよって立つべきは、「命を守ること」です。政府に突きつけて、「実際に、それを実

行する政府を作ること」だと思うのです。

命を大切に思わないから、次から次と出てくる情報にウソがある。私たちがパニックにおちいるのは、「確かでない情報に対する不安」が、そうさせるのです。情報を出し惜しみるのは、私たちを馬鹿にしているので、「パニックに陥らないため」は、何の役にも立ちません。

こういうことが起きてくると、何でもかんでも自衛隊が出てきます。なんと、自衛隊は幕僚長が出てきて、記者会見までしているのを見ると、いったい何が文民統制なのか。軍人が出てきて「我々が国民を守ります」とテレビに向かって言う事態まで生じてしまいました。「原発災害を抑え込む力がないから、それは最善ではない」のに、軍隊以外の手段がないのです。何しろ「原発の爆発は起こらない」と決めてしまっているのですから、核物質の放出に対して対処する専門的な備えを、何もしてこなかったのです。

自衛隊は軍隊です。現場に出て行つて、人が死ぬか死なないかを計算して、そして出動する組織です。もしも核の被害を受けたら、一番ひどい目に遭うのですから、防護服も持っているし、マニュアルも持っているわけです。米軍も、もちろんそうです。

原発もそうですが、今まで、米軍の多くの原子力潜水艦は、言うまでもなく原子力で動いて、原発と同様、原子炉を積んでいるわけです。そして、「事故を起こしたとき、どうしようもなく海に沈めて済みます」ということが、何件もあったと言われています。確証はありませんが、考えられることです。

ですから原子力に対応する能力があるかどうかは別として、今回の事故においても、水をか

けるのにも自衛隊のヘリコプターを使うわけです。消防の力では及ばず、機材を運ぶ仕事とともに自衛隊の力を頼るしかないのです。すべて機材は軍隊に集中しているのです。そのことが、今回、明らかになりました。

国民を守るために出動するのではなく、起こるか起こらないかわからない、また決して起こしてはならない戦争のためにだけ、これだけの機材と人員が配置されていたということに、毎日、腹が立ってたまらないのです。

今回の原発事故は〈人災〉です。〈想定外の規模の津波〉は、〈天災〉と言いますが、これは明らかに〈人災〉というべきです。この人災が、多くの地震と津波被災者の人びとの救援を遅らせ、妨げているのです。

枝野官房長官が、「原発のために手を取られてしまつて、たくさんの方々がたには水も食料も届けられない。だから、あわてて物資を届ける係を作りました。」と発言しました。何という政府でしょうか。何という事態でしょうか。この二次的な人災のために、たくさんの方々が失われたことも、あると思います。

周囲10キロ、20キロの範囲に人の立ち入りは許されませんので、遺体は放置されています。今ようやく警察官が10人ずつ組んで空き家を巡りながら、「本当に住んでいませんか」と呼びかけています。

「10キロしか離れていないところですから、こんな危険なことはやるべきではない」と私は思います。また新しい被曝者を出すことになってしまいますから。

これまで、《脱原発》を、たくさんの人びとが叫びつづけてきました。国会でも、あれだけ問題にしたのですから、「政府が知らない」とは言わせません。私たちも、何回も何回も、九州電力に足を運んで警告をしつづけてきましたが、「絶対に事故は起こしません、想定していません」と繰り返すだけでした。

今回の事故は、明らかに人災です。

「原発とは何か。」ご承知の方も多いと思いますが、私の知見で申し上げると、原発とは「水」です。「水」が勝負です。ことは簡単です。大きな、ものすごく巨大なヤカンを想像してみてください。あつという間に400度もの熱が出る巨大薬缶です。

薪や炭を燃やして沸かすヤカンです。薪の代わりに、「原子力という危ないものを使っている」のが違いです。沸いたお湯で蒸気を出して、それがタービンにまわる。その配管が建屋の方へたくさん通っていて、配管を通して水がぶくぶく煮えたぎって、蒸気でタービンを廻す。それはいまから、一回で、「ハイお湯が沸きました」というわけにはいきません。蒸気を出して、蒸気を出して、さらに蒸気を出して、沸かしているお湯は、ものすごく危険なものなので、外に出さないように閉じ込めておかねばならない宿命を持つヤカンです。

このヤカンは、困ったことに、立ち上げること、熱をさますことが、簡単にはできません。ガスは、つけた火を消せばお湯はさめますが、原子力の場合は、そうはいきません。大変に危険で、「一度火をつけたら、2年間はずっと、つけっぱなしにしておかねばならない」の

です。どんなに電氣を使わない時間帯でも、原子力発電所は、ずっとお湯を沸かし続けている。「止めにいくから動かし続けなければならない」のです。

ガスタービンや火力は、スイッチを入れれば動き、切れば止められますが、原子力発電は止められないから、原発から流れ出る電力は減らすことができず、出力を他で調整しているわけです。

また原発というのは大変熱効率が悪いのです。危ないものを炊いていますから、何重にもしてタービンを廻さなくてはなりません。その上、出来たお湯は、他に使うわけにいかない危険なものです。

大変高い放射線を発していると、隣にあるものも汚染され、放射性物質になってしまいます。ですから、「圧力容器があつて、格納庫があつて、建屋があつて、タービン建屋があつて……」というふうは何重にもして水を廻しているのですが、それでも、いろいろなところに放射性物質が出来てしまいます。ですから、そのお湯を途中で取って利用しようとしても、簡単にはいきません。

そこで、タービンを廻すのにちょうどよい分量の蒸氣を取って、余分の熱を海に流しています。玄海原発のある海岸の海水の温度は、平均で4度上昇して、あちこちで海が煮えています。海の生態系が変わる状態になっています。

「原発をコントロールしている主なものは水」ですから、臨界を起こす時も水の中でやります。運転を止める時は、ゆっくり止めなくてはなりません。燃料棒の間に制御棒を入れて止めるの

ですが、急ぐ時は水をかけて急激に冷やさなければなりません。「何か起こった時は水をかけて止めることができるから安心」と言われてきたのですが、その冷却ができなくなりました。

何かの時に水を送り、また止めるのは、電気です。ですから原発には外部電流から電気が通っています。原発でも電気を作っていますが、原発を動かすのは、外から引いている電気です。

今回、福島原発でも、「止める、冷やす、閉じこめる」と言っていますが、ブレーキをかけて、とりあえず運転は止まりました。止めたから、直ぐに火が消えたから、じゃあヤカンが直ぐに冷えるか、というと、そうはいきません。水をどんどんかけて、凄いい勢いでかけて、100度くらいまでは落ちます。しかし100度からゼロになるまでには、大変な時間がかかります。場合によっては、何年もかかります。原発というのは、そういうものなのです。

止めることはできても、冷やすことは、やっかいで、本当に深刻です。

「冷やさなければ、どんどん熱くなり、一時は400度を越す高温になった」と、福島第一原発について発表されました。（後には2800度を超したと発表になりました）

そして、「原発を冷やす水がなくなり、冷却装置を動かす電気もなくなってしまう」というのが、今回の事故です。

2号機については、压力容器については、「どこかが壊れて、そこから放射性物質が洩れている」と思われます。压力容器はガッチリ造られています。しかし絶対に穴があるんです。つまり冷却水を入れる管、抜く管の、少なくとも2本。2本だけとは限りません。それに蒸気を出すためのベントもついています。それと、制御棒という、黒鉛で作られた棒で、中性子が出

すぎないように制御しているのですが、その制御のための制御棒は、原発の下部から入れるようになっていきますので、密着しているとは言え、弱く、穴がある部分があります。それが300本、400本にもなれば、「少なくともその数だけ穴があく怖れ」をかかえています。

「圧力容器というのは、どんなに圧力をかけても、こわれないか」と言うと、そんなことはありません。「2号機で、あれだけ強い放射性物質が出ている」というのは、圧力容器のどこかの穴から洩れている危険性を否定できません。

危うく止めましたが、冷却水は電源喪失で廻りませんから、「高圧ホースで水をかけ、ホースをつないで炉心に水をかける」ということをやっているわけですが、その上にまた使用済み燃料プールも熱くなって水をかける、というのが今の状態です。

そのようにして、本来は「閉じこめられた空間の中だけで高放射性物質は動く」と言われてきたわけですが、今は、そんなことは言ってられないわけで、高レベルの放射性物質が外へ洩れ出すのを承知で、炉を冷やしています。通常は、そこから出てくる空気も浄化されて循環しているのですが、今はその循環ができなくなっています。放射性物質に汚染された水と空気と土壌が、そこいら中に溜まっているわけです。

原発は、水と電気で動いていますから、あらゆるところにコードが張られています。

私は実際、原発の中に入れて貰って、この眼で見ましたが、あつちにコード、こつちにコードと、ありとあらゆるところに迷路のように張られていたコードと管に電流を通すのです。水があれば、どこでショートして火花を散らし、二次災害を引き起こすことにもなりかねません。

原子炉を制御するための電気系統も、タービン建屋の中にあります。

タービン建屋の電気系統がつかないかぎり、原子炉を正常に冷やすわけにはいきません。ですから何とかしてタービン建屋の水を取り出す必要に迫られています。それをしないかぎり次の段階に進めないのです。压力容器の中に非常に強い放射性物質をもった燃料棒と、今、止めている制御棒が入っているのですが、それは水の中に入っています。空気中にあるよりは水の中に入れておくほうがコントロールしやすいため、水の中に置かれます。その水位がどんどん下がってむき出しになってしまつて、一番ひどい所では3分の2くらいまで上に出てしまつたと言われています。

むきだしになった結果、温度のコントロールが効きません。燃料棒というのは、ウランやプルトニウムを固めてペレットという薬の錠剤のような形にしたものが積み重ねられ、ジリコニウム合金でできた金属管に詰めて棒状にされて、それを束ねてあります。

ジリコニウム合金は、400度という高温を想定していませんから、それが溶けて気体になつてしまつて压力容器の中をただよつて、容器の中の水と反応して水素が発生し、「どこかで水素爆発が起こつたのではないか」と推測されています。

それから、もう一つ怖れていることは、「ペレットが溶けて、压力容器の底にたまつてくる。たまり過ぎたことによつてコントロールできなくなり、制御棒は入っているものの、抑え切れなくなつて、再臨界状態になる。今、それを、必死に抑えこもうとしているのではないか」と思われます。



「チャイナシンдрーム」というアメリカ映画がありました。「そのようにして溶け出したものが原子炉を溶かして建屋を溶かして、地球を突き抜けて反対側の向こうの端までいき、中国に達する」という映画です。「地球の反対側に達しなくても、途中には、必ず水がありますから、水と反応して水蒸気爆発を起こして、チエルノブイリのような事故になる」という筋書きで「チャイナシンдрーム」と名づけられたのですが、現実にはそれが心配されているわけです。

「核物質がこわれていく時は、中性子を出して、崩壊熱を出していく」と言われますが、「その中性子が隣の物に当たって、こわす。また次をこわす」というふうに核分裂が連鎖していくのですが、中性子の働きを、抑えるためには、ホウ素というものが役に立つので、真水の中に、ホウ素を溶かして、炉心を冷やしています。温度が下がるように、海水でも何でもいいから大量の水で冷やしているのが、今、せいっぱいというところで、どの炉についても、安定コントロールができていません。

「核燃料と死の灰が原発の中にたまって、それが水や空気に混じり飛び散ったのが土壤に浸みこんだ」——それが現在の福島第一原発の状況です。

「第二原発のほうは止まった」と言われますが、電気と水で必死になって冷やしていることでは変わりません。「いざという時には外に非常用の電源を作っており、非常用の用水も備えられている」と言ってきたのですが、それが全部こわれて役に立たなくなりました。一台だけ動いたのですが、30分で燃料が切れてしまいました。

その燃料が補給できないのは、燃料補給タンクが、全部、海側にあったから、流されて消えてなくなってしまったのです。今まで、すべて電気で動いていたのが電気が使えない。ようやく外部電源が復活し、明るくはりましたが、それまでは暗闇の中の作業でした。

防護服は着けていても、それ以上浴びてはならない基準数値がありますから、プザーがピーツと鳴るのです。一人入って3ミリねじを締め、次の人が3ミリ締め、また次が4ミリ締めて……というふうに、たくさんの人が放射能を浴びながら、これまでも、そのようにして原発事故は修理されてきました。

高いところで見ている人は安全ですが、「10万円あげるから行っておいで」と言われて、使い捨てのように安い労働力が使われて原発を維持してきたのです。防護服の着方もよくわからず、線量計の見方もわからず、誰も呼びに来てくれなかったので1時間経った人もいて、病気になるったり、亡くなったりする人もいます。

原発は、今までもこうして維持されてきたわけで、今度の事故も、たくさんの人が、そういう場で働いている現実があります。

しかし、この事故をなんとしても解決しなければ全部が吹っ飛ぶかもしれないし、世界全体が危機にさらされてしまいます。実際、今、そこで働いている人たちの命がどうなるのかを考えて、私はヒヤヒヤしています。

もう一つ、使用済みの核燃料プールが煮えています。

原発の中で、一応運転を済ませて使用済みとなったものは、建屋の中にあるプールの中で、

ずっと冷やしています。

「もう少し冷えてきて、動かしていい」と決定したものは、外の敷地内のプールに移して、冷やし、「さらに動かしていい」とする最終段階で、青森県の六ヶ所村に移されますが、そこには、使用済み核燃料が3万トン溜まっています。怖くてたまりません。そこだつて電気と水で冷やし続けているのですが、絶対に事故は起こらないとはかぎりません。（今回の余震で、60分電源喪失になりました。）

使用済み燃料プールにしても、原発が10機あればプールが10機、あわせて20機あったようなもので、高度な管理を必要とする物質を、かかえもっているわけです。

それを、これからどうするのか。

ウランとプルトニウムの両方を混ぜてMOX燃料を作り、それを燃やし動かすのが（プルサーマル運転）です。

この〈MOX燃料〉については「大丈夫」と、原発マフィアは言ってきましたが、福島原発の3号機も玄海原発の3号機も、プルサーマル原発です。燃料棒の中にはウランとプルトニウムが入っています。それが飛び散ってしまう危険があります。半減期（放射能の力が半分にまで弱まるためにかかる期間）は、プルトニウムでは24000年と言われています。

「ヨウ素は8日、セシウムは34日」と示されていますが、プルトニウムなど、もう考えられないほど長い時間をかけて管理し続けなければならない危険な物質なのです。「安い安い」と、原発のコストを言いますが、この危険な物質の管理に要する費用を、誰が計算するのでしょうか。

いま資源開発費と言われる巨額の税金が使われています。それは仕分けの対象になりませんでした。なんと、その98%を日本では原発につきこんでいます。世界中で原発のみに税金を使っているのは日本だけです。他の国々は、地熱をはじめ、いろいろなエネルギーを開発しているのに、日本は、原発一辺倒です。

スペインやドイツ、スウェーデンなどは、自然エネルギーに切り替えようとしています。

ヨーロッパスタンダードも、もう原発の見直しに舵を切ろうとしています。アメリカだって「止めよう」と言い始めていたのに、最近、また、オバマさんが「やります」と言い出してしまいました。日本は最近、アジアや途上国に原発を売り込むことに、民主党が踏み切りました。民主党の中には原発を主張する議員もいるはずなのに……。

被曝のことについて、枝野官房長官は、「危なくない。危なくない」と言っていました。私はそれが一番こわいのです。「内部被曝と外部被曝の二つを考えなくてはならない」と思います。外部被曝は、外からの放射線を浴びてすぐに具合が悪くなる場合を指すのですが、洗い流せばたくさん量でない限り、通りぬけてしまうのです。

それよりも、内部被曝は、人間の体の中に、水や空気や食物とともに放射性物質を取り込んでしまうものです。

もともと体の中にあって人類が付き合っている物質は、身体に入っても、外に出してしまいう仕組みになっているのですが、今問題になっているヨウ素などは、人間の体には足りないものなので、何とかして貯め込もうとする。特に甲状腺に入ってくれば、そこに貯め込もうと

します。とりわけ子どもや赤ちゃんは何倍も貯めてしまします。

また、プルトニウムは、人間の肺の中に入って絶対にあたると打続けます。

「半減するのに24000年以上かかるような物質が体に入って、ずっと放射線を出し続け、影響を与え続ける内部被曝は恐ろしい。とりわけ子どもにとつて恐ろしい」と思います。

だから私たちは、ウソにだまされしないで、正しい情報、つまり放射性物質が、どんなに長く人体に害を及ぼし続けるかを見極めなければ、と思います。ベラルーシでは、「癌を発症した子どもを親が看取る」という状況が起こっています。チェルノブイリから200キロのある村では、子どもの半数が、ヨウ素のために甲状腺癌を発病しています。なんと残忍な人体実験になってしまったことでしょうか。

今、日本が外国の諸機関から攻撃されているのは、「どれくらいの放射性物質を出してしまつたかを、なぜ報告しないのか」ということです。「少なくともスリーマイルズの事故よりも大きく、チェルノブイリの三割程度」と、イギリスの関係機関が発表しました。しかも、これから、まだ被害は増えると思います。（日本政府は、4月12日、レベル7の事故であることを認めました）。事故が拡大したら、私たちは逃げられるか。チェルノブイリでは200キロが立ち入り禁止となりました。フランス政府は1200キロ離れているパリで、生で野菜を食べることを一年間禁止しました。放射能物質は、雨に乗って、風に乗って、水に乗って、飛び散っていくのです。

幸いと言っているのか分かりませんが、偏西風が吹いています。大概の風は、西から東に向

かつて吹いています。ドイツの気象庁は、毎日、今日はどういう風が吹くか、明日はどういう風が吹くか、というふうに福島県の気象予測を出しています。インターネットで見ることができ、ますので、福島の放射能が、どれだけ広い範囲にばら撒かれているかがわかります。

大部分は偏西風に乗って西に行きます。九州で、もし玄海原発が事故を起こしたら、福岡市の中心にある天神まで60キロ、糸島市の二丈まで11キロですから、佐賀県であつても、被害は福岡県など全国に及びます。

近くに住む福岡の私たちも、玄海原発を止める義務があります。こんな狭い日本。どこへも逃げられません。すでにパスポートをとって家族全員外国に移住してしまった人を知っています。しかし私の家は、そんなことはできません。できる限り正しい情報を集めて、冷静に対処するしかありません。「風評被害」と言いますが、正しい情報を出しさえすれば、あり得ないことですから。

放射能は、風に乗る、雨雲に乗るして、時に雨の重みで地上に落ちます。

原発事故には、ホットスポットというのがあります。全体にわたって汚れるわけですが、雨と共に、あつちに落ち、こつちに落ちて拡がります。落ちた所がホットスポットになります。離れていても特別に土壌が高濃度に汚染されてしまうので、そこからは逃げなくてはなりません。その情報については、正しい、そして詳細なものでなければ役にたちません。私たちは正しい情報があれば、風評などに惑わされず対処できるのです。たとえば、うんと汚れたものは食べないほうがいいし、それを作らないほうがいい。栽培をやめて、土地の浄化が出来て、初

めて被害を回避できるのです。葉種やひまわりは土壌の浄化機能があるといわれます。

「原発を止めたら電気がなくなる」と言われます。が、原発は、一度燃やし始めたら止めるのに長い時間がかかりますから、止めるのは困難です。だから、原発での発電量の調整は困難です。火力や水力発電を止めて調節されており、余力があります。

原発がなくても、日本では電気は足りません。無駄遣いをしないようにすれば、原発に頼らなくても足りるのです。遠慮しないで原発を止める運動をしていいのです。この事故を教訓にして、なんとしても原発を止めましょう。

「玄海原発は佐賀県」と思ったら間違いで、福岡県も、その地もとです。玄海原発は、事実上、福岡県の問題でもあるのです。プルサーマルの恐ろしさ。これも看過すわけにはいきません。

地震も、地球規模でプレートが活発化する時期にあると言われます。内陸にある長野県でも、地下の断層が動き始めました。浜岡原発の地下も動き始めています。あの辺に地震が起こって浜岡原発の海底のプレートが動いたら、首都東京全土に被害をもたらすでしょう。

何よりもまず第一に浜岡原発を止めて貰いたい。もちろん玄海原発も。

鹿児島県の川内原発で、今、3号機が建設されようとしていますが、159万キロワットという巨大なものです。

私たちは今、パニックにおちいることなく、東電の悪口は、もちろん言わなければいけません。それだけではなく、何としても原発を止める運動をしなければなりません。明日では遅いのです。

（この卓話は4月5日に話されたものです）（I女性会議福岡県本部副議長）

# ハノーバーから

諸岡 亮子

3月11日の大震災から、早いもので、一か月以上となりました。

震災直後は、あまりにもひどい被害の映像がTVに映し出されるたびに、胸が痛くなり、一週間は仕事も手につかないほどでした。この一か月、私なりにドイツについて、そして、日本について、いろいろ考えさせられたことの、いくつかを書いてみたいと思います。

まずは、原発問題です。

このドイツでは、あの震災後、原発に関する国民の考え方が、本当に変化しました。

もともと何十年以上前から、反原発を党是とする緑の党が存在し、ここ数年、勢力を増していました。今回は「福島」がキーワードになった3月末の州選挙でも、その緑の党が躍進し、史上初めて、緑の党が主導の政権が確立されることになりました。

なぜ、ドイツ人は反原発の方向に向かっているのか、その大きな原因は、まず国民が原子力発電に伴う危険性を、日本とは比べものもないくらい認識していることだと思います。私が渡独して、もう25年以上になりますが、あのチェルノブイリも、こちらで体験しました。その際、ドイツ人は、原発事故の恐ろしさを、本当に身にしみて感じたのです。当時は、私たちも、



新鮮な野菜を食べられるかどうか、心配しました。今でもドイツとチェコの国境のキノコは、放射能の値が高いそうです。

そういう背景もあって、与党、野党とも、原発からのエネルギー供給は、非常に慎重でして、将来的には再生エネルギーと言われる、風力、バイオマス、太陽光発電などの開発、設置普及を急ぎ、そのシェアを高めることに、今までも力を注いでいます。もちろん与党は、電力会社との関係で、原発の廃炉の時期をできる限りのばそうとしています。が、今の世論では、「即、原発ストップ」が大半を占めていて、私の予想では、ヨーロッパでも一番にドイツが原発全廃を実現するのではないか、と思います。「消費者が従来の電源から、エコ電源(ökostrom)の配給会社に、どんどん契約改定の申し入れをしている」と、昨日のニュースも伝えていました。こちらでは、自由に電力会社を選択できますので、タリフの値段に応じて、個人で電源供給先を決められます。

私がよく、ドイツ人に質問されるのは、「原爆を経験した世界で唯一の国、日本が、地震、津波、台風といった災害に毎年あう危険を承知で、なぜ、これだけの数の原子力発電所を設置したか」ということです。

もちろん私は、経済、エネルギー対策の専門家ではないので、うまく答えられませんが、第一の原因は、私たち日本人が、電力会社や、政府の「原発は絶対安全である」というキャンペーンをほとんど信用し、あまり真剣に「エネルギー問題」「原発の安全性、または危険性」を

考えてこなかったことにある、と思っています。

原子力エネルギーはまた、「他のエネルギー供給源と比べて安価である」とも言われていますが、私の友人たちは、このドイツでは、核廃棄物の処理の問題も解決のめどがなく、毎年、フランス原発からの廃棄物輸送は最終地の核廃棄物中間倉庫ゴアレーベン（私の住んでいるニードーザクセン州にあります）まで、すごいデモで（今年は特に数万人集まりました）一週間その警備に当たる警察の費用も、馬鹿になりません。

これも、ドイツ国民の税金からまかなわれていることを考えると、「最終的には原子力エネルギーはハイコストのものだ」というのが、ドイツ人の理論です。今回の福島の問題でも、現発電所の原子炉の廃炉、そして、廃棄物処理、土地の整地に30年以上（イギリスの専門家の試算では100年）かかるということを、東芝や日立の関係者が報告していますが、どのくらいの日本人がこのようなことを想定していたでしょうか。この間の放射能の人体、自然への危険性は、なくなることはないのです。

ドイツでは「原子力（これは核兵器も含め）の存在そのものが、人類の脅威である」という見方は、少数意見ではありません。日本でも最近では、省エネということが大きくとらえられているようですが、ドイツでは、例えば「家電のスタンバイスイッチ（TV、オーディオなど、リモコン操作でオンオフするだけで本体の電源を切っていない状態など）を使わなければ、今すぐにも2か所の原子力発電所を閉鎖することができる」と言われていますし、日本のように、昼間でも夜でも照明をつけっぱなしにすることは、ほとんどありません。これは、こちらに來

られたことのある方がたには、よく御理解いただけるかと思います。(夜は薄暗い部屋でのキヤンドルの光が当たり前の国ですから。)

我われ人間が快適に生活していく上での大前提として、ドイツでは、「自然との協調」が、ただの言葉やメッセージとしてだけではなく、日常生活に反映されています。

ドイツのメディアでは、震災後一週間くらいは被災地からの中継や避難者の状況などが報道されていましたが、その後は毎日、福島原発の深刻な状況が非常に細かく説明されています。私は、ドイツ、イギリス、アメリカ、そして日本の報道を、インターネットで並行して見ていますが、特にドイツは、放射能放出による影響についてのテーマが多くなっています。特記すべきは、事故後、割と早い段階で、TEPCO、東京電力の無能ぶり、ずさんな安全対策を取り上げていたことです。これについては、日本は、当時ほとんど触れていませんでした。もちろん、日本のメディアは、不要な混乱、パニックを避けるために、あえて、真実をすべて報道することはできないでしょうが、あまりにも海外からの情報と違いがありすぎるのが気になります。特に、危険と一番隣り合わせになっている、東日本の方がたには、冷静になっていただくためにも、科学的な根拠のもと、うそのない情報提供が必要なのではないでしょうか。私としては、被害に遭われた地域の方がただでなく、日本中で原発問題の議論が活発になることを、本当に希望します。

高度成長の時期を過ぎて、日本のエネルギー需要は、横ばいになると言われています。一人

ひとりが自覚して、省エネ、そしてエコを考えて、自然と共に生活していけば、少しは世界が変わってくると思います。今、私は、それを、このハノーバー、ドイツで実感していますから。

さて、今回の災害は、あまりにも大きなもので、世界中の人びとがショックを受けたと思います。私も震災後、ドイツ国内はもとより、ヨーロッパ中の友人から、手紙、電話、メールが入りました。地震、津波は、ドイツには無縁なものなので、（私はヨーロッパでは一回だけベルギーで揺れを感じたことがありました）、とにかく、びっくりしたようです。地震後の週末は、私は、教会での礼拝でオルガン演奏の仕事がありました。日曜日には、さっそく特別に「日本の犠牲者のための祈り」が入りました。現在まで（もう一か月以上になります）市の中心のマルクト教会では、毎日11時6分に、日本の方がたのための「夕べの祈り」が行われています。

義援金活動も活発で、各地でチャリティコンサート（地元の音大生、オーケストラのメンバー、——これは日本人を中心にしたものですが、もちろんドイツ人も参加しています）で、有名などころでは、ミュンヘンでのドイツレクイエム（ケント・ナガノ氏指揮）とか、ベルリンフィル、シユターツカペレ合同コンサート（サイモンラトル、ダニエルバレンボイム）などが開かれています。ここハノーバーでも大植英次さん指揮で（大フィル指揮者、そしてハノーバーの放送響名誉指揮者）コンサートが、被災後10日後くらいに開かれました。

日本は、クラシック音楽家が多数来日していますので、日本のことを、他の被災国より身近

に感じる音楽家が多く、また友人を日本各地に持っている人たちも多いので、これだけ活発に義援金募金活動が行われているのだと思います。

私も微力ながら、数回チャリティコンサートで演奏させていただきましたが、先週、このハノーバーのメイン教会であるマルクト教会のオルガニストから、来年3月11日の被災一周年オルガン・ソロコンサートの依頼があつたのには、びっくりしました。もしかしたら、来年、今ほど皆の関心はないかもしれないけれど、とても意義のあることなので、すぐに承諾しました。日本は経済的にはもちろん貧しい国ではありませんが、これからのこと（特に福島状況）を考えると、経済的にもダメージはすごく大きいと、皆、予感しています。周りのドイツ人の友人たちの善意を無駄にしないで支援できたらいいなと思っています。

ところでハノーバー北ドイツ放送響のオーボエ奏者、松原清さんの弟さんが仙台で被災され、彼自身も家をなくされましたが、震災後、その土地の救援活動に入られました。

私も松原さんの呼びかけで寄付をしましたが、なんとハノーバー中心に1000万円近く集まったそうです。本当にドイツ人の暖かいところさに、胸があつくまりました。

ゲッティンゲン大学では、被災されて親を亡くした大学生への、恒常的な資金援助の準備が進んでいるそうです。

最後に、ドイツ人が今回の事故で日本人について感じたことをお伝えします。

まず、ほとんどの友人がびっくりしているのは、日本人がどんな状況でも非常に落ち着いて

いる（またはそのように見せている）こと、混乱状態でもアグレッシブな態度を取る人たちが少ないこと、辛抱強いこと、怒り（政府、役人、電力会社などに対して）をあらわにする人が少ないこと（これは数日前の漁業関係者へのインタビューで、少し見方が変わったようですが。彼らは本当に東電と国に対して怒っていましたから）、暴動、大きな犯罪がないこと（もちろん空き巣、窃盗などはあるでしょうが）などです。

「困難な状態でも、皆で助け合いながら生きていこうとする人びとの姿に感動した」「悟りの精神は、仏教からくるものか」などの質問もありました。

今週の週刊新聞ツアイトには、「日本人は（我々と）違った悲しみ方をする」というタイトルの記事が出ていました。ある友人は、どこかの記事で見た「地震、雷、火事、親父の序列の意味を教えてください」と言ってきました。とにかくこの震災の後、いろんな意味で、日本人の精神力の強さということは、世界中の人びとにアピールされたように思います。

私自身も、日本人の（特に東北人と言ったほうが良いのでしょうか）辛抱強さと、秩序を乱さない態度に感銘しました。寒さと集団生活で極限の生活をされる中で、人間としての尊厳を失わないのは、とても大変なことだと思いますが、子どもから年寄りまで、本当に頑張っていると思うます。でも、もう一か月すぎて、限界でしょうね。

とりとめもなく、思うままに私が今感じていることを書いてみました。ドイツに関心のある

方だけでなく、いろんな方に、日本国内では見えないもの、海外の反響など、少しでも知っていただけたら幸いです。

やっと桜の花が咲いたハノーバーから (2011年4月13日)

### ●筆者プロフィール

福岡県で生まれる。京都の立命館大学で東洋史を専攻。後にプロの音楽家として、本格的に活動を始める。

1983年、ドイツに渡り、ハノーファー国立音楽大学に入学し、ユールリッヒ・プレムステラーの下でパイプオルガンを学ぶ。ハラルド・フォーゲル、トン・コープマン、ダニエル・ロート、ルイジ・フェルディナンド・タリアヴィーニおよびヨリス・ヴァーディンらに師事。

ハノーファーのセント・ポールおよびナザレ教会のオルガニストをつとめると共に、ハノーファー国立音楽大学の講師でもある。

ドイツ、フランス、イタリア、スコットランド、ポルトガル、日本など、各国でコンサートを開催するなど精力的に活躍しているが、高岡音楽祭でブランクオルガンコンチェルトのソロを務め、好評を得た。これまで、Musique Nouvelle Liege, Musica alta Ripa, ハレ国立交響楽団、NDRハノーファー放送交響楽団、ポerland室内合唱団、アンサンブルコーラスケルン、リアス放送合唱団などと、オルガン奏者として共演してきた。

ハノーファー州立歌劇場では、バロックオペラの上演において、コンラート・ユングヘーネルの音楽助監督を務めた。

1995年より、バロック・プラス・オブ・ロンドンのオルガン奏者となり、コンサートツアーで共演している。

# 「原発」の真実を知ろう

登石 知子

大震災による原発事故が起きてから、すっかりした情報を得ようとして頭に浮かんだのは、『あごら』の特集だった。『あごら』313号『原発』を直撃した中越沖地震（2007・9）を開く。刈羽原発の沈降した敷地、冷却プールから床に溢れた水、ヒビの入った建屋の壁などの写真と共に、柏崎市内の倒壊した民家や亀裂の入った道路の写真が、カラーで生々しく迫る。そして、この被災レポートとともに、鎌仲ひとみ監督の映画「六ヶ所村ラブソデイ」（2006年作）から抜粋した「班目春樹教授発言」というページに、目が吸い寄せられた。

六ヶ所村には使用済み核燃料の再処理工場がある。班目教授は、2010・4・1から内閣府の原子力安全委員会の委員長で、原子力の権威とされている。教授は、「原子力発電に対して、安心する日なんか来ませんよ。せめて信頼してほしいと思いますけど。安心なんか、できるわけじゃないじゃないですか。あんな不気味なの。」と語っている。核廃棄物の処理に関しても、「最後の処分地の話は、結局お金でしょ」（P50）と発言をしている。怖ろしいことである。

今、マスメディアによる世論調査では、「脱原発」がようやく半数を超えたという。これだけの被害が出ているのだから、もう少し、増えてもよいのではないかと思う。利権を手放したくない推進派の動きがなかなか衰えないことも、人びとが脱原発に大きく動かない理由である。



う。推進派は、「原発を動かし続けることで増えていく核廃棄物処理」を、どうしようと考えているのだろうか。

インターネット「六ヶ所村ラブソディ」のサイトで、鎌仲ひとみ監督による著書、『六ヶ所村ラブソディ』（2008・11、影書房）が発行されていることを知った。この本によると、鎌仲さんのドキュメンタリー映画を作る姿勢として、「一市民として再処理は受け入れがたいが、……自分の中にそういう思いがあったとしても、出来る限り公平にフェアに全体を提示する視点で作品を作らなければならない。単に反対したり批判するための作品を作ったとしても意味がないと確信していた。」（P51）と記されている。推進派、反対派によらず、いろんな職業や立場の人たちに、その人たちの生活を丁寧理解しようというスタンスである。今回の福島第一原発の事故で、多くの国民が原発に大きな恐怖と関心を持ったに違いないが、当時、鎌仲さんは、六ヶ所村の処理工場で働く人の話や、受け入れざるを得なかった村の事情を知って、「……今でも、大半の国民が、自分たちが消費する電気のごみが、どこに行って、どうなるのかさえ知らないし、関心もないのだ」（P35）と書いている。「高レベル核廃棄物の再処理工場の候補に上がった、高知県津野村では、秘密裏に進んだ計画が町民に漏れ、勉強会を開き、映画を上映した結果、受け入れを断念し、高知県東陽村では、町長が町民に無断で受け入れを表明していたが、リコール問題から推進派と反対派とで選挙になり、反対派が当選した」とある（P69）。この本からは、原発について多くの人びとの活動が展開されてきたことを、この本を読んで初めて知った。しかし、それが、マスメディアで伝えられることはなかったので、私も含めて

もつと多くの国民は、知らなかった。

『あいら』286号「原発・その恐るべき実態」(2003・7)。樋口健二さんによる写真「原発を支える末端労働者」は、凄まじい。一級プラント配管技能工の平井憲夫さんの「原発がどんなものか知ってほしい」は、原発で作業してきた技術者からみた原発の姿である。

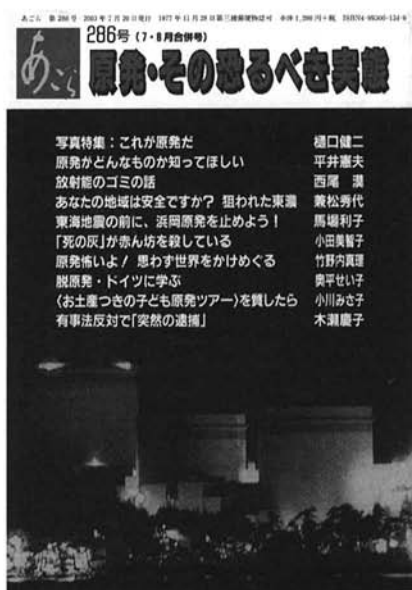
ちょうど泊原発2号機が試運転(1991・4運転開始)に入った時だった。平井さんが日本各地で講演した中で、北海道の泊原発の隣の共和町で話したときのこと的印象的である。講演が終わった後、「質問はありませんか」と問うと、中学2年の女の子が泣きながら手を挙げて「私、子どもを産んでも大丈夫ですか。たとえ電気がなくてもいいから、私は原発はいやだ。……」と、放射能を浴びていることの悩みを初めて打ち明けたという。平井憲夫さんの話は、インターネットでも読むことができる。<http://www.iam-tjp/HIRAI/>

東日本大震災の後、原発事故収束のため、「福島原発暴発阻止行動 プロジェクト」の結成をめざす活動が提起された。その目的は、「最終的に汚染された環境下での設備建設・保守・運転のためには、数千人の訓練された有能な作業者を用意することが必要であり、……身体の中でも生活の面でも最も放射能被曝の害が少なく済み、しかもこれまで現場での作業や技術の能力を蓄積してきた退役者たちが力を振り絞って、次の世代に負の遺産を残さないために働くことができるのではないか。」ということである。平井憲夫さんの話と共通する悲痛な願いが込められている。<http://bouhatsusosh.jp/>

「写真特集・これが原発だ 樋口健二氏」は、「原発内部は放射能の海」など、一般には公開されていない実情を明白に。

「原発がどんなものか知ってほしい 平井憲夫さんのお話」は、読み返しても身震い。

『あこら』286号  
『原発・その恐るべき実態』



『あこら』313号  
『「原発」を直撃した中越沖地震』



中越地震から3年。3年前の傷あともまだ癒えてない中越が、再び震度6・8という阪神淡路大震災の激震に見舞われ、原発に火災が発生。テレビ画面の炎と煙に仰天した人は少なくなかった。

# 脱原発デモに参加して

綿津 靖子

3月11日以来、じっとしていられず、いくつかのデモに参加してきた。いつもなら、比較的年配者の多いデモは、肅々と穏やかに進むのだが、今回は原発の重大事故だけに、参加者の表情に怒りや危機感がにじむ。デモは初めてというひとが8割ほどか。

工夫をこらした手づくりのプラカードには、「脱原発」「すべての原発を廃炉に」「原発止めろ」「福島の子どもたちを被曝させるな」などの文字がおどる。わたしは菜の花を持参した。土壌の放射性物質を根から吸収する働きがあるそうで、チェルノブイリ周辺にたくさん菜の花を咲かせているという。

シュプレヒコールは5、6通りの文言が延々と繰り返されるため、いささか単調で飽きが来る。面白ければいいとは思わないが、ある種の高揚感には必要ではないか。

イラク戦争反対のデモに参加したとき、横断幕を手先に先頭を歩きながら、たまたま隣に居合わせた女性と、「同じ言葉の繰り返しばかりで、つまらないね」と話したところ、前を行く主催者の耳に入り、「嫌なら出て行ってください」と怒られた。まだ途中だったので、ひとまず謝ってゴール地点まで黙々と歩いたことを思い出す。

## 東電本社前で

この日のデモは銀座コース。震災の影響もあつてか、沿道を行き交う人びとは多くないが、なんとか耳に届くように、「原発反対！ 原発止めよう！」と力いっぱい声をふりしほる。

なにごとかと振り向くひと。交通の邪魔とばかりに、迷惑顔のひとがいる一方、手を振って応えるひとなど、反応は様々まだ。

だいぶ歩いたところで、急に警備の警察官の動きがあわただしくなる。彼らが向かった先は東京電力本社前。東電を守るようにズラリと並んだ警官の隊列。私たちは一段と声を張りあげ、「原発やめろ」「子どもを守れ」などと、シュプレヒコールを繰り返す。

福島の子どものたちのことを思うと、たまらない気持ちになって涙が出た。

原発事故直後、政府と東電が隠さず正確な情報を伝えていたなら、子どもたちはマスクや帽子の着用、室内待機、飲み水や食料など、防護策をとれたはず。「ただちに健康に影響はない」などと、事態を過小に表現し、本当のことを隠蔽してきた罪は万死に値する。

戦時中同様、子どもたちを疎開させるべきではないか。このことを喫緊の国家プロジェクトと位置づけ、全国都道府県に協力を促し、学校の手配、住居の確保、父兄やそこに携わる人びとの雇用などに対して、国は迅速、スピーディーに思い切った予算をつけるべきだ。

「子どもは宝」というなら、多額のお金が使われても文句の声は少ないと思う。

## 浜岡原発止めるデモ

浜岡原発は、3つのプレートの重なる地に立ち、砂丘を防壁とする。「すでに老朽化していて、大地震に到底耐えられない」と久しく警鐘が鳴らされてきた。「浜岡原発止めようー」デモに参加した人びとの通底にあるのは、明日大地震が起きたら、間違いなく原発は倒れ、おびたしい放射能が拡散し、静岡全域のみならず、死の灰は他の地域にも運ばれる、という恐怖である。よほどの楽観主義者か、何事にも無関心なひと以外は、福島原発の事故を目の当たりにして、人生、子どもたちの未来、生活、命、健康、食料、水、大地、空気など、どれ一つとして欠かすことのできない大切なものを、原発が奪い去って返さないなら、廃炉にするしかないと考えるのが、至極真つ当ではないか。

5月6日、菅首相は「浜岡原発停止」を要請し、マスコミや多くのひとから一定の評価を得た。私もやれやれと安堵したもの、新たに防波壁をつくるわずか数年の停止。「いずれ再稼働」では意味がない。廃炉になるまで声を上げていこうと、改めてかたく決意。

## 渋谷、原発やめるデモ

高円寺反原発デモ（4月10日）には、なんと、1万5千人の人びとが集まったようだ。組織や指導者がほとんど不在のなか、危機感をもつ若者たちがネットの呼びかけに反応したかたち

だ。呼びかけ人のひとりである松本哉<sup>はじめ</sup>さんは高円寺のリサイクルショップ「素人の乱」5号店の店主。1974年生まれで、ネットで拝見する限り、どこにでもいそうなお兄さんといったところ。予想以上の反応には、驚きと、やればできるという確信みたいなものも生まれたはず。ネットでデモの様子を見ながら、万難排してでも次は参加しようと思っていたので、実際、5月7日に「原発やめろ、渋谷デモ」開催を知ったとき、出かけることに迷いはなかった。当日は、時おり小雨のパラつくあいにくの天気。それでもぞくぞくとひとが集まってくる。前回参加したデモに比べ、圧倒的に若いひとが目立つ。

デモ出発前には、社会学者の宮台真司さん、社民党党首の福島瑞穂さんの話など。そしてブログで一氣に有名になったタレントの藤波心さんが童謡「ふるさと」を歌う。

彼女は3月23日のブログで、「原発は危険。多少不便になっても原発はないほうがいい」と中学生らしい素直な気持ちを吐露。大変な反響で、絶賛の声が多数寄せられる一方、心ない中傷や嫌がらせの投稿もあったそうだ。

真つすぐにものごとを見つめ、真つ当な判断のできる中学生。彼女の歌をそばで聞きながら、「今頃の若者は」などと安易に言うべきではない。むしろ彼らは実にやわらかあたまではないか。

## 「出発をとめられて」

デモ出発時刻は3時だが、先頭が出てからは一向に動きがない。バンドの演奏もあり、かな

り辛抱強く待つなか、私のいる列近くの若者たちが声を揃えて、なにやら言っている。耳をすませば、立ちほだかる警官の列に向かって「さっさと通せ」「さっさと通せ」と要求している。ようやく出発となったのが、なんと4時過ぎ！ 待つだけで疲れたが、これからが踏ん張りどころと気合いを入れる。それからの道のりの長いこと。ちよつと歩いてはとめられることの繰り返し。今日、私たちの警備にいったいどれだけの警察官が集まっているのだろうか？

デモに参加して、いつも感じることだが、警官にもいろいろなひとがいる。丁寧に「車が通過します。お下がりください」と呼びかけるひと。「はい、下がって、下がって」と声を荒げるひと。なかには参加者を乗せようと挑発してくるひと。

この、のろのろデモにイラついて、若者がそれを態度に表せば、挑発してくる警官がいるかも知れない。どうぞそれに乗せられないで、とハラハラ。気が気ではない。

## 「渋谷交差点と真ん中」

沿道の人垣に驚き、気づけば、有名な「渋谷交差点」のど真ん中にさしかかる。

大声で「原発いらない」「原発とめろ」「原発やめろ」などなど、たくさんの人びとに向かって、夢中で叫んだ。沿道のひとに、「一緒に歩きませんか」と誘っているひともある。

デモ参加者は前回の高円寺デモくらいの規模とか。日本でこの数はスゴイことだが、ドイツやフランス、アメリカとは一桁違う。デモは特別のことではないし、特殊なひとの集まりでも



ない。もっと気軽に参加してほしい。10万単位になれば、日本のメディアも無視できない。日頃、足の強さだけは自慢で、何時間でも歩けると豪語してきたが、さすがに疲れ、足が痛い。あたりは、いつの間にやら日も落ちて、以前よりも遠慮がちに灯りがとる。7時半に、ようやくゴール地点にたどり着く。

## 参加者が逮捕されて

デモの列のなかにいると、全体の様子は、わからない。

後日、ネットでデモの様子を覗いてみた。チンドン屋さんのにぎやかな演奏まではよかったが、演奏中のサウンドカーに近づこうとして、先を急ぐ参加者とバンド隊の間を分断するように、大勢の警官がいて、ぶつかるかたちになった。警官が口々に「公妨（公務妨害）！」と叫んで、参加者を取り押さえている。あたりに絶叫や悲鳴が上がる。結局、逮捕され、連れていかれた。こんなことが起こっていたのかと愕然とする。デモの列は、こまかく分断され、規模の矮小化がなされたのは、これ以上、規模が拡大するのを恐れてのことか。なんとも悲しい。

参加することを恐れる必要はない。萎縮すれば、ますます声を上げにくくなり、為政者や権力者の、思うがままになる。全原発を廃炉に追い込むまで、私たちは行動しよう。若いひとたち、次世代の子どもたちに、おとながつくった負の遺産を渡してはならない。これを私たちおとなの責務としたい。

（千葉県在住）

# 甲斐ある未来へ

梅里 蓮

「日常文化の創造」。この実現が21世紀から先の「豊かさ」と呼べるものになってほしい。実現するにはどうすればいいのか、何が必要か、手立てを考え、この数年、模索してきました。価値観やライフスタイルに大きく関わることで、ゆるやかに変わっていったら、と願っていました。大震災を機に、国中が、電力に向き合い、ライフスタイル、価値観、エネルギー……、様々なことについて考え、見つめなおしている今こそ、思い切って変わるときなのではないでしょうか。

これまでのような大量生産、大量消費とは違う豊かさ。少し、便利すぎた道具やシステムだけではなく、温故知新、先人の知恵や思想に力をかり、手間をかけることを、甲斐と捉えてみる。甲斐は、〇〇甲斐とすがり、固執するのではなく、「打ち込む甲斐のある仕事」、「時間を費やす甲斐のある趣味」と充実を得ることと考えます。

震災後、節電のために、掃除機の使用をやめ、箒と雑巾がけで掃除をするようになりました。ササーッと掃除機で済ませていたときよりも、隅々までよく目が届くようになり、床や畳

を拭いていると、ただの掃除ではなく、家を磨く行為だと思え、充実感を得るのです。多少、掃除機より時間はかかりますが、充実感の効用か、ロスした時間は、工夫で補えるようになりました。

今後、炊飯器に代わり、土鍋でご飯を炊き、洗濯は洗濯機に頼りっぱなしにせず、できるときは、たらいと洗濯板で洗濯するなど、便利な機械と先人の知恵をバランスよく使う生活にしていきたい。

節電、電力使用の見直しというところ、「生活が不便になる」、「昔の貧しい暮らし（この考えも違和感）に戻るのか」という声が出てきます。また、「復興のためには自粛ばかりでなく、消費で社会を活気付けなければ」、「経済を回さないと日本はダメになる」という声もあります。復興は大切。社会に活気は必要。もちろん、そう思います。ただ、消費、経済を回す、といったこれらの意見は、戦後復興→高度経済成長→バブルを基準とした活気なのではないでしょうか。資源を無制限に使い、過剰なエネルギーを必要としたこれらの時代とは違う、活気ある日本の形というのものもあるのでは。

どういう形なのか……。

ひとが充実感を得て幸せになれる世とは、どんな社会か。これまでとは違うエネルギー消費でQOL（クオリティ・オブ・ライフ）を構築していくには、どうすればいいのか。活気ある

国であるためには、さまざまな産業の充実は不可欠。震災復興、それ以前からの不況による高い失業率の解決が必要。また、目を背けることのできない近年著しい環境問題、限りある資源の問題をどう解決していくのか。問題は山積み。

簡単ではありませんが、糸口のひとつとして、ここで再び温故知新。

実際に低エネルギー生活、低エネルギー社会で成り立っていたという江戸時代にヒントを得たい。

江戸時代は、それまでアジアから輸入していた様々な産物を、国産化するために技術力を持ち、多ジャンルに職人が生まれたそうです。

必要に迫られて技術開発し、職人による物づくりの国になり、産業が発展した江戸時代。活気があり、日常に文化が溢れる世では、甲斐ある仕事をし、甲斐ある娯楽を楽しみ、甲斐ある人生を送れたのではないか。だとすると、ひとつの「豊かさ」のあり方として、大いに学び、做えば、これから「豊かな社会」を創っていくためのお手本となるだろう。

震災によって仕事を失い、存続することができずに廃業する職人の方が大勢いるという。また、後継者がいないために、途絶えてしまったり、その危機にある職人の技術が、全国各地にある。

そこで、復興のひとつとして「職人支援・物づくり日本再生」ができないだろうか。被災地の職人支援と、各地の職人の後継者育成支援。全国各地に、好景気の遺産として有効活用され

ず、運用に悩む施設があるはず。そこを仕事場として提供する。

そして、できれば後継者育成のために、当面の住まいが提供されたら、手に職をつけたという人は、結構いるのではないか。雇用の創出にもなる。各地でそれができれば、過疎化していた地域の活性につながる可能性があると考えます。

実現に向けては、財源や支援方法、運営法、事業として成り立つかどうか、などの問題があり、簡単ではありません。職人育成、物づくり支援で、万事めでたし。すべてが解決なんてことはない。が、ひとつのキッカケ・変化が、別の変化を生み、活気が連鎖していく可能性はある。

省エネルギー生活、省エネルギー社会でも、日常に文化が溢れ、仕事や暮らしに甲斐がもてることが、これからのQOL、豊かさになってほしい。そうすれば、過剰なエネルギー供給がなくても構わないはず。ならば、危険と隣り合わせで安心できない原発は必要ない。

今の充実は未来へつながる。悲壮感ではなく、新たな時代の創造に参加するのだと思えば、甲斐のある日々になる、と思いませんか。そして、未来の子どもたちへ安心と豊かさを贈ることができるなら、最高の生きる甲斐になる。そう思います。

(ウエルカムエイジング・ナビゲーター)

# 中越より——柏崎と東日本大震災——

押見 操子

3月11日

うわ！ 地震だ！

棚を見上げる。今は何も落ちてこない。横揺れ。震度4ぐらいか。職場は2階。日本語準備室。揺れは続く。長期振動？

1階のカフェテリアには留学生がいる。らせん階段を下りて、カフェテリアに走る。留学生が数人、不安そうにソファにいた。

「大丈夫、地震は遠い。」

確信はなかった。留学生は不安そうにうなづく。

「怖いのは縦揺れの時よ。」

そう言いながらも、中庭に通じ

るドアを開け、避難路を確保した。

就職課の前にある天井から吊るされた飾りが大きく揺れているのが見える。

震源はどこだ。まさか、東京？  
子供たちが住んでいる。  
空を見上げた。

空は知らん顔をしていた。  
こうして東日本大震災の日が始まった。

日本中の人が出たのだろう。  
家族の安否を確認する。  
親類の安否を確認する。  
そして、テレビにくぎ付け。

大学は春休み。翌日は後期日程の入学試験だった。

東京の長男夫婦はそれぞれの職場に泊まり、ちゃんと布団で寝られたそう。次男は部屋にいた。友達らの安否を確認する。メールも続々と入ってくる。

映し出される映像。

地震、津波、そして、原発。  
なんとということだろう。

仙台の叔母と、いとも大丈夫だった。石巻の施設にいた叔父も無事だった。私は運が良かった。  
東日本大震災で亡くなられた方のご冥福をお祈りする。

怪我をされた方、心に傷を負われた方にお見舞いを申し上げます。

行方不明の方が無事でおられるよう、早く見つかるようお祈り申し上げます。

避難されている方にお見舞い申し上げます。

復興に力を尽くしておいでの関係者の方々にお礼する。

みなさま、どうかお疲れの出ませんよう。

## 中越沖地震のとき

中越沖地震で無人に見える原子力発電所から黒煙が立ち上っている画面を覚えておいでであろうか。あの原子力発電所は柏崎刈羽原子力発電所である。震度6強の震災に見舞われながらも、制御棒を入

れ、原子力発電所は無事停止した。後に東京電力の職員の薄氷の勝利についてはテレビで見たように思う。地震で家々は倒壊しているなかでの原子力災害の可能性を目の当たりにした。

ヨウ素剤が小学校にあるが、飲まなければならないかもしれないと考えた。防災無線に耳を澄まし、サイレンの音が聞こえないかおびえ、夜半の市長の「原発は大丈夫だ」という声に安堵した。行政の指示に従うつもりだった。

風向き次第で、逃げる方向が違ふことはわかっていた。もし、てんでに逃げなければいけない時は、一人で逃げ、集合は長野県上田市と決めていた。(今もそうである。)昨日のわが身である。

もし、あの時、原子力災害が起

こつていたら、我が家は原子力発電所から7キロ。10キロ以内なので当然立ち退かなければいけない。夫とネコと避難したと思う。失うものの大きさに身がすくむ。仕事、住居、ふるさと命までも、あの7月16日に失っていたかもしれない。

## 福島第一原子力発電所

未曾有の災害である。地震、津波、原子力災害。

当初、何とかなると報道されていたように思う。しかし、そうではなかった。本当のことは早く知らわかっていて、国民がパニックを起こさないように、ソフトランディングさせる為に、このように情報を小出しにしているのだ、と

いうような、うがった見方をする人もいる。

太平洋戦争当時の大本営発表と同じように、本当のところは隠しているのではないか。いや、今の時代、それはあるまい。

本当にわからなかったとしても、「想定していなかった」を連発されると、それはそれで恐ろしい。

今回、全国の皆さんも原子力発電について相当詳しくなったと思う。私は、今回はじめて知らされて驚いたことは、使用済み核燃料プールが、その原子炉建屋の中にあつたことだ。では、どこにあれば納得できたか、というと困るが、専用施設があるものだと、勝手に想像していた。確かに輸送とかを考えると合理的なのかもしれない。

被曝を考えると、その方がいいのかもしれない。しかし、原子炉、使用済み燃料ともに、一方が危険な状態にあれば他方に類が及ぶ心配は無いのか。使用済み核燃料のプールがそのままプール然としていたのは意外だった。水も密閉されていて、循環するのだと思っていた。

こわいものなので見ないようにつとめていた。恥ずかしいが、今でもそうだ。

福島第一原子力発電所は、柏崎ではよく目にするこぼだった。見学に行った人もいる。柏崎刈羽原子力発電所と福島原子力発電所は、東京電力が親だとすると、兄弟なのだ。関心が無いわけがない。原子力発電所で働いている人も多

いし、東京電力の社員、その家族もたくさんいて、友達なのだ。子供が学校で一緒だった人たち、趣味のサークルで一緒の人たち。

「原子力発電所が悪い、当然廃炉」とは、なかなか言えない。

しかし、5月14日時点で福島第一原子力発電所1号機はメルトダウン事故状態で、原子炉格納容器と圧力抑制室に繋がる配管のつなぎ目部分から、水が漏れていると、東京電力は見ている。誤解を恐れずに素人考えを言うと、原子炉格納容器が、本当に完全であるのか、まだわかっていないのではないかな。行程表を作って、原子力発電所事故の収束に頑張っているが、想定していないさらなる被害拡大があるのではないか。とくに地元の



自然や生活に対して。当事者はな  
お不安に違いない。

二千人の被災者の受け入れ

いま、柏崎市は約2千人の被災者を受け入れている。4月1日現在の小学校、中学校の編入数は、161人。新潟県内の他市と比べても一桁違う。来年度、廃校の決まった小学校にも2人の編入生があつた。かなりの数だといえる。

被災した方がたは、柏崎市内4箇所の避難所として指定された施設に泊まっていただいた。(いまは、市内の宿泊施設)

ほかに係累けいらいや友人を頼ってきた人びとがいる。多くは福島の方がただ。原子力発電所はこりこりなはずなのに、「また原子力発電所

の立地場所に避難するなんて」と思われるかもしれない。それも、理由があつてのことだろう。

中越沖地震では全国の皆さんにお世話になった。少しでも恩返しができればと、不器用に受け入れをしている。

なかなか先が見えない状況ではある。

スパーYのおじさんが、レジ  
で新聞を見ていた。風評被害が出  
ている県の農産物が並んでいる。  
「このイチゴ、（風評被害の応援）  
ってわけ？」

と聞くと、

「他人ひとごとじゃないでね。」

と、おじさんが答えた。

「あした、うち、休みだから、もうひとつ、どうだね、安くしと

くけど。」

つい、もうひとつ買った。

本当に、他人ごとではない。あ  
すは、わが身なのだ。

## 新潟県会議員選挙

新潟県選挙は、4月1日に告示された。柏崎刈羽区は2議席を争うのだが、自民党現職の有力候補の出馬のみで無投票とみなされていた。しかし、直前に柏崎刈羽原発反対地元3団体の刈羽村の元村会議員が立候補し、激戦となった。焦点は、原子力問題で、原子力発電所に関心ある浮動票の行方だった。「固められた票」は結構ゆるぎないので、上乗せ部分がどうなるかで選挙結果は、きまる。

2人が議席を守った。

2位当選と落選の票差は、1750票差であった。投票率は64・16パーセントで、前回選挙を下回り最低記録を更新した。

(柏崎日報4月5日から4月11日の記事を参照)

## 柏崎市議会議員選挙

4月17日が告示。

定数26に、30人が立候補した。震災で、自粛ムード。選挙カーがやかましいということは無かった。静かな選挙だった。

とはいえ、柏崎刈羽原子力発電所は争点である。どの候補も「原子力発電所の事故は起こさせません(運転を停止するにせよ、運転を継続するにせよ)」というよう

な気がした。

反対派はもとより、賛成派も、賛成派だからこそ、「事故は起こさせません」なのだ。

投票は4月24日。

トップ当選は女性で、3期目の議員2747票。2位は上位常連の元気な若手、2674票。そして、14票差の3位は、先輩議員の退任を機に、東京電力労組柏崎刈羽原子力総支部から擁立された新人候補だった。

柏崎日報4月25日の記事によると、「震災前是有権者への訪問活動を行なったが震災後は活動を中止、組合員を中心に地固めを図った。」とある。当選確実がわかったても、「万歳などのセレモニーはなく、東日本大震災の被災者への

黙とうなどを行う、粛々とした初当選を祝った。」とある。

原発の監視役を自認している議員は、7期目を5位で200票上乘せして当選した。ある意味で当たり前であろう。

議会傍聴に行くと、どうしても原子力発電所にかかわる案件が出る。おもしろくなくても、やはり必要なものは必要なのだ。原子力発電所の情報の共有化、透明性の確保は、議員だからできることがある。

投票率は66・64パーセントで過去最低を更新した。「やれやれ」である。

こういう決断を柏崎市は、しているのである。

(柏崎日報4月17日から4月25

日の記事を参照)

## 柏崎刈羽原子力発電所

東京電力としては、「失った福島第一原子力発電所、第二原子力発電所の分まで、柏崎刈羽原子力発電所が頑張ってくれたらいいと思うだろうな」というのは、想像に難くない。しかし、じゃあ、そういうことで、できるわけが、ないではないか――。

柏崎刈羽原子力発電所は毎月定例記者会見をしている。4月14日になって、やっと所長が記者会見をした。普通、地元に向けて、なにか発信してもよさそうなものだが。言質を取られることを嫌っているのかもしれない。

新潟県も福島の事故を受けて、

県防災計画の見直しを行うこととした。

原子力発電所では、さまざまな対応策を考えた。「安全である」「安心である」と訴えた。津波対策には「防潮堤を新たに作ります」など、存続をかけて案を練っていると思われる。

それについては、まだ議論は尽くされていない。

人生には、「上り坂」と「下り坂」がある。そして、「まさかという坂」があるという。

「まさか」は、どこにあるかわからない。

でも、自宅から7キロのところに「まさか」という坂があったら……。

(2011年5月15日記)

## 「各地からの原稿」を お待ちしています

北海道から沖縄まで、南北に長いニッポン。各地の状況も、多種多様です。——あなたのお住まいの土地で、感じたことを、どしどし発信してください。お待ち申し上げております。

〒160-0022

東京都新宿区新宿 1-9-4-1004 あごら編集部

TEL 03-3354-3941 FAX 03-3354-9014

E-mail: XLV 05467@nifty.com

# 日米両政府は「火事場泥棒」？

——大震災を利用した軍備強化を懸念する

浦島悦子

## 大震災・原発事故に思う

「2011年3月11日を境に、世界の見方が変わってしまった」と感じているのは、私だけではないだろう。東北・関東大地震に次

え、これほど恐ろしいのだから、被災され、累々たる瓦礫の前に立ち尽くすしかない人びとの胸の内は、いかばかりかと、胸つぶれる思いだった。

ぐ恐るべき津波が、万全と思われた10メートルの防潮堤をも軽々と越え、一瞬のうちに、建物も車も、人びとが汗を流し、日々の努力を

大切な家族や親しい人びとを失い、2か月以上経っても生活再建もままならない被災者の方がたに、一日も早く心安らかな日々が訪れることを願うばかりである。

積み重ねて作ってきた田畑や暮らしの営みも、ことごとく押し流し、人間を含めた、おびただしい命を奪い去っていく光景を、遠く離れた沖縄で、テレビの画面で見てさ

それでもまだ、天災からの復興には希望があると思う。自然の脅威の前になす術もない経験は、自然を人間の支配下に置けるという思い上がりを払拭した。

これまでの生き方を根本から問い直し、自然の法に則った人間の新しい文明への出発を促してくれている。

しかしながら、津波が誘発した原発事故という人災は、「復興」の2文字を拒否するかのように、私たちの前に立ちはだかっている。

実は、私の出身地である鹿児島県薩摩川内市にも、川内原発1号機・2号機があり、さらに、3号機が計画中だ。これまで、原発に反対の気持ちは持ちながらも、積極的に運動に関わることはなく、

結果的に黙認してきた私にも、いまだ終息のめども立たないまま、日々大量の放射能をばら撒き、地球環境を汚染し続けているこの事態に対する重大な責任がある。

しかし、その責任感とはうらはらに、若い子どもたち、そして次の世代に対して、空気も、水も、土壌も、人間にとってだけでなく地球上のすべての命にとって、もつとも基本的な生きる基盤を汚染し、破壊してしまった責任を、どうやって取れるというのか……、途方にくれるばかりだ。

作ってはならないものを作ってしまった、神の手の中に置いておくべきものを「自分たちが制御できる」と思った人間の傲慢さが、子どもたちの未来を奪ってしまった

たのだ。

救いはないように思えるけれど、あきらめることは許されない。

この期に及んでもまだ、原発推進の勢力は根強く、私たちがあきらめれば、事態は、よりいっそう悪化するからだ。

原発の新設中止（今のところ沖縄に原発はないが、沖縄電力は小型原発の開発に向けた研究を行なっており、福島原発の事故後も、その姿勢を変えていない）、事故を起こしたり、老朽化したものはもちろん、すべての原発の廃止に向けて全力を上げることが必要だ。廃炉にしたあとも、気の遠くなるような長い期間の閉じ込め、管理と監視が必要な毒物を、次の世代に残さなければならぬことが、

やりきれない。

## 思いやり予算は被災地へ

福島原発事故の発生後、沖縄でも、軍事基地をめぐる構造と原発をめぐる構造との共通性・類似性が指摘されている。

必要だ（と思われる）が嫌われものの「迷惑施設」を押し付けられるのは、貧しい過疎地や離島など、差別され、あるいは陽の当たらなかつた地域であり、これまで見たこともない莫大なカネに目をくらまされ、気づいたときにはがんじがらめにされて、もう抜け出そうにも抜け出せない、悪循環に陥っている……。

もちろん、沖縄の米軍基地の場

合は、歴史的・政治的に、もっと根深く複雑な問題が絡み合っており、単純に比較することはできないが、原発も軍事基地も「必要だ」という思い込みを、地元だけでなく、全国民が払拭しなければ問題は解決しないだろう。

しかし、民主党政府は、原発事故を原発廃止の方向でなく、「より安全な原発」推進へと導こうとしているように見える。

同様に、沖縄の軍事基地に関しても、日米の権力者たちは今回の大震災を利用して、むしろ、逆の方向へ、つまり、それをより強化する方向へ進もうとしている。

2010年会計年度最終日の、3月31日、国会において、今後5年間の在日米軍駐留経費負担予算

＝思いやり予算（日本政府が支出している米軍基地関係経費のうち労務費、光熱水道費、提供施設整備費、グアムへの訓練移転に関わる経費等）が、駆け込みで承認された。

大震災と原発事故で被災した多くの人がびとが援助を求め、その救済・復興予算の捻出に苦慮しているはずの日本政府が、在日米軍を支援するために、年間1881億円もの血税を支出するというのだ！

在日米軍は、震災救援への派遣を、「トモダチ作戦」と名付け、その担当者として、あろうことか「沖縄人はゆすりとかかりの名人」「ゴーヤーも作れない怠け者」などと発言して沖縄県民の猛反発を浴び、米國務省日本部長を更迭さ

れたケビン・メア氏を起用した。

全国のメディアは、米軍の動きを称賛し、米軍駐留や在沖海兵隊の必要性を強調する報道を行なったが、米軍の支援は金額にして60億円に過ぎず、しかも原発災害の及ばない安全圏での活動に過ぎなかった。

沖縄では、「思いやり予算を返上するのがほんとうのトモダチ」という声が強く、「震災復興に恩を着せて、（滞っている）辺野古新基地建設を進めるのではないか」「自衛隊の災害救援を美化する報道が、宮古・八重山地域への自衛隊配備計画を後押しするのではないか」と、日米両政府による「火事場泥棒」を警戒している。

## 日本は米国の植民地？

その懸念を裏書きするように、民主党政府は4月末、辺野古新基地の滑走路をV字型にする方針を決定した。

「少なくとも県外」を掲げて出発したはずの政権が、打倒の対象であった自民党案＝前政権の遺物に、そっくりそのまま回帰してしまったのだから、あきれるほかはない。また米国は、(沖縄県民の反対で) 辺野古移設が進まなければ「普天間基地はずっと残る」と脅し、「普天間基地の固定化は県民に責任がある」と言わんばかりだ。

北沢俊美防衛大臣は、ゴールデンウィーク最中の5月7日に来沖縄、政府方針を仲井眞弘多沖縄県

知事に伝えるはずだったが、その直前の4日、ウィキリークスが「普天間基地移設問題をめぐる日米間の裏取引、米政府と内通する外務官僚の実態などを暴露する米公電」を公開。その直後だったためか、滑走路の形状など具体的な内容にまで言及することはできず、「日米合意への理解を求める」ことに終始した。それでも来沖したのは、六月開催予定の日米安保協議委員会(2+2)<sup>ツウブラスツウ</sup>や日米首脳会談に向けてのアリバイ作りと見られている。

当日、沖縄平和運動センター、平和市民連絡会などの市民・労働団体は、「県内移設反対の県民意思は変わらないことを、北沢大臣に示そう」と抗議行動を呼びかけ、

私たち名護勢も、ヘリ基地反対協議会、辺野古テント村の仲間たちと一緒に参加した。

梅雨の晴れ間、真夏のような陽射しが照りつける沖縄県庁入口周辺の歩道を埋めた県民は、汗だくになりながら「北沢大臣は県民の財産＝県庁に入るな!」「日米合意を撤回せよ!」と声を上げた。

平和市民連絡会共同代表の高里鈴代さんは、「北沢さん、あなたが今日ここに来るのは沖縄県民への犯罪を上塗りすることです」と断罪。宜野湾市議の玉元かず恵さんは、「私は民主党に所属していますが、普天間基地の固定化は絶対に許しません」と強調した。

翌日の地元紙報道によれば、北沢大臣と「県外移設」を求める知

事との会談は平行線に終わり、時間切れで切り上げようとした大臣に、知事は再度「県外移設」を迫って食いがつたという。自民党推薦の知事も、県民世論をバックに頑張ってくれているようだ。

翌8日、北沢大臣は陸上自衛隊宮古島分屯基地（レーダーサイト）を視察し、宮古島市の下地敏彦市長に、宮古・八重山への自衛隊配備に向けた協力を要請した。

危機感を持つ島民らが抗議行動を行なったという。

沖縄には、米軍も自衛隊もいらない！軍備強化のための沖縄詣では、税金の無駄遣いだ。そんなお金があれば東北の復興に使って欲しい。

ウィキリークスの公開内容につ

いて、沖縄地元紙は、連日、シリーズで詳しく報道したが、私たち県民にしてみれば、驚くというより、「やはりそうか」「推察していたことが裏付けられた」という思いだ。

それにしても、暴露された日米外交の実態は、あまりにも情けなく、腹立たしい。国民を騙し、沖縄を踏みつけにして、ここまで米国に媚びなければならぬのか！

朝日新聞以外の全国メディアはほとんど報道していないというが、全国民が、米国の植民地としか言いようのない実態を知るべきだ。

「米上院軍事委員会のカール・レビン委員長らが、普天間基地の嘉手納基地への統合案を国防総省に提案した」と、13日の地元紙は

報道した。

嘉手納統合案自体は、これまで何度も出てきては、その度に地元の猛反発や嘉手納基地を使用する米空軍の反対で葬り去られた亡霊のような案だが、その理由として、現行の辺野古移設計画は「非現実的」で、「実行不可能」だという意見が、米国側から出てきたことは、注目すべきだろう。

あと一歩、県内移設そのものが「実行不可能」であることを、米国に（そしてもちろん日本政府にも）理解させ、「普天間基地の無条件撤去」をめざしたいと思う。

（2011年5月14日記）

（へり基地いらない

二見以北十区の会 共同代表）



[illegible]

大震災

地震・津波、そして福島原発の被災者の皆様、心からお見舞い申し上げます。

昭和27年、高校3年生の時、社会科学の自由研究で「原子力問題」の小論文を書き、年史文集にのりました。

当時の高校生が理解していた「危険な放射能をコントロールする困難さ」が、その後の政治主導と企業論理で「安全神話」にすり変えられてしまい、今や日本国の根幹を揺るがしています。

本屋には、今までお目にかかることがあまりなかった反原発の本が、ここぞとばかり、山積みになっています。

何を言つても後の祭り。むなしさで  
 杳然自失となり、何も手につきません  
 でした。

私の世代は、大本営発表、そして原  
 発安全報道、と、二度もだまされて  
 しまいました。

現在の義務教育では、「原子力発電は安全」とばかり教育していたとか。

子どもたちや孫たちに申し訳ない気持ちです。  
(千葉 野村三枝子)

\*

3・11の揺れは、千葉北総でも激しかった。テレビをつけた。ツナミが、ツナミが、映されていた。

本当なんだ。祖母が幼い私に伝えてくれた話。浜名湖が海とつながった話。

「今切れ」(1498年、明応7年の大津波)は、太平洋と浜名湖がつながった場所。こどもの頃、私は浜名湖のほとりの村に住んでいた。

祖母が経験したのではない、むかし

むかしの話。山の上へ逃げて昔の人が助かった話。「地震の時は竹藪へ。ツナミの時は山にある秋葉神社へ逃げるのだよ。」と諭した祖母。

地震、津波、ツナミのあとは原発事故。  
原発事故の時はどこへ逃げたらいいの？  
逃げる場所は、20キロ先、30、40、  
50、……？

私は、生涯現役で働きたいと考えていた。定年後は農業。私の天職は農業。だけど、土地は、ない。50坪ほどの土地を購入した。二毛作・三毛作と有効利用すれば、少ない家族の野菜は賄える。そう考えて菜園仕事に精を出してきた。それが原発事故騒ぎで、「この北総の地にも健康被害をもたらすものか、風に乗ってやってくるのではなかいか」と心配になっている。

つくづく思うのである。「原発は高価なエネルギーだ。そして命を破壊させるものだ」と。今がよければよいのではない。「自然を大切に。美しい地球を、緑を、花を、命を、大事にしたい」と。四季のある日本の自然は素晴らしい資源をもっているのでは……とも。

(千葉 桑原ちえ子)

\*

3月11日、私用がすみ、さて、〈あごろ〉に行こうとした矢先、グラグラとした。横揺れが長く、「何、これ」と、ひとりごと。6階にいたので、揺れが怖かった。すぐ息子に電話。無事を確認。次に、〈あごろ〉に電話。固定電話だったのに、すでに繋がらなかった。

余震が続いていたので、「今日は〈あごろ〉へは行けない。でも斎藤さんが心配」と電話をかけ続けたが繋がらなかった。夕方6時過ぎに夫が帰ってきた。

て、「地震の時〈あごろ〉の事務所近くにいたので、君がいると思う、チャイムを鳴らしたけど誰も出てこなかった」と言うので、ますます心配になり、夫と一緒に歩いて〈あごろ〉に向かった。ドアを開けると同時に「斎藤さん、大丈夫！ 怪我はな〜い？」「大丈夫」と、斎藤さんの声を聞いて、ひと安心。10階なので、相当揺れたらしい。入り口から奥まで足の踏み場もなく、大事な本が散乱。パソコンも落ちていたが、被害はなかった。この日は通れるスペースをつくって、帰宅難民の波に混じって、歩いて自宅に戻った。

「斎藤さんに怪我がなくて本当に良かった」と思いながら……。(N)

### 【編集後記】

◆地震が起きるたび「原発！」と叫ぶ口ぐせは、いつ頃からだろうか。

「原発反対」に手を上げたのは、二十数年前のことだが、実際にデモなどの行動に出たのは、「東海村JCO臨界事故」のときだった。

地震学者 石橋克彦氏が、朝日新聞論壇(当時)に投稿された警鐘論文は、ボツとなり、サンデー毎日に掲載された。それが「原発震災」で、これを読んできて、「この世で一番怖いのは、原発事故だ」と思うようになった。

「次」はダメ。絶対ナシだ。だから全基廃炉しか、あり得ない！ (綿)

◆「天災は忘れた頃、訪れる」と言われますが、今度の大地震、「まさか」と思い込んでいた人びとを突然襲い、地震の怖さ、大津波の怖さを、骨の髄まで実感させました。

人びとを恐怖させたのは、この、天災にも増して凶悪な人災、〈原発〉の破壊力だったことを、肝に銘じます。(京)

## 〈あごら〉は、人と人が出会うひろば――

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

## 〈BOC〉の登録もどくぞ……

一九八〇年に生まれた〈BOCバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上〈あごら〉会員の方に限ります。

### 連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿 一〇九-四 中公ビル  
電話 03-3354-3941 (代表) FAX 03-3354-9014  
Eメール XLV05467@nifty.com または boc@mb.infoweb.ne.jp  
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

---

あごら 329号 東日本大震災に想う

- 編集 あごら新宿 ●発行 2011年5月20日 ●印刷 藤田印刷(株)
  - 発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル10F
  - TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com
  - 定価 本体1,200円＋税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部
-



9784893061867



1920036012008

ISBN978-4-89306-186-7  
C0036 ¥1200E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,200円+税

平和と平等を追求する  
『あごら』近刊シリーズ

東日本大震災に想うⅡ

六〇代は女ざかり

「女の年金」を考える

企画・編集・翻訳…  
何でもご相談ください

創業1960年 —  
女性専門職集団  
**BOC**

各種プランニング  
各種調査

取材・撮影・編集

校正・デザイン・レイアウト  
各国語翻訳その他

男女共同参画の  
BOCシニアも  
スタートしました。

ベテランの知恵と経験を  
お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354-3941 FAX3354-9014

E-mail XLV05467@nifty.com

サイレントマイノリティのBOC出版